第６章　茅原大墓古墳の葺石の石種とその採石地

１．第２次調査の葺石の石種とその使用傾向

桜井市茅原に茅原大墓古墳がある。墳丘の前方部東側に設定されたトレンチにみられる下段の葺石を裸眼で観察した（図106参照）。石材の石種の特徴、使用傾向について述べる。

（１）石種の特徴

葺石の石種は柘榴石ペグマタイト、黒雲母花崗岩Ａ、斑糲岩Ａである。これらの石種の特徴について述べる。

柘榴石ペグマタイト　色は灰白色で、粒形が亜角～亜円である。ペグマタイト構造が顕著で、基質をなす長石に粒状をなす石英や柘榴石が散在する。石英・長石・白雲母・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒状で、粒径が３～10㎜、量が中である。長石は灰白色で、粒径が３～20㎜、量が非常に多い。白雲母は無色透明、板状で、粒径が３～４㎜、量がごく僅かである。柘榴石は濃赤色、粒状で、粒径が１～２㎜、量が僅かである。

黒雲母花崗岩Ａ　色は灰色で、粒形が亜円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が３～６㎜、量が多い。長石は灰白色、粒径が３～８㎜、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が２～３㎜、量が中である。

斑糲岩Ａ　色は暗灰緑色、灰緑色で、粒形が角、亜角である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が１～４㎜、量が中である。角閃石は黒色、粒径が３～６㎜、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が２～５㎜、量が多い。

（２）石材の使用傾向

観察した葺石の石材は48個である。石種構成は、柘榴石ペグマタイトが約２割９分、黒雲母花崗岩Ａが約１割３分、斑糲岩Ａが約５割８分である。石材のみかけの長径は、５～９㎝のものが約１割３分、10～19㎝のものが約２割９分、20～29㎝のものが約１割９分、30～39㎝のものが約２割９分、40～49㎝のものが約１割である。使用石材の特徴としては斑糲岩Ａが多く、粒径が大きな石材が使用されているといえる（表７参照）。

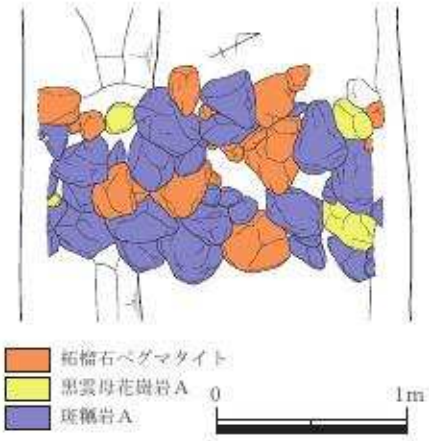


図106　２トレンチ葺石の石種（S＝1/40）

２．第３次調査の葺石の石種とその使用傾向

茅原大墓古墳の墳丘は畑地となっていたためか、階段状に石垣が積まれている。この石垣の石種は自然石の斑糲岩が半数以上を占めている。数か所にあけられたトレンチで、当古墳が築造された時期

表７　２トレンチの葺石の粒径

石種	石材のみかけの長径　(cm)					合計
	5～9	10～19	20～29	30～39	40～49	
柘榴石ペグマタイト	5	4	1	3	1	14
黒雲母花崗岩Ａ	1	2	1	2		6
斑糲岩Ａ		8	7	9	4	28
合　計	6	14	9	14	5	48

の葺石がみられたのは北側に設定された３－３トレンチのみである。葺石は基底部が残存し、天端部（肩部）が消滅している。石材は畑の石垣に転用されたと推定される。残存する葺石を裸眼で観察した（図107）。石種の特徴、石材の使用傾向について述べる。

（１）石種の特徴

観察した石材は全て川原石様の自然石で、割石や剥石がみとめられない。石種はアプライト、白雲母花崗岩、片麻状黒雲母花崗岩、斑糲岩である。石種の特徴について述べる。

アプライトＡ　色は灰白色で、粒形が亜角である。基質をなす長石の中に柱状の石英がみられるペグマタイト構造を示すものもある。石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が２～８㎜、量が多い。長石は灰白色、粒径が２～６㎜、量が多い。

白雲母花崗岩　色は灰白色で、粒径が亜角である。石英・長石・白雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が１～２㎜、量が中である。長石は灰白色、粒径が１～２㎜、量が非常に多い。白雲母は無色透明、板状で、粒径が１～２㎜、量が僅かである。

片麻状黒雲母花崗岩　色は灰白色で、風化しているためか砕けやすい。顕著な片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5～１㎜、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が１～1.5㎜、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～１㎜、量が僅かである。

斑糲岩Ａ　色は暗緑色で、粒形が亜角～亜円である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が１～３㎜、量が中である。角閃石は黒色、粒径が２～５㎜、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が２～６㎜、量が中である。

（２）石材の使用傾向

観察した70個の石材は全て自然石で、割石や剥石、加工石がみられない。石種的にみれば、斑糲岩Ａが約６割１分、アプライトＡが約２割７分、片麻状黒雲母花崗岩が約９分、白雲母花崗岩が約３分である。斑糲岩Ａとアプライトで、約９割を占める。このような石材の使用傾向は箸墓古墳の前方部北側付近、ホケノ山古墳の括れ部付近、堂ノ後古墳の周濠内等にみられる葺石の使用傾向に似ている。天理市の上ノ山古墳、東田大塚古墳に使用されている葺石の石種構成とは異なる。斑糲岩やアプライトは巻向川の川原石に多くみられる。箸墓古墳、ホケノ山古墳、堂ノ後古墳、茅原大墓古墳は葺

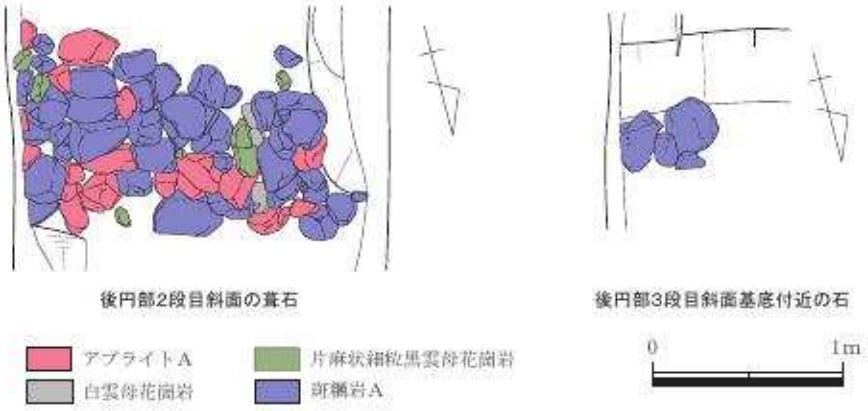


図107　3－3トレンチ葺石の石種（S＝1/40）

表8　3－3トレンチの葺石の石種とみかけの長径

石種	2段目斜面の葺石のみかけの長径　(cm)				3段目斜面の葺石のみかけの長径　(cm)				合　計
	5～9	10～19	20～29	30～39	5～9	10～19	20～29	30～39	
アプライトA	1	10	5	3					19
白雲母花崗岩		1	1						2
片麻状黒雲母花崗岩	1	4		1					6
斑糲岩A	2	15	18	4		2		2	43
合　計	4	30	24	8		2		2	70

石の採石が巻向川でできる条件にあった古墳といえる。

3．第4次調査の葺石の石種とその使用傾向

茅原大墓古墳の第4次調査で出土した墳丘の葺石材を裸眼で観察し、石種を同定した（図108、109）。石材の石種の特徴、使用傾向について述べる。

（1）石種の特徴

識別した石種の特徴について述べる。

黒雲母花崗岩B　色は灰白色で、粒形が亜円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2㎜、量が中である。長石は灰白色、粒径が1～2㎜、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1㎜、量が僅かである。

片麻状細粒黒雲母花崗岩　色は灰白色で、粒形が亜円である。顕著な片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2㎜、量が多い。長石は灰白色、粒径が1～2㎜、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～1.5㎜、量が僅かである。

片麻状粗粒黒雲母花崗岩　色は灰白色で、粒形が亜角である。顕著な片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が3～8㎜、量が中である。長石は灰白色で、

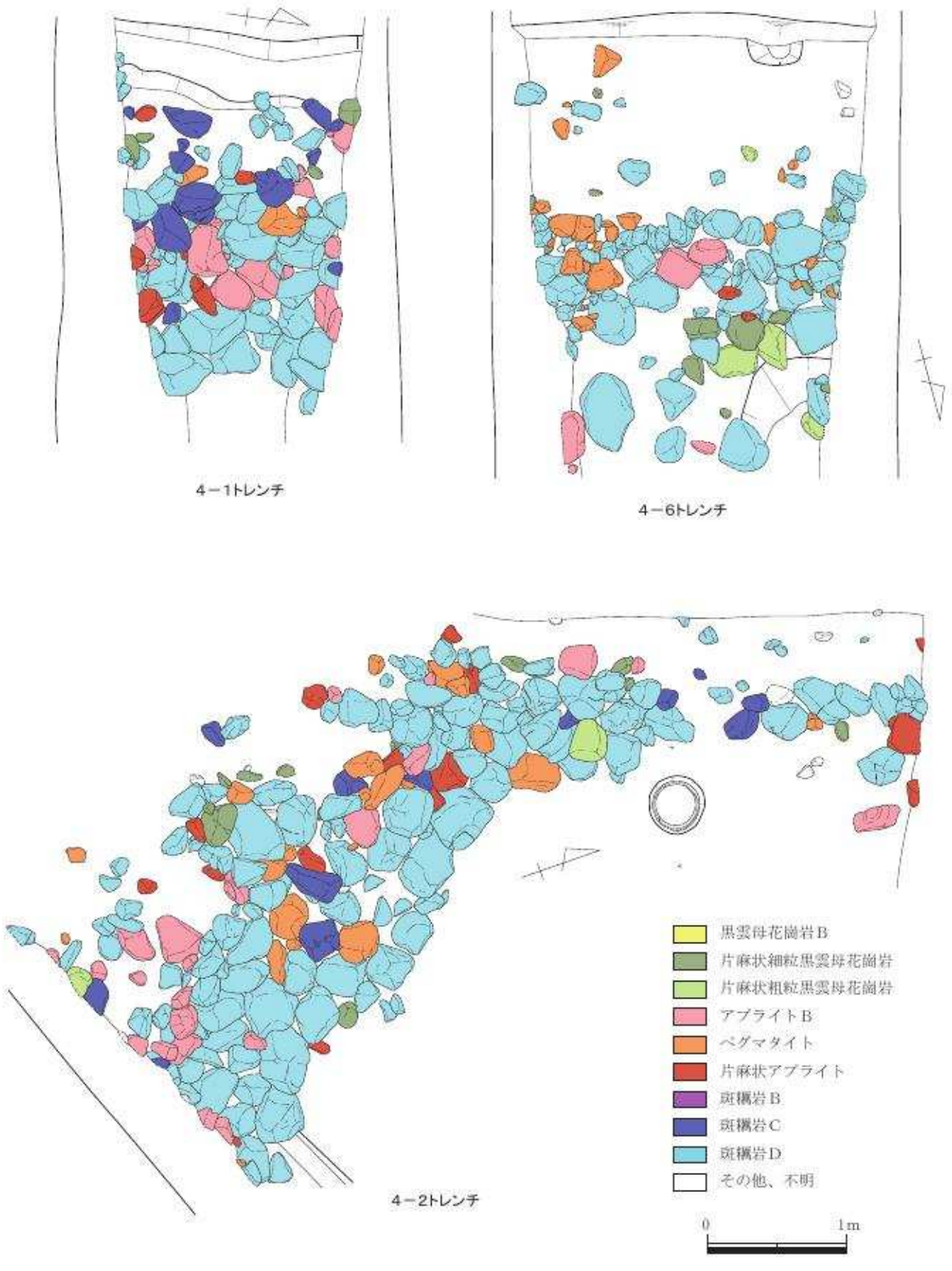


図 108　第４次調査トレンチの葺石の石種①(S＝1/40)

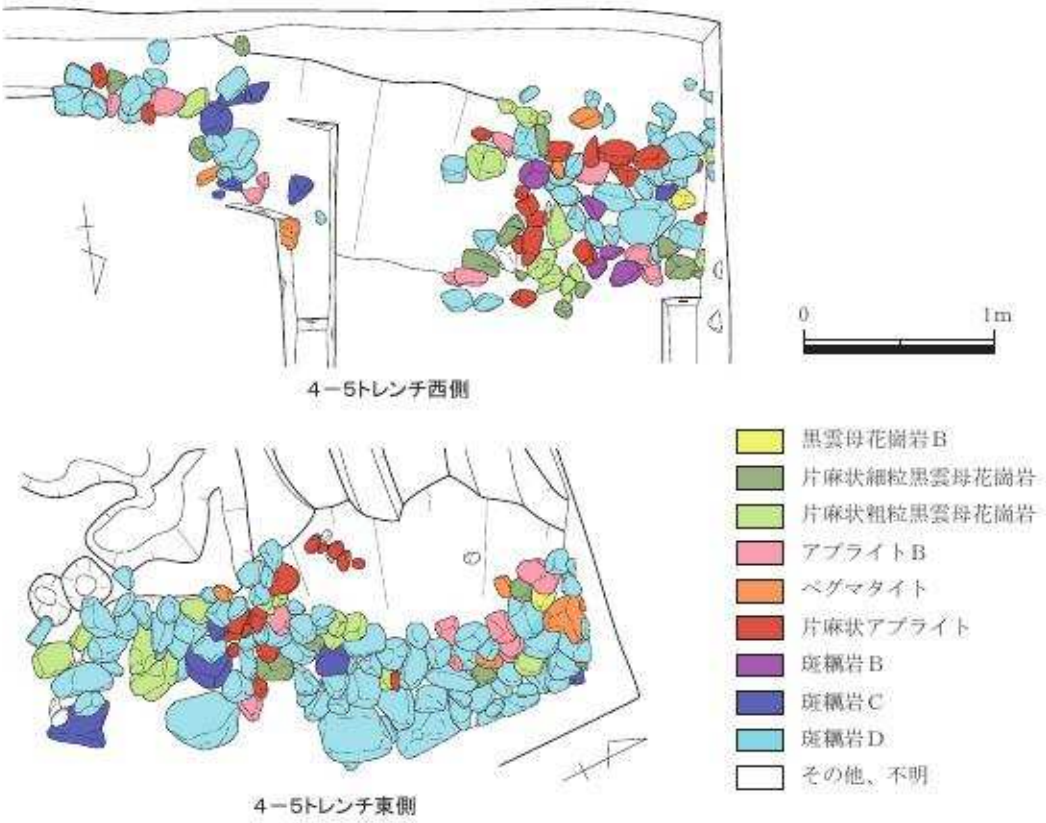


図109　第4次調査トレンチの葺石の石種②(S＝1/40)

ややレンズ状をなし、粒径が5～30㎜、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒径が0.5～1㎜、量が僅かで、レンズ状に集合する。レンズの長径が15～30㎜、厚みが3～4㎜である。

アプライトB　色は灰白色、粒形が亜角である。石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～8㎜、量が中である。長石は灰白色、粒径が3～8㎜、量が非常に多い。

ペグマタイト　色は灰白色で、粒形が亜角である。石英と長石が噛み合っている。石英は灰色透明、粒状で、長石中に斑晶状に散在する。粒径が3～6㎜、量が中である。長石は灰白色、粒径が8～40㎜、量が非常に多い。

片麻状アプライト　色は灰白色で、粒形が角である。片麻状をなす。石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2㎜、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が1～3㎜、量が非常に多い。

斑糲岩B　色は茶褐色で、粒形が円、風化している。細粒～中粒の斑糲岩と推定される。

斑糲岩C　色は暗灰緑色で、粒形が亜角である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～4㎜、量が多い。角閃石は黒色、粒径が1～4㎜、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が1～3㎜、量が僅かである。

斑糲岩D　色は暗灰緑色で、粒形が亜角である。粒状の暗緑色塊が散在する。その長径は1～3㎝で、量が多い。暗緑色塊には粒状の角閃石と輝石が集合している。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～4㎜、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2～4㎜、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が2～3㎜、量が僅かである。

表９　第４次調査トレンチの葺石の石種とその長径

調査地点		４－１						４－２						４－５東側						４－５西側		４－６						合計
石材のみかけの粒径（cm）		5～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	5～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	5～9	10～19	20～29	30～39	40～49	5～9	10～19	20～29	5～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	
石種	黒雲母花崗岩B													1	1					1								3
	片麻状細粒黒雲母花崗岩		2	4				2	8	2	1			1	3	1			3	6	1	3	6	3				46
	片麻状粗粒黒雲母花崗岩									1	1				8	3			3	6	4			1	2			29
	アプライト	4	5	3	3	1			9	10	4			2	8	2				5	2	1	1	1	2			63
	ペグマタイト	1		1	1			3	8	5	3	1		1	4	1				3		7	12	5				56
	片麻状アプライト	1	5	2				4	10	7	1			5	9				4	12	2		2					64
	斑糲岩B																			4	1							5
	斑糲岩C		8		4	1		1	7	4		1		1	2	2	1	1		6								39
	斑糲岩D	4	21	15	9	4	1	7	53	38	30	10	1	5	49	17	2	2	5	27	10	13	35	18	7	3	1	387
	その他							1	4										1	1			2					9
合　計		10	41	25	17	6	1	18	99	67	40	12	1	16	84	26	3	3	16	71	20	24	58	28	11	3	1	701

（2）石材の使用傾向

墳丘に設けられたトレンチで、葺石が観察できたのは4－1トレンチで100個、4－2トレンチで237個、4－5トレンチの東側で132個、同トレンチの西側で107個、4－6トレンチで125個の合計701個である（表9参照）。

葺石のみかけの長径は5～54cmで、10～29cmの長径を示すものがトレンチ別にみれば66～86％を示す。4－1・4－2・4－6トレンチの葺石は一段目斜面、4－5トレンチ東側の葺石は前方部の中段の葺石、4－5トレンチ西側の葺石は後円部中段の葺石である。一段目と中段の葺石の長径をみれば、10～29cmのものが一段目ではトレンチ別にみれば66～69％、中段では84～86％を占めている。また、30cm以上のものは一段目では12～24％、中段では0～4％を占め、一段目に粒径が大きな石材が使用されているといえる。

葺石の石種は、黒雲母花崗岩B（0.42％）、片麻状細粒黒雲母花崗岩（6.56％）、片麻状粗粒黒雲母花崗岩（4.13％）、アプライトB（8.98％）、ペグマタイト（7.99％）、片麻状アプライト（9.12％）、斑糲岩B（0.71％）、斑糲岩C（5.58％）、斑糲岩D（55.20％）、観察不良（1.28％）である。観察不良の石材を除き、前6種類を花崗岩類、後3種類を斑糲岩類とすれば、前者の石材が37.71％、後者が62.28％となり、6割以上を斑糲岩類が占めている。また、粒径でも斑糲岩に大きなものが多い（表9参照）。

4．第5次調査の葺石の石種とその使用傾向

茅原大墓古墳の第5次調査の5－1・5－2・5－3トレンチから出土した葺石を裸眼で観察した。観察結果から、石材の石種の岩相と石材の使用傾向について述べる。

（1）石材の石種

観察した葺石の石種は、黒雲母花崗岩B、片麻状黒雲母花崗岩、ペグマタイト、粗粒アプライト、アプライトB、斑糲岩D、細粒斑糲岩、珪質岩である（図110、111）。黒雲母花崗岩Bは長石が多いアプライト質の中粒黒雲母花崗岩である。片麻状黒雲母花崗岩は顕著な片麻状（縞状）を呈し、中粒である。黒雲母が少ないものと比較的に多いものとがある。ペグマタイト・粗粒アプライト・アプライトBは巻向から笠荒神に通じる巻向川流域に分布する石英や長石を主とする石と岩相的に似ている。

斑糲岩Dや細粒斑糲岩は、岩相変化に富んだ石である。細粒の角閃石と輝石が集合して小指大の斑点模様をなすものもある。珪質岩は暗青灰色を呈し、石英質粒が固まったような石である。一見、チャートのようにもみえる。

（2）石材の使用傾向

5－1・5－2トレンチの葺石、5－3トレンチでは渡土堤の東側と西側にみられる葺石、これら4か所での石材の使用傾向について以下に述べる。調査個数は1140個である。石材の粒径については

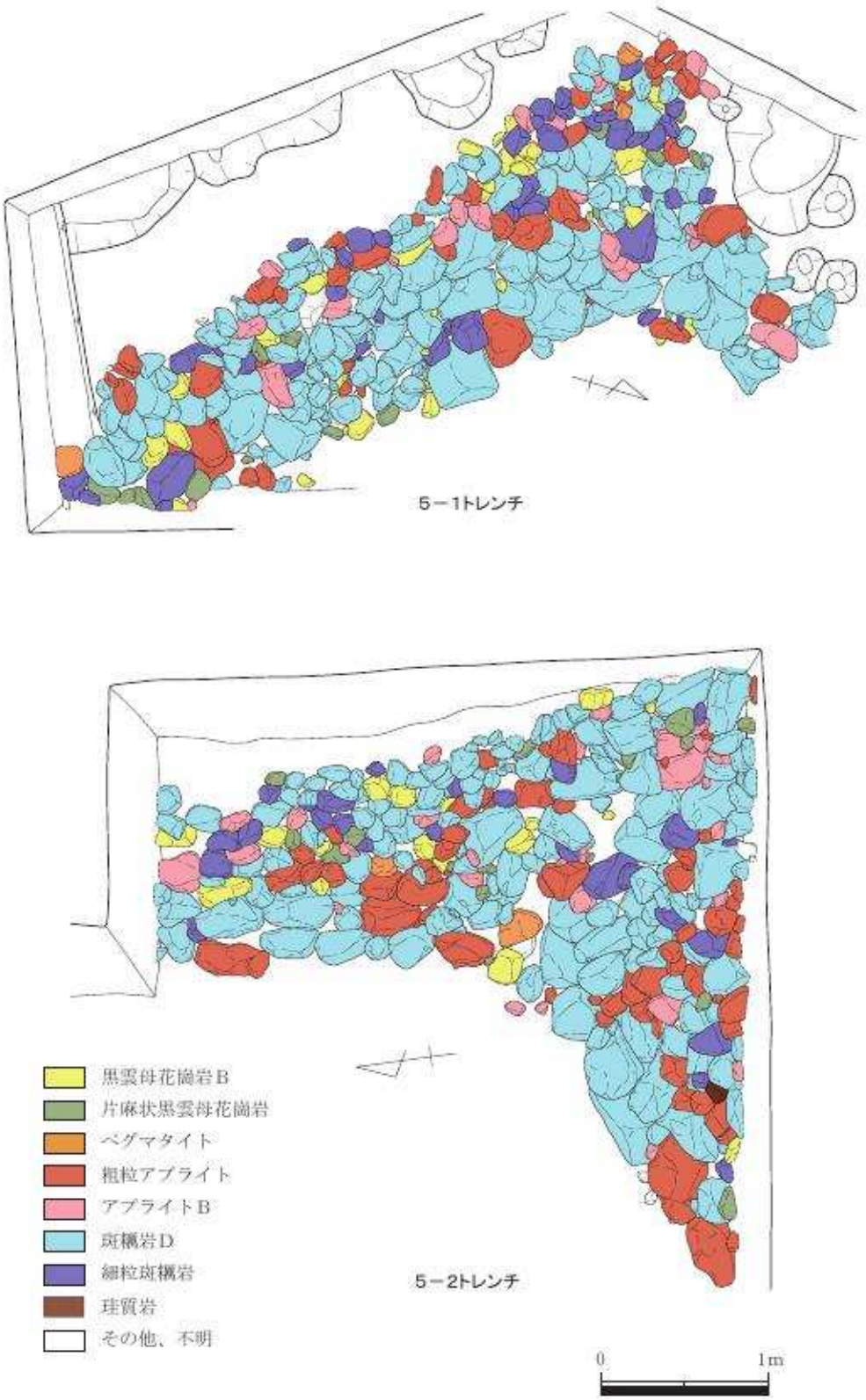
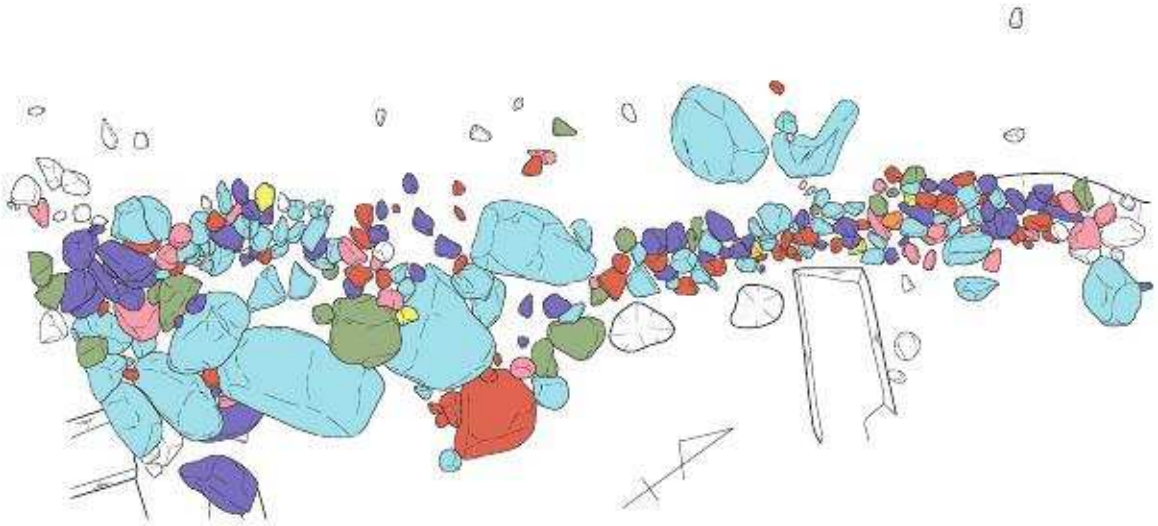
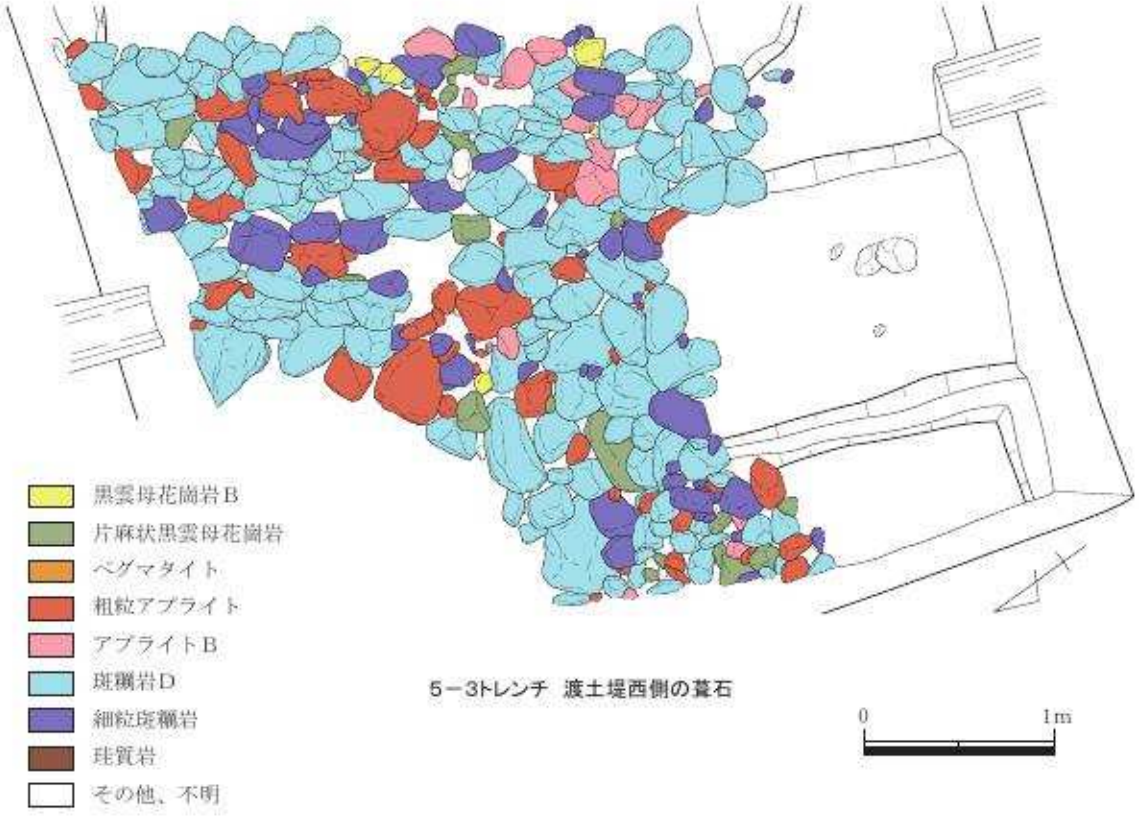


図 110　第５次調査トレンチの葺石の石種①(S＝1/40)



5－3トレンチ　渡土堤東側の葺石



5－3トレンチ　渡土堤西側の葺石

図 111　第５次調査トレンチの葺石の石種②(S＝1/40)

表10　5－1トレンチの葺石の石種とその粒径

石種	みかけの長径 (cm)										合計
	5～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	
黒雲母花崗岩B	10	17	5								32
片麻状黒雲母花崗岩	1	11	1								13
ペグマタイト		2	1								3
粗粒アプライト	7	22	11	3							43
アプライトB	5	10	7	2							24
斑糲岩D	11	51	52	10	9						133
細粒斑糲岩	6	27	10	1	1						45
珪質岩											
合　計	40	140	87	16	10						293

表11　5－2トレンチの葺石の石種とその粒径

石種	みかけの長径 (cm)										合計
	5～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	
黒雲母花崗岩B	2	10	3	1							16
片麻状黒雲母花崗岩	3	11	2								16
ペグマタイト	1	1	1								3
粗粒アプライト	7	31	14	4	1	1	1				59
アプライトB	4	18	4	2							28
斑糲岩D	11	62	46	13	13	2					147
細粒斑糲岩	3	18	10	1							32
珪質岩		1									1
合　計	31	152	80	21	14	3	1				302

表12　5－3トレンチ　渡土堤東側の葺石の石種とその粒径

石種	みかけの長径 (cm)										合計
	5～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	
黒雲母花崗岩B	1	3									4
片麻状黒雲母花崗岩	3	12	3	2	1						21
ペグマタイト		1									1
粗粒アプライト	19	18	2			1					40
アプライトB	9	23	2	1							35
斑糲岩D	10	46	10	3	1	3	1	1		1	76
細粒斑糲岩	15	36	7		4	1					63
珪質岩											
合　計	57	139	24	6	6	5	1	1		1	240

表13　5－3トレンチ　渡土堤西側の葺石の石種とその粒径

石種	みかけの長径 (cm)										合計
	5～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	
黒雲母花崗岩B	1	4									5
片麻状黒雲母花崗岩	3	9	6			1					19
ペグマタイト											
粗粒アプライト	16	20	13	5	3						57
アプライトB	8	9	5	1							23
斑糲岩D	5	47	59	26	8	2					147
細粒斑糲岩	15	21	13	4	1						54
珪質岩											
合　計	48	110	96	36	12	3					305

みかけの長径である（表10～13）。

5－1トレンチの葺石（東側括れ部中段）　観察した葺石293個の長径は、5cm以上10cm未満が40個（約14％）、10cm以上20cm未満が140個（約48％）、20cm以上30cm未満が87個（約30％）、30cm以上40cm未満が16個（約5％）、40cm以上50cm未満が10個（約3％）である。石種別にみれば、黒雲母花崗岩Bが32個（約11％）、片麻状黒雲母花崗岩が13個（約4％）、ペグマタイトが3個（約1％）、粗粒アプライトが43個（約15％）、アプライトBが24個（約8％）、斑糲岩Dが133個（約45％）、細粒斑糲岩が45個（約15％）である。

5－2トレンチの葺石（西側括れ部中段）　観察した葺石302個の長径は、5cm以上10cm未満が31個（約10％）、10cm以上20cm未満が152個（約50％）、20cm以上30cm未満が80個（約26％）、30cm以上40cm未満が21個（約7％）、40cm以上50cm未満が14個（約5％）、50cm以上60cm未満が3個（約1％）、60cm以上70cm未満が1個である。石種別にみれば、黒雲母花崗岩Bが16個（約5％）、片麻状黒雲母花崗岩が16個（約5％）、ペグマタイトが3個（約1％）、粗粒アプライトが59個（約20％）、アプライトBが28個（約8％）、斑糲岩Dが147個（約49％）、細粒斑糲岩が32個（約11％）、珪質岩が1個である。

5－3トレンチ東側の葺石（渡土堤東側）　観察した葺石240個の長径は、5cm以上10cm未満が57個（約24％）、10cm以上20cm未満が139個（約58％）、20cm以上30cm未満が24個（約10％）、30cm以上40cm未満が6個（約3％）、40cm以上50cm未満が6個（約3％）、50cm以上60cm未満が5個（約2％）、60cm以上70cm未満が1個、70cm以上80cm未満が1個、90cm以上100cm未満が1個である。石種別にみれば、黒雲母花崗岩Bが4個（約2％）、片麻状黒雲母花崗岩が21個（約9％）、ペグマタイトが1個、粗粒アプライトが40個（約17％）、アプライトBが35個（約15％）、斑糲岩Dが76個（約32％）、細粒斑糲岩が63個（約26％）である。

5－3トレンチ西側の葺石（渡土堤西側）　観察した葺石305個の長径は、5cm以上10cm未満が48個（約16％）、10cm以上20cm未満が110個（約36％）、20cm以上30cm未満が96個（約31％）、30cm以上40cm未満が36個（約12％）、40cm以上50cm未満が12個（約4％）、50cm以上60cm未満が3個（約1％）である。石種別にみれば、黒雲母花崗岩Bが5個（約2％）、片麻状黒雲母花崗岩が19個（約6％）、粗粒アプライトが57個（約19％）、アプライトBが23個（約8％）、斑糲岩Dが147個（約48％）、細粒斑糲岩が54個（約18％）である。

5．石材の採取推定地

観察できた葺石は、角が少し円くなった角～亜円の自然石で、割石や加工石がみられない。葺石材の表面は川原石様に滑らかなもの、山腹や礫層にみられるような表面に凹凸がみられるもの、風化して媒乱しかけているものがある。凹凸がみられるものや風化して媒乱しかけているものに斑糲類が多い。

茅原大墓古墳が位置する付近の地質は、山麓に段丘の地層が分布し、山地には領家花崗岩類が分布

する。このような分布も南北方向や東西方向の断層、堆積当時の古地形等によって地質分布が一様でなく、景行天皇陵付近や大神神社付近では基盤をなす花崗岩類が分布し、当古墳が位置する付近では洪積世の礫層が分布する。また、穴師付近では砂礫層や粘土層が分布する。このような地質・地形条件により山地や谷では岩石分布と同様の石種の礫、洪積層が分布する地では風化した礫や風化しかけた礫、河川では山地や地層から流出した礫が分布する。

岩石分布をもとに各河川の礫種をみれば、巻向川から南の三輪山には黒雲母花崗岩や片麻状黒雲母花崗岩が広く分布し、その中にレンズ状をなす斑糲岩が岩体として含まれる。西門川の右岸には片麻状黒雲母花崗岩、左岸には片麻状粗粒黒雲母花崗岩が分布する。穴師山付近にはアプライト質黒雲母花崗岩、巻向川近くになればペグマタイト質となる。このような地質の影響を受けて、西門川付近では片麻状を呈する黒雲母花崗岩、穴師山付近ではアプライトやアプライト質黒雲母花崗岩、白雲母花崗岩、ペグマタイト、巻向川左岸では黒雲母花崗岩、斑糲岩の礫が分布し、巻向川では穴師山付近や三輪山付近に分布する石種の礫がみられる。

以上のような岩石分布と石材の様相、石種の岩相をもとに石材の採取地を推定すれば、片麻状を呈する細粒黒雲母花崗岩・片麻状黒雲母花崗岩・片麻状粗粒黒雲母花崗岩は礫の形状と石種の岩相から西門川付近の石と推定される。アプライトA・アプライトB・粗粒アプライト・白雲母花崗岩・ペグマタイト・柘榴石ペグマタイトは穴師山付近に分布する石種の岩相に似ており、巻向川の礫と推定される。黒雲母花崗岩A・黒雲母花崗岩B・細粒斑糲岩・斑糲岩A・斑糲岩B・斑糲岩C・斑糲岩Dは三輪山付近に分布する黒雲母花崗岩や斑糲岩に岩相的に似ており、川原石様の石は巻向川の川原石と推定される。媒乱したような斑糲岩Bは茅原付近の洪積層に含まれている礫、当古墳造営時に出土した礫と推定される。

6．石材の使用傾向

発掘調査時に観察した茅原大墓古墳の墳丘に使用されている葺石材1958個のみかけの長径、石種構成について述べる。

見かけの長径を10cm毎に区分すれば、5cm以上10cm未満が270個（14％）、10cm以上20cm未満が940個（48％）、20cm以上30cm未満が486個（25％）、30cm以上40cm未満が173個（9％）、40cm以上50cm未満が72個（4％）、50cm以上60cm未満が13個（1％）、60cm以上70cm未満が2個、70cm以上80cm未満が1個、90cm以上100cm未満が1個である。長径が10cm以上30cm未満の石が全体の4分の3を占め、50cm以上の石は僅か17個と1％に満たない数である。長径が増せば重量が増すが、30cm程の川原石様の石であれば15kg程の重量となり、一人でも運べる重さである。

葺石材の石種は黒雲母花崗岩Aが6個、黒雲母花崗岩Bが60個、白雲母花崗岩が2個、片麻状細粒黒雲母花崗岩が45個、片麻状黒雲母花崗岩が75個、片麻状粗粒黒雲母花崗岩が29個、アプライトAが19個、アプライトBが173個、粗粒アプライトが199個、片麻状アプライトが64個、ペグマタイトが63

表14　茅原大墓古墳の葺石の石種と粒径

石　種	粒径 (cm)										合　計
	5～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	
黒雲母花崗岩A	1	2	1	2							6
黒雲母花崗岩B	15	36	8	1							60
白雲母花崗岩		1	1								2
片麻状細粒黒雲母花崗岩	9	25	11								45
片麻状黒雲母花崗岩	11	47	12	3	1	1					75
片麻状粗粒黒雲母花崗岩	3	14	9	3							29
アプライトA	1	10	5	3							19
アプライトB	33	88	36	15	1						173
粗粒アプライト	49	91	40	12	4	2	1				199
片麻状アプライト	14	38	11	1							64
ペグマタイト	13	31	14	4	1						63
柘榴石ペグマタイト	5	4	1	3	1						14
細粒斑糲岩	39	102	40	6	6	1					194
斑糲岩A	2	25	25	15	4						71
斑糲岩B		4	1								5
斑糲岩C	2	23	6	5	3						39
斑糲岩D	71	391	265	100	51	9	1	1		1	890
珪質岩		1									1
観察不良	2	7									9
合　計	270	940	486	173	72	13	2	1		1	1958

個、柘榴石ペグマタイトが14個、細粒斑糲岩が194個、斑糲岩Aが71個、斑糲岩Bが５個、斑糲岩Cが39個、斑糲岩Dが890個、珪質岩が僅か１個である。これらの石種と推定される石材の採取地を考慮して石種を纏めてみれば、黒雲母花崗岩が66個（３％）、白雲母花崗岩が２個、片麻状黒雲母花崗岩が146個（７％）、アプライトが455個（24％）、ペグマタイトが77個（４％）、斑糲岩が1299個（60％）、珪質岩が１個となる。三輪山付近に分布する斑糲岩が６割を占め、穴師山付近に分布するアプライトやペグマタイトが約３割を占める。巻向川流域の谷や川原で採石されたと推定される石材が９割を占め、西門川付近と推定される石材が７分である。葺石材は主として巻向川の流域で採石されたと推定され、南方にある初瀬川や北方の布留川や高瀬川等から採石されたと推定される石材は認められない。茅原大墓古墳の葺石に使用されている石材は三輪から柳本にかけての付近の山麓に分布する石である。

第7章　総　括

1．茅原大墓古墳の全体像の復元

（1）墳丘の形態

茅原大墓古墳の墳丘は現状でも比較的良好に残存しており、北側に短い前方部を向ける帆立貝形の墳丘形態であることが以前より推定されてきた。しかし前章までに報告してきた発掘調査成果から、築造当時の墳丘の平面形態をより正確に復元することが可能となっている。

墳丘の全長と輪郭　後円部の中心位置は、確認された埴輪列の位置から復元することができる。埴輪列は後円部頂では北側と西側の２箇所、後円部２段目平坦面では北側と南側の２箇所でそれぞれ確認されており、これらの位置関係から後円部の中心は、現状の後円部頂平坦面のほぼ中心に位置すると考えられる。

次に墳丘主軸ラインについては、上記の後円部中心と、確認されている２段目の東西くびれ部の中間点を結ぶことにより復元が可能である。これにより墳丘主軸ラインは、真北に対し約15°東に振れた方向を指向するもので、おおよそ３－３・３－４・３－５トレンチ及び４－６トレンチの東壁に近い位置に復元することができる。

後円部の規模については、上記の後円部中心から確認された後円部端までの距離から推定することができる。後円部東側では４－１トレンチと４－２トレンチで墳丘端の位置が確認されており、上記の後円部中心からの距離は35m～35.5mを測る。また後円部南西側の１－１トレンチでは葺石の転落石が集積する状況が確認されており、この位置が概ね墳丘端にあたると推定される。後円部中心からの距離は35.5m前後であり、後円部東側の墳丘端までの距離とほぼ一致している。このように後円部では中心から東西の墳丘端までの距離が一致することから、後円部の平面形態は概ね正円形を呈するものであると考えることができる。復元される後円部径は約71mである。

前方部では４－２トレンチにおいて東くびれ部、２トレンチにおいて東側面部、４－３・４トレンチ及び５－３トレンチにおいて北東隅、５－３トレンチ及び４－６トレンチにおいて前面部分の、それぞれ墳丘端が検出されている。先に推定した墳丘主軸ラインとの位置関係で見ると、まず前方部前面の墳丘端ラインは概ね主軸に直交する方向に復元することができる。東側面の墳丘端ラインは、主軸に平行するものではなく、前面側ほど主軸からの距離が大きくなっており、このことから前方部は前面側に向かって幅が広くなる形態であることがわかる。なお東側面の墳丘端ラインは、各トレンチで検出された墳丘端の位置関係から、直線的ではなく図112に示すように中ほどでやや屈曲している可能性が考えられる。

こうした墳丘形態の復元により、墳丘の全長は約86mと推定することができる（図112）。この全長約86mという規模に対する後円部径約71mという大きさは、通有の前方後円墳の形態と比較すると著しく大きいものであり、典型的な「帆立貝式古墳」の一例であるということができる。

なお墳丘端の標高は、古墳が傾斜地に立地していることもあり、概ね北東側が高く、南西側が低く

なる傾向が見られる。したがって前方部北東隅から東くびれ部付近が81.5～81.8mと最も高く、後円部東側や前方部北西隅付近は81.0m前後で、後円部南西側では79.5mとなっている。

墳丘の段構成と高さ　後円部では埴輪列を巡らせる３段の平坦面の存在が確認されている。後円部頂の墳丘残存面の標高は90.3～90.7m、これより１段下がった平坦面は85.4m前後、さらに１段下がった平坦面は82.2～82.8m、後円部東側の基底は81.0mであり、各トレンチの状況からこれらの間に別の平坦面の存在を推定することは難しく、後円部は３段築成であることが明らかである。各段の高さは、１段目が東側では1.8m前後、西側では2.5m以上と推定される。２段目は東側くびれ部付近で約2.6m、西側くびれ部付近で約3.2mを測る。３段目は約5.3mと推定され、後円部全体の高さは11m前後であったと考えることができる。

次に前方部を見ると、東西のくびれ部では２段目斜面の基底が検出されており、後円部の１段目平坦面が、前方部の１段目平坦面と一連のものであることがわかっている。４－５トレンチでは前方部１段目平坦面と上面の平坦面が確認されており、両者の間には平坦面が存在しないことから、前方部は２段築成であると判断される。１段目の高さは墳丘東側で1.2m前後、２段目の高さは1.2～1.8m程度と考えられる。

なお前方部の２段目は、後円部に近い部分での上面の標高が84.0m前後であり、後円部２段目平坦面よりも約1.4m低く、両者の間には葺石を伴う斜面が存在する。このことから前方部と後円部は、１段目は一連の形態として築造され、２段目は前者が後者よりも低くつくられていることがわかる。また墳丘主軸に近い３－３トレンチの状況から考えると、前方部上面と後円部の平坦面を繋ぐスロープ部は存在しないことがわかる。

平坦面　後円部頂には現状で径18～20mの円形の平坦面が存在しており、その周縁部を円形に巡る埴輪列の存在が確認されている。埴輪列の径はおよそ16.5mであり、後円部頂には現状に近い規模の円形の平坦面が存在したと考えられる。この後円部頂平坦面で実施した物理探査の成果では、その中央部分において墓壙掘方の可能性がある窪みの存在が推定されているが、墓壙の形態を明確にするには至らなかった。しかし後世に大きな攪乱を受けた痕跡は捉えられなかったことから、埋葬施設は比較的良好な状況で残存していると考えられた。また大型の石材が使用されているような状況が確認されなかったことから、埋葬施設の形態は竪穴式石室ではなかったと推定することができる。

後円部２段目の平坦面は、北側と南側の２箇所において埴輪列を伴った状態で確認されている。平坦面の標高は南北両側で85.4m前後に推定され、墳丘基底とは異なり、概ね水平であることがわかる。平坦面の幅は３－３トレンチの状況から2.5m前後と考えられ、埴輪列はそのほぼ中央か、若干後円部中心寄りに位置すると考えられる。なおこの３－３トレンチでは後円部２段目平坦面が良好に残存していたが、礫敷きなどは確認されていない。

後円部１段目平坦面は東西のくびれ部付近において確認されており、西側の５－２トレンチでは後円部側を巡る埴輪列や埴輪棺３が検出されている。平坦面の標高は、東側で82.8m前後、西側で82.2m前後であり、墳丘端と同様に東側がやや高くなっている。平坦面の幅は明らかではないが、埴輪列が

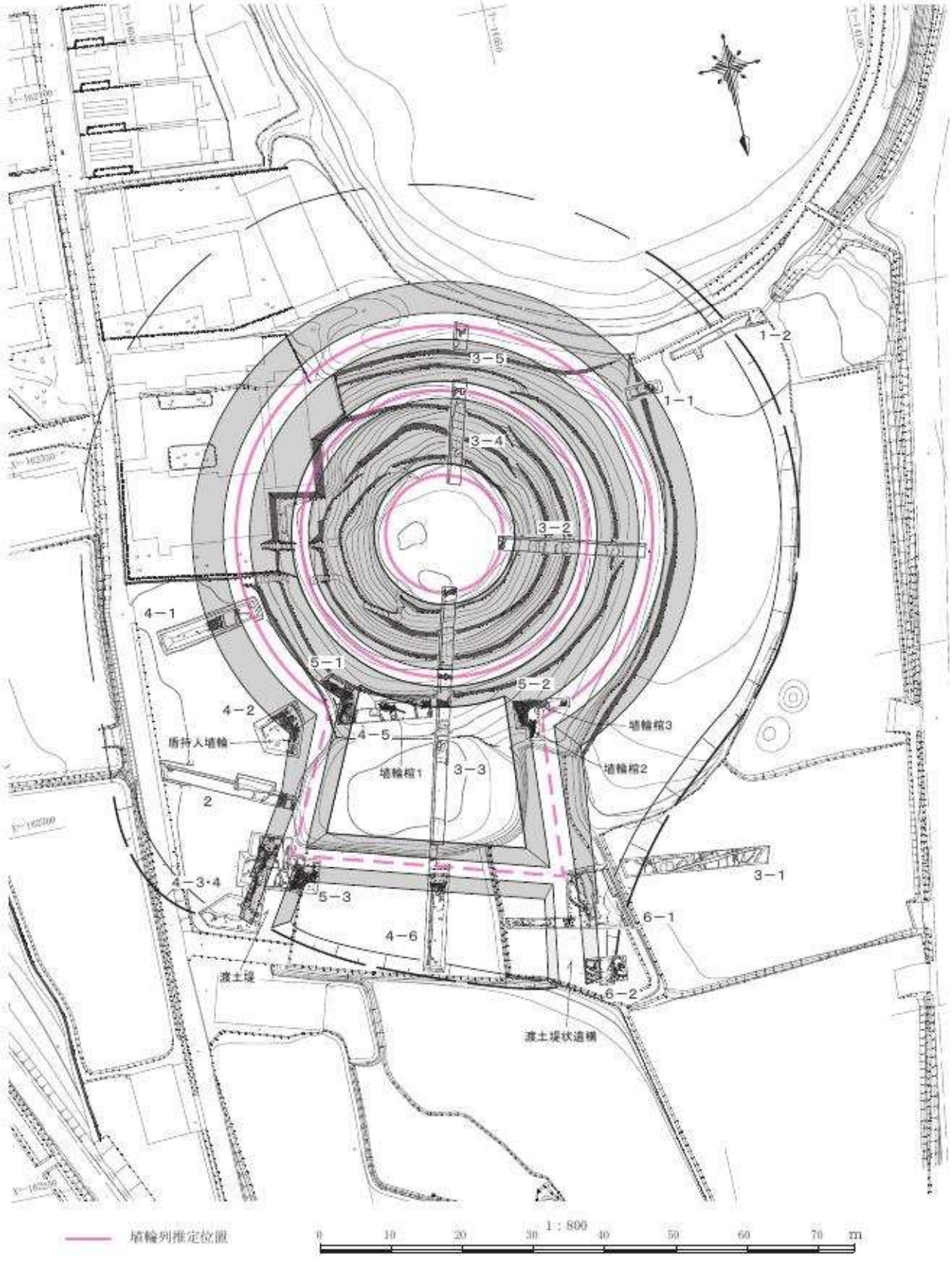


図112　茅原大墓古墳復元図（S＝1/800）

後円部基底から２ｍ以上離れた位置にあることを考えると、後円部２段目よりも広い４ｍ前後の規模であったと推定される。礫敷きなどは確認されていない。

前方部の平坦面の状況については不明な部分が多いが、１段目平坦面は後円部と一連のもので、前方部側面から前面にまで巡るものと推定される。この１段目平坦面の西側くびれ部に近い位置では埴輪棺２が検出されている。前方部上面では後円部に近い位置で埴輪棺１が検出されており、この部分は築造当時の平坦面が概ね残存していることがわかるが、前面側については後世に削平を受けているようであり、本来は前面側に向かって高くなる形態であった可能性が考えられる。

（２）盛土と葺石

地山と墳丘盛土　墳丘が高まりとして残存する部分に設定した３－２トレンチ、３－３トレンチ、３－４トレンチでは、トレンチのほぼ全面において墳丘盛土が検出されている。これらのトレンチでは部分的に断ち割り調査を行ったが、地山は検出されておらず、旧地形の高まりを利用して墳丘が築造された可能性は低いと考えられる。

墳丘の周囲では、地山を掘り下げることにより周濠が形成されている。４－２トレンチや２トレンチでは墳丘の中心に近い側で地山残存面が高くなる状況が確認されており、少なくとも１ｍ以上の深さで地山が掘り込まれていることがわかっている。したがって墳丘の最下部は地山の削り出しにより構成されていると考えられる。

なお墳丘東側部分では、１段目斜面の葺石が地山を削り出した斜面に葺かれるのではなく、葺石と地山の間に黄褐色粘質土などで構成される盛土が存在する状況が確認されている。盛土の程度は箇所により異なっており、前方部東側の２トレンチでは基底石の下から斜面部の裏側にかけて厚さ50㎝程度の盛土が存在する。後円部東側の４－１トレンチでは、トレンチ東半で検出された墳丘部分のすべてが盛土で構成されていると考えられ、地山を掘り込んだ後に、その凹みの西側から７ｍ以上の範囲が盛土で埋め戻され、墳丘が形づくられたと推定される。

墳丘東側の１段目付近に見られる盛土は黄褐色粘質土を中心とするもので、砂礫で構成される地山を掘削して得られるものではなく、また砂質である墳丘上部の盛土とも質が大きく異なっている。こうした粘質土がどこで得られたものかは不明であるが、湧水が多く軟弱な地山の上面に強固な墳丘基底部を築くため、特に調達されたものと推定される。

葺石　使用される石材の詳細については第６章を参照するが、茅原大墓古墳の近隣に位置する河川より採取された川原石が多く用いられているほか、地山を掘削した際に得られた石材が使用されたと考えられる。石材の大きさの傾向としては、１段目斜面では大型の石材が目立っており、基底石と斜面部分の石の大きさに顕著な差がみとめられない。いっぽう２段目斜面では基底部に大型の石材を用いるが、斜面部ではやや小さ目の石材が使用される状況が見られた。後円部３段目については葺石がほぼ全体にわたって失われているようであり、その多くが後世に石垣として転用されていると考えられる。

葺石は明確な裏込め土を有さず、栗石なども確認されていない。多くの箇所において盛土の斜面に葺かれているが、前方部前面の４－６トレンチでは一部地山斜面に直接葺かれる箇所が存在する。また６－１トレンチでは葺石は確認されなかったが、前方部西側面にあたる地山の斜面が検出されている。葺石が存在したとすれば地山の斜面に直接葺かれていた可能性が考えられる。

（３）埴輪の配列と埴輪棺

埴輪列の状況　後円部頂では平坦面の西側と北側の２箇所で埴輪列が検出され、平坦面の周縁を円形に巡る埴輪列の存在が明らかとなっている。埴輪列の径はおおよそ16.5m程度と推定され、後円部頂には100個体以上の円筒埴輪が配列されたと考えられる。布掘状の掘方に据えられている部分と、掘方が確認できない部分が存在しており、箇所によって据え付け方法が異なっていることがわかる。また4個体に1個体程度の割合で、底部が高い位置に据えられる個体が存在している。使用される埴輪は大型の個体が多いが、小型の個体も一定量含まれている。

後円部２段目平坦面の埴輪列は南北２箇所で検出されている。その径は40.3mに復元され、250個体程度の円筒埴輪が配列されたと推定される。後円部頂と同様に据え付け方法が一様ではなく、北側では布掘状の掘方が確認されているが、南側では掘方が確認されていない。使用される個体は大型に限定され、後円部頂と同様に、数個体に１個体の割合で底部が高い位置に据えられている可能性が考えられる。なお南側で検出された３個体は、いずれも底部を打ち欠いた状態で据えられていた。

後円部１段目平坦面では西側くびれ部に近い位置で埴輪列が検出されている。埴輪列の径は58m程度に推定され、300個体以上の円筒埴輪が配列されたと考えられる。検出された３個体はいずれも小型でⅢ類に分類される個体であり、全て小型で構成されている可能性が考えられる。

前方部では埴輪列を検出することはできなかったが、周辺のトレンチにおいて一定量の円筒埴輪が検出されていることから、埴輪列が存在した可能性が高いということができる。前方部１段目平坦面は後円部１段目平坦面と連続していることから、埴輪列についても後円部から連続しているものと推定される。前方部上面については削平を受けている箇所が多く、埴輪列の存否は明らかではない。

壺形埴輪の配置　比較的残存率の高い個体がくびれ部付近や前方部周辺で出土している。このうち後円部１段目埴輪列に近い位置で出土している個体は、法量等から考えると、埴輪列を構成する小型の円筒埴輪の上に載せられていた可能性が考えられる。（185）は後円部２段目より転落したものと推定されるが、後円部２段目の埴輪列は大型の円筒埴輪で構成され、その上に（185）を載せることはできない。したがってこの個体については単独で据えられていた可能性がある。このほか前方部前面の４－６トレンチでも一定量の壺形埴輪が出土しており、前方部にも配置されたと考えられる。

その他の埴輪の配置　東側くびれ部の基底に近い位置において盾持人埴輪の基部が原位置で検出されており、この位置に盾持人埴輪が樹立されていたことがわかっている。また同じ東側くびれ部の４－２トレンチでは、周濠埋土中より鳥形埴輪の破片が複数出土しており、くびれ部付近に鳥形埴輪が配置されたと推定される。このほか蓋形埴輪は墳丘上のトレンチより多く出土していることから、

後円部の上半部に配置されたものと推定される。

埴輪棺　計３基の埴輪棺が確認されているが、調査範囲が限られていることを考慮すると、本来はさらに多くの埴輪棺が存在した可能性が考えられる。埴輪棺１は前方部上面の、後円部との接続部分に近い位置で検出されている。西側くびれ部付近の１段目平坦面において検出された埴輪棺２・埴輪棺３は、埴輪列と２段目斜面の間という狭い空間に位置していた。これらの埴輪棺はともに墳丘斜面の基底に近接する位置にあり、かつその主軸を斜面基底ラインに平行させている点で共通点が見られ、墳丘を意識した配置であるということができる。このような埴輪棺に葬られた人物は、後円部頂の中心埋葬施設の被葬者の近親者であると考えられており[1]、茅原大墓古墳の築造が完了したのち、数十年のうちに埋葬が行われたと推定される。

（４）渡土堤

前方部北東側の渡土堤　幅約７ｍ、長さ約７ｍを測る渡土堤で、若干地山を削り残した上で盛土により築かれており、東西の両側面には葺石が施されている。墳丘との接続位置は前方部前面の東端部分であり、渡土堤の主軸方向は前方部前面に直交するものではなく、概ね前方部東側面ラインと一致している。また渡土堤の東側面は前方部の東側面とほぼ一連となるような関係にあることから、この渡土堤は前方部東側面を強く意識して築かれていると考えられる。

渡土堤の上面は削平を受けており、残存高は最大で0.8ｍを測るが、本来の高さは不明である。しかし前方部１段目の高さが1.2ｍ程度と推定されることから、これを上回るものとは考えられない。渡土堤の上面は前方部１段目平坦面と一連であったか、高低差が存在したとしてもわずかな段差が存在した程度であったと推定される。

なおこの渡土堤は、長さ７ｍ、高さ１ｍ程度に対して幅７ｍの規模を有しているという点は注意される。他の古墳で確認されている渡土堤は幅２～５ｍ程度のものが多く、７ｍ以上の幅を有する例は稀少であり[2]、渡土堤としては幅が広い事例であるということができる。

こうした状況を踏まえ、この渡土堤が持つ役割を考えておくこととしたい。まず渡土堤が持つ機能の一つとしては周濠の水位調節が挙げられる。傾斜地に立地する古墳では、水を湛えた周濠を巡らせるためには周濠を複数箇所で区切り、水面を階段状にする必要がある。茅原大墓古墳もまた傾斜地に立地する古墳の一つであり、墳丘基底の標高は北東側と南西側では約２ｍの差が存在することから、その周囲に周濠を巡らせるためには渡土堤が必要となるであろう。しかし検出された渡土堤は周濠底が最も高くなる墳丘の北東側に位置しており、堤の東西の周濠底の高低差がわずか20㎝程度であることから、水位を調節する機能を有する堤としては、適当な位置にあるとは考えられない。

渡土堤の機能としてもう一つ考えられるのは、墳丘と外側を繋ぐ通路としての役割である。茅原大墓古墳で確認された渡土堤は上記のように、前方部東側面の１段目平坦面との連結を意識しているような状況が窺われた。幅７ｍという規模についても、前方部１段目平坦面の規模と合わせるために築かれている可能性が考えられる。

このように見てくると、確認された渡土堤は水位調節機能が重視されているとは考えられず、前方部１段目平坦面との接続を意図した通路としての意識が、より強く表れているように思われる。

前方部北西側の渡土堤状遺構　上記の渡土堤とは墳丘主軸を挟んでほぼ対称的な位置にあり、西側面は前方部西側面と一連となっている。残存部のほぼ全てが地山の削り出しにより形成されている点は東側の渡土堤と異なるが、基本的に両者は同様の機能を有するものであったと推定される。

（５）周濠の形態

周濠外側の立ち上がりが確認されている地点は、４－３・４トレンチや４－６トレンチ、６－１トレンチ、６－２トレンチなど前方部北側に集中しており、後円部側ではわずかに１－２トレンチで確認されているにすぎない。このため周濠の形態を復元することは難しいが、現況の地形状況などを考慮して以下のように推定しておく。

まず後円部側では、南西側において幅12m余りの周濠が確認されている。これに加えて後円部西側には以前より周濠の痕跡とされてきた小池が存在し、古墳の東側では南北に走る市道のすぐ東側で高くなる地形が観察される。これら現況の地形を参考とすると、後円部の周辺には10～15m幅の周濠が巡っていたと推定される。

前方部側では、墳丘主軸を挟んで東西で周濠の平面形態が異なっていることが明らかとなっている。まず西側では、周濠の北端部においてその幅が極端に狭くなっており、後円部側に向かって大きく広がる形態であることが確認されている。対して東側では、４－３・４トレンチの成果から北側に向かって幅が狭くなるような状況は確認されておらず、前方部側面でも幅20m前後の規模を有する周濠が存在したと考えられる。なお前方部前面側では、東側の渡土堤付近で約７m、墳丘主軸付近で10m余りの幅を有していると考えられ、西側ほど幅が広くなる形態であったと推定される。

上記のような状況から茅原大墓古墳の周濠は、墳丘主軸を挟んで非対称な形態であり、全体としては馬蹄形に近い平面形状を有していたと推定される（図112）。

２．茅原大墓古墳の評価

（１）築造時期

茅原大墓古墳では後円部の中心埋葬施設の内容が明らかになっておらず、その築造時期を検討する上で根拠とすることができる資料は、出土した埴輪に限られている。

出土した円筒埴輪は先に見たように、一部古い様相を持つ個体が含まれていたが、川西編年のⅡ期、埴輪検討会編年ではⅢ－１段階に位置付けられるものであった。壺形埴輪や形象埴輪は円筒埴輪に比して出土量が少なく、また各個体の残存率が低かったため詳細な時期を検討することは難しいが、円筒埴輪の時期と矛盾のないものであるということができる。

以上のような埴輪の状況から茅原大墓古墳の築造時期は、古墳時代の時期区分においては中期初頭

頃に位置付けることができる。暦年代については、前期後半の年代を4世紀中頃とする考えに基づき[20]、4世紀末頃と考えておきたい。

（2）茅原大墓古墳の歴史的意義

大和・柳本・纒向古墳群　茅原大墓古墳が位置する奈良盆地東南部には、古墳時代前期の大王墓と考えられる6基の巨大前方後円墳を含む数多くの古墳が築造されており、付近が当該期における政権勢力の根拠地であったことを物語っている。この地域の中でも特に大型古墳が集中して築造されるのは、現在の桜井市北部から天理市南部にかけての東西約2㎞、南北約5㎞の範囲であり、ここには古墳時代を通じて180基以上の古墳が築造されている（図113、表15）。これらの古墳は北から「大和古墳群」、「柳本古墳群」、「纒向古墳群」の3つのグループに分けられており、茅原大墓古墳はこのうち「纒向古墳群」に含まれ、上記の古墳集中範囲の南端部分に位置している。

大和・柳本・纒向古墳群における墳墓の築造の開始は庄内式期に遡ると考えられる。この時期には纒向古墳群で纒向石塚古墳（墳丘墓）や矢塚古墳（墳丘墓）など全長100m近くの大型前方後円形墳墓が複数築造されており、3つのグループのうちでも最も造墓活動が活発であったということができる。纒向古墳群では3世紀中頃に、これらの墳墓の築造に併行あるいは後続するかたちで、日本列島で最初の巨大前方後円墳である箸墓古墳（全長280m）が築造されている。

大和・柳本古墳群においても庄内式期に遡るとされる大型墳墓が存在するが、造墓活動が活発化するのは箸墓古墳築造後のことである。大和古墳群では箸墓古墳とほぼ時期を同じくして中山大塚古墳（120m）が築造されたのち3世紀後半から4世紀初頭にかけて、箸墓古墳に続く王墓とされる西殿塚古墳（220m）のほか、全長100～150mの前方後円墳・前方後方墳が相次いで築造されている。この時期には纒向古墳群では際立った古墳は築造されておらず、造墓の中心が大和古墳群に移っていると考えられる。

柳本古墳群では3世紀後半に黒塚古墳（130m）などの大型古墳が築造され、これ以降造墓が活発化する。特に4世紀前半から中頃には行燈山古墳（242m）、渋谷向山古墳（300m）という2基の巨大前方後円墳が築造され、この段階には造墓の中心が大和古墳群から柳本古墳群へと移っていると考えることができる。

4世紀後半以降になると、大和・柳本・纒向古墳群では全長100m以上の大型古墳は築造されなくなり、かわって奈良盆地北部の佐紀古墳群や西部の馬見古墳群、あるいは河内の古市古墳群において大型古墳が築かれるようになる。これは畿内の政権内部における勢力変動に起因するものと考えられる。再びこの地域において100m以上の古墳が築造されるのは古墳時代後期の西山塚古墳（120m）のみであり、大和・柳本・纒向古墳群における大型古墳の築造は概ね古墳時代前期の完了とともに終焉を迎えていることがわかる。

茅原大墓古墳の位置付け　茅原大墓古墳の歴史的意義を考える上で重要となる要素の一つとして、上記のような背景を持つ大和・柳本・纒向古墳群の一画に位置している点がまず挙げられる。茅原大

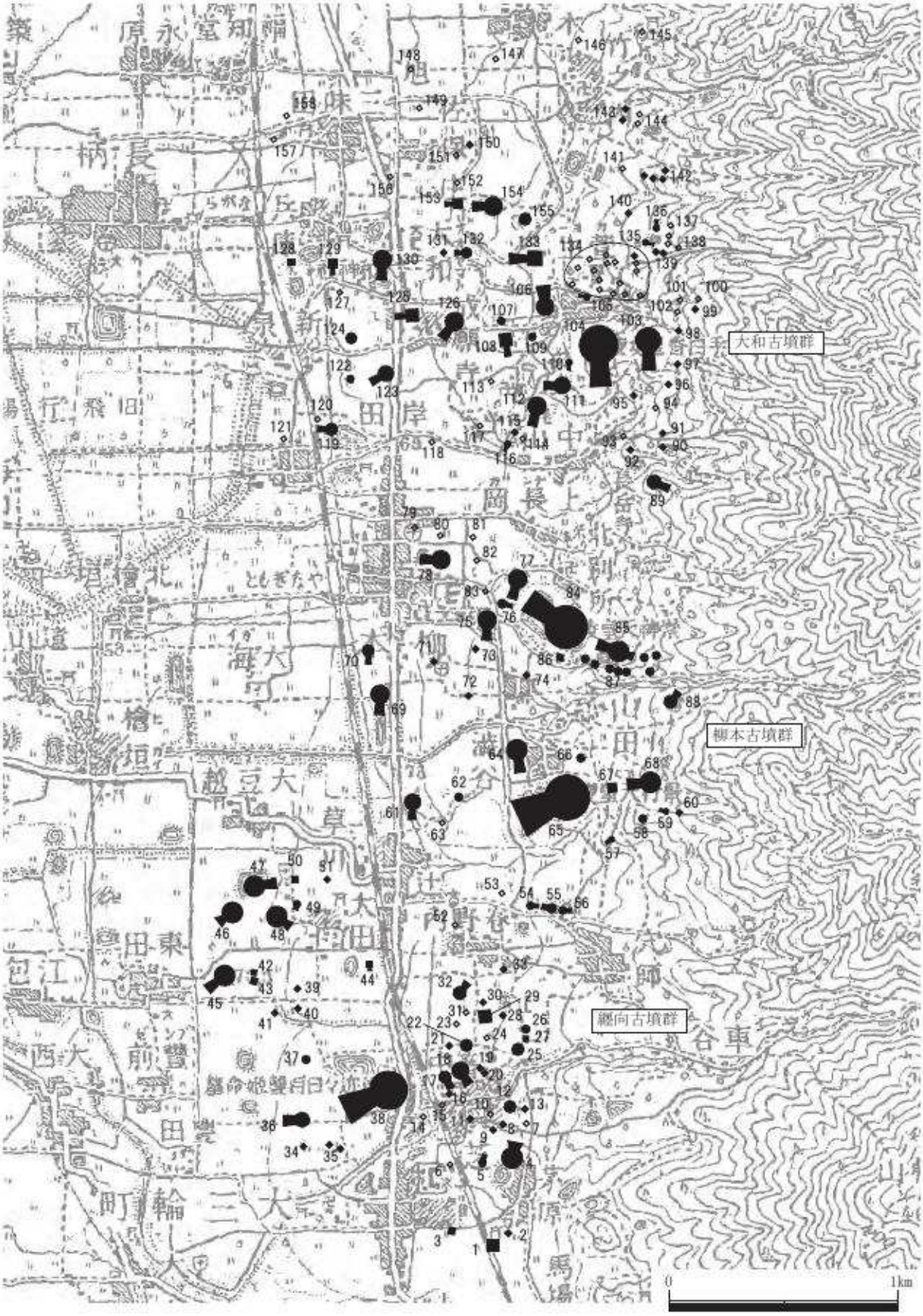


図113　大和・柳本・纒向古墳群の古墳分布（S＝1/25,000）

表15　大和・柳本・纒向古墳群の古墳一覧（No.は図113に対応）

No.	古墳名	墳形	墳丘規模	時期
1	茅原狐塚古墳	方	30m	後期後
2	弁天社古墳	円？	不明	後期
3	堀ノ端古墳	方	不明	後期
4	茅原大墓古墳	帆立貝式	86m	中期前
5	思兼神塚古墳	前方後円	45m	後期前
6	三光古墳	不明	不明	不明
7	墓が森古墳	円？	不明	不明
8	狐塚古墳	円	6m	後期？
9	南石神塚古墳	円	20m	不明
10	北石神塚古墳	円？	不明	不明
11	馬塚古墳	円？	不明	後期後
12	ツゾロ塚古墳	円	30m	不明
13	ツクロ塚古墳	円	10m	不明
14	八王子古墳	不明	不明	不明
15	神上塚古墳	円？	不明	不明
16	宮ノ前古墳	円	15m	後期
17	辛ノ俣古墳	前方後円	60m以上	中期後
18	ホケノ山古墳（墳丘墓）	前方後円	80m	庄内式期
19	慶運寺裏円墳	円	12m	後期？
20	慶運寺裏古墳	円？	13m	後期
21	茶ノ木塚古墳	円？	28m	不明
22	北口塚古墳	円？	25m	不明
23	石塚古墳	不明	不明	不明
24	小川塚古墳	不明	不明	不明
25	平塚古墳	円or前方後円	35m以上	後期
26	池田１号墳	円	18m	後期中
27	池田２号墳	方	不明	不明
28	小川塚東古墳	円	34m	不明
29	小川塚南古墳	方	41m	不明
30	サンヨマ古墳	円	13m	不明
31	石田古墳	円？	15m	不明
32	巻野内石塚古墳	前方後円	60m	不明
33	坂田地区の古墳	不明	不明	前期
34	福前山古墳	円	10m	不明
35	原田古墳群	円？	15m	不明
		円？	15m	不明
36	箸中イヅカ古墳	前方後円	80m以上	前期末
37	箸中ヒハクヒ古墳	円	20m	中期前
38	箸墓古墳	前方後円	280m	前期前
39	堀川１号墳	円	不明	後期前
40	堀川２号墳	円	不明	後期前
41	南溝塚古墳	前方後円？	不明	前期前
42	ヤナイタ１号墳	方	不明	中期末
43	ヤナイタ２号墳	方	13m	中期末
44	メクリ１号墳	前方後方	28m	庄内～前期初
45	東田大塚古墳	前方後円	120m	前期前
46	矢塚古墳（墳丘墓）	前方後円	93m以上	庄内式期
47	都山古墳（墳丘墓）	前方後円	113m	庄内～前期初
48	纒向石塚古墳（墳丘墓）	前方後円	96m	庄内式期
49	石塚東古墳	帆立貝式	30m	中期後
50	都山東古墳	方	25m	後期前
51	トリイノ前古墳	円	不明	中期後
52	北口古墳	円？	15m	不明
53	尾崎花古墳	円	25m	不明
54	珠城山１号墳	前方後円	50m	後期
55	珠城山２号墳	前方後円	85m	後期
56	珠城山３号墳	前方後円	48m	後期
57	立石古墳	前方後円？	30m	不明
58	立子塚古墳	円	20m	後期後
59	立子古墳	前方後円	35m	不明
60	クノボ古墳	円？	不明	不明
61	柳本大塚古墳	前方後円	92m	前期前
62	茶臼山古墳	円	20m	不明
63	岩神古墳	不明	不明	不明
64	上の山古墳	前方後円	125m	前期後
65	渋谷向山古墳	前方後円	300m	前期後
66	丸山古墳	円	20m	不明
67	赤坂古墳	方	25m	不明
68	シウロウ塚古墳	前方後円	120m	不明
69	石名塚古墳	前方後円	110m	前期
70	ノベラ古墳	前方後円？	69m	前期？
71	エンド塚古墳	不明	不明	不明
72	立花遺跡祭祀古墳	不明	不明	前期後
73	穂井塚古墳	不明	不明	不明
74	百塚古墳	不明	20m	不明
75	大和天神山古墳	前方後円	113m	前期前
76	南アンド山古墳	前方後円	65m	不明
77	アンド山古墳	前方後円	120m	不明
78	黒塚古墳	前方後円	130m	前期前
79	11D－0532	不明	不明	不明
80	11D－0533	不明	不明	不明
81	11D－0537	不明	不明	不明
82	11D－0538	不明	不明	不明
83	八王寺古墳	不明	不明	不明
84	行燈山古墳	前方後円	242m	前期中
85	櫛山古墳	双方中円	150m	前期中
86	ザクロ塚古墳	方	15m	後期？
87	巻向山１号墳	円	20m	後期
	巻向山２号墳	円	20m	後期
	巻向山３号墳	円	20m	後期
	巻向山４号墳	円	20m	後期
	巻向山５号墳	円	20m	後期
	巻向山６号墳	円	20m	後期
88	ヲカタ塚古墳	前方後円	35m	後期

No.	古墳名	墳形	墳丘規模	時期
89	高塚古墳	前方後円	110m	後期？
90	11B－0214	円	10m	後期？
91	11B－0213	円	10m	後期？
92	11B－0346	円	20m	後期？
93	11B－0345	円	15m	不明
94	11B－0199	円？	不明	不明
95	11B－0198	円	25m	不明
96	11B－0197	円	15m	不明
97	11B－0196	円	15m	不明
98	11B－0197	円	20m	不明
99	11B－0371	円？	不明	後期
100	11B－0370	不明	不明	不明
101	11B－0339	不明	不明	不明
102	11B－0340	不明	不明	不明
103	東殿塚古墳	前方後円	150m	前期中
104	西殿塚古墳	前方後円	220m	前期前
105	空路官山古墳	前方後円	45m	後期
106	西山塚古墳	前方後円	120m	後期
107	西ノ塚古墳	円	35m	中期後
108	下池山古墳	前方後方	120m	前期前
109	ホッタリ塚古墳	円	25m	不明
110	火矢塚古墳	前方後円	50m	不明
111	燈籠山古墳	前方後円	110m	前期前
112	中山大塚古墳	前方後円	120m	前期前
113	狐塚古墳	不明	不明	不明
114	11B－0343	円？	不明	不明
115	11B－0338	円	20m	不明
116	小岳寺塚古墳	前方後円	50m	不明
117	11B－0342	不明	不明	不明
118	11B－0268	不明	不明	不明
119	茶天塚古墳	前方後円	70m	不明
120	狐塚古墳	不明	不明	不明
121	石塚古墳	不明	不明	不明
122	マトバ古墳	円	不明	不明
123	矢ハギ塚古墳	前方後円	102m	不明
124	平塚古墳	円	54m	不明
125	フサギ塚古墳	前方後方	110m以上	不明
126	栗塚古墳	前方後円	120m	不明
127	11B－0140	円？	不明	不明
128	星山森古墳	方	13m	不明
129	星塚古墳	前方後方	70m	不明
130	黒仁田古墳	前方後円	110m	前期前
131	マバカ西古墳	前方後方？	不明	前期
132	マバカ古墳	前方後円	75m	前期前
133	波多子塚古墳	前方後方	145m	前期前
134	11B－0324	不明	不明	不明
	11B－0329	不明	不明	不明
	11B－0328	不明	不明	不明
	11B－0331	不明	不明	不明
	11B－0332	円？	不明	不明
	11B－0333	円？	不明	不明
	11B－0330	円	20m	後期
	11B－0322	不明	不明	不明
	11B－0323	不明	不明	不明
	11B－0325	不明	不明	不明
	11B－0326	不明	不明	不明
	11B－0327	不明	不明	不明
	11B－0494	不明	不明	後期
	11B－0334	円？	不明	不明
	11B－0335	円？	不明	後期？
	11B－0336	円	10m	不明
135	宮池塚古墳	前方後円？	不明	後期
136	二ノ瀬落古墳	前方後円	42m	後期
137	11B－0334	前方後円？	不明	不明
138	11B－0335	不明	不明	不明
	11B－0336	不明	不明	不明
	11B－0337	不明	不明	不明
139	11B－0320	円？	不明	後期？
	11B－0321	円？	不明	後期？
140	西鏡子山古墳	前方後円？	不明	不明
141	11B－0318	円？	30m？	不明
142	11B－0170	円	15m	不明
	11B－0171	円	16m	不明
	11B－0172	円	17m	不明
	11B－0173	円	18m	不明
143	11B－0316	円	10m	不明
	11B－0315	円	15m	不明
144	11B－0307	円？	不明	不明
	11B－0308	円？	不明	不明
145	11B－0117	円？	不明	不明
146	11B－0302	不明	不明	不明
147	11B－0303	不明	不明	不明
148	帯塚古墳	円？	不明	不明
149	大通寺前古墳	不明	不明	不明
150	五合瀬古墳	円	15m	中期後
151	11B－0314	不明	不明	不明
152	11B－0315	不明	不明	不明
153	ノムギ古墳	前方後方	61m	前期前
154	ヒエ塚古墳	前方後円	125m	前期前
155	クラ塚古墳	円	40m	不明
156	11B－0315	不明	不明	不明
157	福智堂大塚古墳	円？	不明	不明
158	11B－0216	円？	不明	不明

墓古墳はこの古墳群において大型古墳が築造されなくなった4世紀末頃に築造されたと考えられる。全長約86mという墳丘規模は、同時期のこの地域において最大のものであり、前方部が短い帆立貝形の墳丘形態であるため墳丘全長は100mに達しないが、後円部は径約71mの規模を有している。大和・柳本・纒向古墳群中の古墳の後円部径を見ると、大王墓とされる4基の巨大前方後円墳では150m前後かそれ以上の規模となるほか、双方中円墳である櫛山古墳（全長155m）が90m前後、上の山古墳（144m）が80m以上とこれに次いでおり、全長130m前後の黒塚古墳やアンド山古墳、中山大塚古墳などが茅原大墓古墳とほぼ同じ70m前後の後円部径を有している。すなわち71mという茅原大墓古墳の後円部の規模は、大王墓とされる巨大前方後円墳とは大きな格差があるものの、それに次ぐ全長130m前後の大型古墳とほぼ同等のものであるということができる。この点を評価するなら、茅原大墓古墳は古墳時代中期のこの地域における唯一の大型古墳であり、かつ大和・柳本・纒向古墳群における事実上最後の大型古墳であるということができるだろう。大和・柳本・纒向古墳群は、古墳時代前期当時に政権の中枢にあった集団により営まれたと考えられる。茅原大墓古墳の被葬者は、そうした集団の成員の一人であり、政権の中枢が畿内の他の地域へと移動した段階における、この地域の首長であったと考えることができる。

茅原大墓古墳が持つもう一つの重要な要素は、帆立貝形の墳丘形態を有している点である。茅原大墓古墳が築造された4世紀末頃に出現したこの形態の古墳は、「帆立貝式古墳」と呼ばれ、被葬者の身分を表示する新たな墳丘形態として創出されたと考えられる。かつて指摘されたように[4]政権中枢勢力により前方後円墳築造が「規制」された結果生み出されたとは考えにくいが、墳形の序列の中では通有の前方後円墳よりも下位に位置付けられるものと考えられる[5]。茅原大墓古墳は大和・柳本・纒向古墳群が衰退していく時期に築かれた首長墳であり、政権内におけるこの地域の勢力の相対的な位置の低下が、帆立貝形という墳丘形態に象徴されているということができるだろう。

茅原大墓古墳の立地環境や墳丘規模から、その被葬者は古墳時代前期に複数の大王を輩出した集団に属し、古墳時代中期初頭段階の奈良盆地東南部を代表する首長であったと考えられた。いっぽうで帆立貝形という墳丘形態は、その集団の勢力が衰退傾向にあったことを反映するものと考えられ、当時の政権内における茅原大墓古墳の被葬者、あるいはその所属集団の位置が表出されているということができるだろう。茅原大墓古墳築造以降、大和・柳本・纒向古墳群では明確に首長墳と判断できるような古墳は築造されなくなり、古墳群を営んだ集団が衰退していく状況が見てとれる。茅原大墓古墳の墳丘形態は、古墳時代の政権勢力の変動を背景とする集団の衰退を、如実に表しているということができる。

3．盾持人埴輪について

（1）はじめに

茅原大墓古墳で出土した盾持人埴輪は、盾面上半部から頭部にかけて良好に残存しており、従来検

討が難しかった初期の盾持人埴輪の特徴を知ることができる個体である。そのため、形態的な特徴と製作技法を検討したうえで、当古墳出土の形象埴輪と合わせて本例の製作時期を考えることとする。

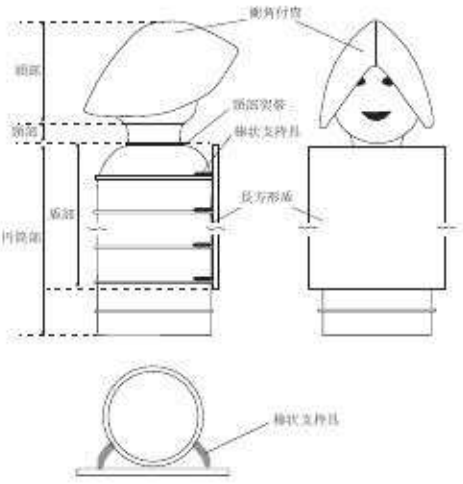


図 114　茅原大墓古墳盾持人埴輪　模式図

（2）盾持人埴輪の研究

盾持人埴輪は、顔を表現するものの手足はなく、盾を構える独特な形態をしており、器財埴輪と人物埴輪の両方の要素を併せ持つ。このため、研究史上でも器財埴輪としてとらえるものと、人物埴輪の一部としてとらえる二通りの流れがあるといえる。

器財埴輪との関わりのなかで盾持人埴輪を取り扱っているのは、高橋工と若狭徹である。高橋は、大阪府高廻１・２号墳の整理をする中で盾形埴輪を比較する際に、盾形埴輪に冑形埴輪を搭載する例があることをあげ、盾持人埴輪の源流が顔面を表現しない冑形埴輪と盾形埴輪の合わさったものにあるのではないかと推測している（高橋工1991）。

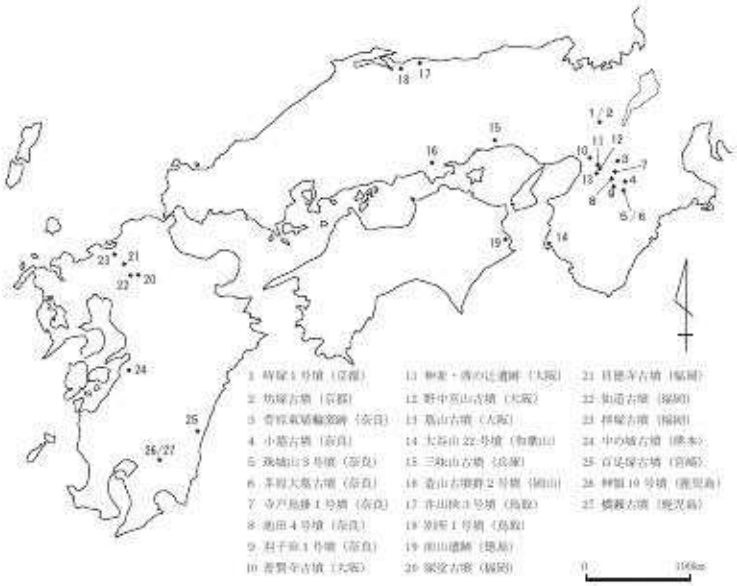


図115　盾持人埴輪　西日本分布図

一方、盾持人埴輪を人物埴輪の初期段階のものととらえる見方も多い。この視点を早くに提示したのは間壁葭子である。間壁は、福岡県拝塚古墳の盾持人埴輪を人物埴輪の起源の一つであるとした（間壁1990）。その後、清水真一が奈良県珠城山３号墳の盾持人埴輪と拝塚古墳の盾持人埴輪を中心に全国の盾持人埴輪を検討対象とし、その樹立には横穴式石室の導入に伴う葬送儀礼の変革があるとした（清水1995）。また、塩谷修は、盾持人埴輪を形態や配置の要素で分類したうえで編年基準を示し、盾持人埴輪の祖形を中国の葬送儀礼に登場する方相氏と関連させた（塩谷2001）。加えて近年では、岡崎晋明による検討（岡崎2013）がなされており、盾持人埴輪の遡源が従来の方相氏に加えて、遊部をも含む可能性を指摘している。上記以外にも若狭徹による群馬県保渡田八幡塚古墳出土の埴輪群のなかでの検討や（若狭2000）、塚田良道による武装人物埴輪の関連での検討が行われており（塚田2007）、器財埴輪や人物埴輪と盾持人埴輪との関係はずいぶん整理されてきたといえる。従来の検討は、出土数の豊富な関東地域を中心に行われてきた。

しかし関東地域の盾持人埴輪をみると、頭部表現や盾面の文様といった盾持人埴輪の構成要素にお

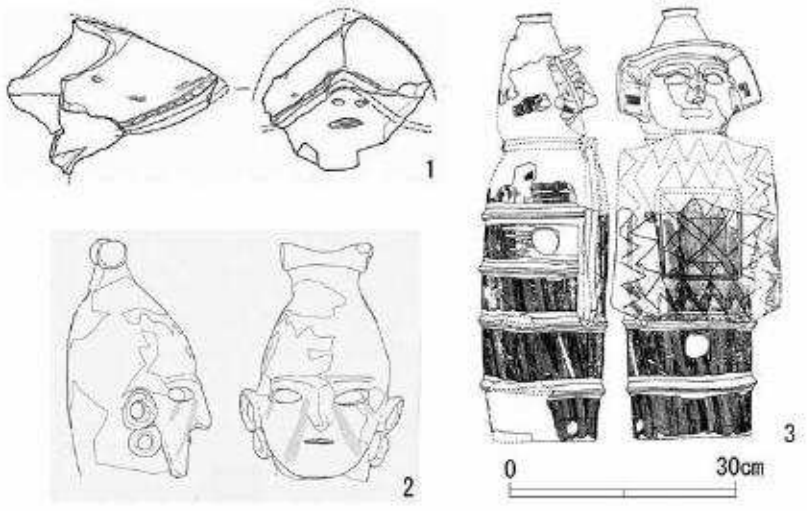
いて、近畿で出土している盾持人埴輪とは様相を異にしている。そのため、以下で、茅原大墓古墳出土例を中心に近畿および近畿以西の盾持人埴輪の形態的な特徴を比較する。

（3）盾持人埴輪の形態的特徴

まず、頭部に着目すると、茅原大墓古墳例では無文の粘土板が斜めに貼付されている。後頭部が欠損しているため確実な全体像は不明であるが、伝奈良県御所市出土の冑形埴輪や藤井寺市野中宮山古墳出土の盾持人埴輪頭部に類似するものであり、衝角付冑の表現であると考えられる。茅原大墓古墳例のように冑の表現を有する盾持人埴輪は、奈良県池田4号墳、大阪府野中宮山古墳、大阪府墓山古墳、鹿児島県神領10号墳があげられる[6]。このうち、神領10号墳例が眉庇付冑を表現している以外は全て衝角付冑を表現している。冑の表現に関しては、茅原大墓古墳と野中宮山古墳出土例は冑部分がほぼ無文であることから、革製の衝角付冑である可能性があり、池田4号墳については、三角形状の線刻と径1cmほどの円形粘土の貼り付けがみられることから、三角板鋲留衝角付冑であると考えられる。

一方、関東や関東以東で出土している盾持人埴輪では、冑を着用している表現はほとんど存在しない。頭部表現の多くが笄帽と呼称される棒状表現の頭部であり、関東での盾持人埴輪の初期例が出土している群馬県保渡田八幡塚古墳で眉庇付冑と考えられる表現を有しているのみである（図116の3）。関東での盾持人埴輪の出現時期は近畿よりも若干遅れることから、盾持人埴輪が冑を着用する例は近畿の比較的早い段階を中心にみられることがわかる。

次に盾面の文様と形態を比較する。茅原大墓古墳の盾持人埴輪は盾面の上半分が残存しており、文様を推測することができる。盾面の形態は長方形であり、周囲に綾杉文を施す。内部は綾杉文でⅡ字形に区切り、平行線で充填された鋸歯文を描く。Ⅱ字の内側には三重の菱形文が描かれる。このような文様は、盾形埴輪にも多くみられるものであり、典型的な盾面の施文方法であるといえる。茅原大墓古墳例と同様に比較的盾形埴輪と類似した文様を描いているものには池田4号墳の盾持人埴輪があ



1　野中宮山古墳（大阪）　2　中二子古墳（群馬）　3　保渡田八幡塚古墳（群馬）
図116　盾持人埴輪頭部比較（S＝1/10）

げられる。近畿や近畿以西の盾持人埴輪では時期が下るにつれ、文様の簡略化や無文化が進む。

一方、関東で出土している盾持人埴輪は近畿で出土するような盾形埴輪の文様を持つものは少なく、簡略化もしくは無文であるものがほとんどである。また、戈を持つものや盾面に赤色顔料で文様を描くものは近畿ではほとんど類例がなく、関東で特有のものといえる。

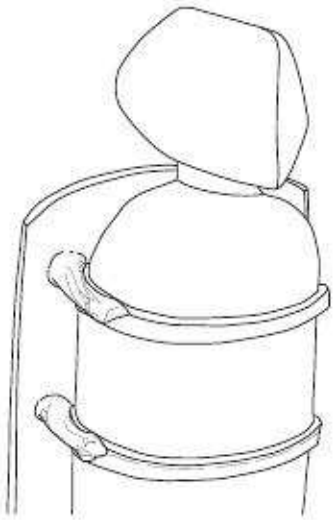


図117　支持具使用状況

（4）盾持人埴輪の製作技法

盾持人埴輪の検討は、その形態、配置、祖形に重点が置かれることが多く、製作時の特徴について述べているものは少ない。しかし、茅原大墓古墳例では製作時の技術に興味深い点がみられるため、いくつか検討してみたい。

支持具　円筒部と盾面を補強する部品として棒状の支持具が用いられている。通常、盾形埴輪や他の盾持人埴輪では、三角形板状の部品を突帯と盾面の間に挟むものが多い。しかし、茅原大墓古墳例では、突帯の上部に棒状の粘土の一方の端をのせ、盾面裏側にもう片方の端を押し付ける方法を採用している。突帯には特別な痕跡は見られないものの、盾面裏側には明確な円形の剥離痕が残る（写真13）。棒状支持具については、完形に近いもので4点、欠損しているものが1点確認されている。完形に近いものでは、8.5cm～9.5cmのものが3点、3.6cmのものが1点あり、長いものについては、盾面の側面につく（図117）。短いものについては、接合箇所が不明であるものの、側面では長さが足りないことから、盾面の下部につくことが考えられる。

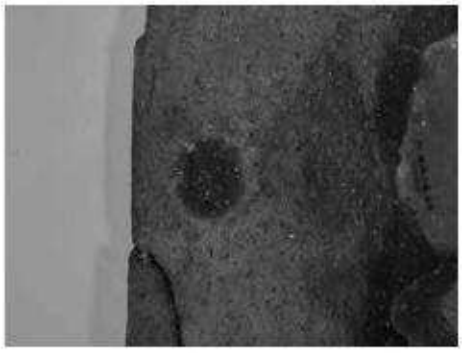


写真13　盾面裏側の支持具剥離痕

三角形板状支持具と比べた耐久性は測りがたいが、全ての支持具が剥落しており、盾面にも割れが多いことから、あまり有効な手段ではなかった可能性が高い。

頸部　円筒部から朝顔形埴輪の肩部のように若干の丸みをもって閉塞していったのちに、径13cmほどの頸部が立ち上がる。肩部と頸部の境界には、突帯が貼り付けられている。この突帯は、盾面に隠れて正面からは見えない位置にあり、朝顔形埴輪の形態を真似たか、肩部と頸部の補強として貼り付けられたと考えられる。同様に肩部から頸部を作り出すものは奈良県池田4号墳にみられるが、池田4号墳では、肩部と頸部の境界に突帯を貼り付けない。また、頸部の後部が欠損しているために確定はできないものの、少し前かがみになるように成形されているか、上部に向かって頸部の径が大きくなるように成形されている可能性が高い。

顔面部　顔面部は下部が球形、上部が平面的に成形される。頸部の上端から再度3cmほど粘土紐を積むか巻き上げる。その上に、五角形に成形した粘土板を乗せる。その後、横から三角形の粘土板

を貼付けて冑表現するとともに、顔面部を固定する。最後に顎部分を貼付けて顔面部の形を完成させるという技法を用いる。盾持人埴輪の顔面部に関しては、板状の表現をするものが多いことは従来から知られているが、粘土紐積み上げ後に粘土板を貼り足して板状に見せるものが多く、実際に粘土板で作るものは、京都府時塚1号墳でみられるものの、かなり限られる。近畿内でも、頸部が類似する池田4号墳では、粘土紐巻き上げで成形しており、多くが人物埴輪と同様の製作技法を用いている。茅原大墓古墳の盾持人埴輪が顔面を胴部から直接作り出す人物埴輪の出現よりも遡ることから、頭部製作については定型化していない、試行段階と考えることも可能であるといえる。

（5）盾持人埴輪の配置位置と樹立古墳の規模

茅原大墓古墳の盾持人埴輪は、クビレ部に樹立した円筒部が残っていたことから、クビレ部に立てられていた可能性が極めて高いと言える。しかしながら他古墳での盾持人埴輪の樹立場所をみると、必ずしも樹立場所がクビレ部とは限らない。また、関東を中心とする地域では、関西以西よりも一古墳における盾持人埴輪の樹立数が多く、外堤に立て並べる姿がみられる。茅原大墓古墳で出土している鳥形埴輪は盾持人埴輪と同じ東クビレ部ではあるが、転落石中から出土しており、墳丘上に樹立されていた可能性がある。盾持人埴輪は墳丘裾の樹立であるので、樹立場所が若干異なると考えられる。また蓋形埴輪は後円部南斜面から出土しており、盾持人埴輪とは分けて樹立されていたと考えられる。盾持人埴輪と他の形象埴輪が分けて樹立される例は他古墳でも多くみられ、盾持人埴輪が威儀を示す他の形象埴輪とは一線を画した役割を持っていたとも推定される。

また、盾持人埴輪を樹立している古墳の規模をみると、大古墳には少なく、中・小規模の前方後円墳に多く樹立されている。古市古墳群内の墓山古墳や野中宮山古墳では出土しているものの、他の大規模古墳では今のところ出土が確認されない。盾持人埴輪と同様の意味を持つ甲冑形埴輪や盾形埴輪が古墳規模に関わらず樹立されることを考えると、盾持人埴輪の樹立は限定的であったと考えられる。

（6）まとめ

以上のことより、茅原大墓古墳の盾持人埴輪は形態的には、冑を被り、盾面文様が崩れていないことから、初期段階の例であるといえる。また、製作技術が定型化していないという点もそれを傍証することとなるだろう。盾持人埴輪のみでは、ピンポイントで年代を押さえることは難しいものの、当古墳で出土している円筒埴輪に明瞭な静止痕が認められない点や、蓋形埴輪の笠部が線刻表現のなかでも比較的古い様相を呈することから考えると、野中宮山古墳や墓山古墳よりも古い段階と考えられ、大阪府津堂城山古墳に前後する時期に相当すると推定される。

今回は、茅原大墓古墳出土例を中心にその形態と製作技術を概観した。盾持人埴輪の研究において議論される祖形の問題や埴輪群内での意義についての検討については十分なしえなかったため、今後の課題としたい。

4．さいごに

昭和57年の史跡指定より30余年を経て、ようやく茅原大墓古墳の歴史的な意義を検討できる段階に至ることができた。その評価は単に一地域の首長墳であるということにとどまるものではなく、古墳時代の政権勢力の変動の様子を体現する貴重な資料として、国指定史跡に相応しい価値を有しているということができる。また茅原大墓古墳の周辺には、纒向遺跡をはじめとする著名な遺跡や古墳、社寺が数多く存在しており、これらを含めた地域全体が持つ歴史的価値もまた大きいということができるだろう。今後はそうした茅原大墓古墳の歴史的意義や地域的特性を活かし、かつ将来にわたって良好に遺構を保存していくことができるよう、史跡整備事業を進めていきたいと考える。

なお最後になりましたが、発掘調査に際しましては地元茅原区の住民の皆様には様々なかたちでご協力をいただきました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

【註記】

1）清家章　1999「古墳時代周辺埋葬考－畿内の埴輪棺を中心に－」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集

2）高橋裕子　2009「前方後円墳周濠の渡土堤について」『京都橘大学文化財調査報告　2008』京都橘大学文学部

3）森下章司　1998「古墳時代前期の年代試論」『古代』105号

4）小野山節　1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』16－3　考古学研究会

5）都出比呂志　1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22号　大阪大学文学部
沼澤豊　2006『前方後円墳と帆立貝式古墳』　雄山閣

6）伝大分県野津例についても頭部が冑状であるとの指摘がある（高橋工1991）。

【参考文献】

岡崎晋明　2013「盾持ち人埴輪の諸相」『龍谷日本史研究』第36号、龍谷大学日本史学研究会

群馬町教育委員会　2000『保渡田八幡塚古墳　史跡保渡田古墳群八幡塚古墳保存整備事業報告書　調査編』群馬町埋蔵文化財調査報告書第57集

塩谷修　2001「盾持人物埴輪の特質とその意義」『日本考古学の基礎研究－茨城大学人文学部考古学研究報告第４冊－』、茨城大学人文学部考古学研究室

清水真一　1995「盾持人物埴輪考」『古代を考える会20周年記念　古代学評論』第４号、古代を考える会

高橋工　1991「盾形埴輪の検討」『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、大阪市文化財協会

塚田良道　2007『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣

藤井寺市教育委員会　2011『石川流域遺跡群発掘調査報告26』藤井寺市文化財報告第31集

前橋市教育委員会　1995『中二子古墳』大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報第３集

間壁葭子　1990「女性人物埴輪出現の背景」『神戸女子大学（文学部）紀要・二四L巻・史学編』神戸女子大学

若狭徹　1993「群馬県の人物埴輪受容期をめぐる２、３の考察」『月刊考古学ジャーナル』No.357、ニュー・サイエンス社

若狭徹　2000「人物埴輪の出現と受容―研究の回顧と上野の場合―」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』頌寿記念会

若松良一　日高慎　1992「形象埴輪の配置と復元される葬送儀礼（上）－埼玉瓦塚古墳の場合を中心に－」『調査研究報告』第５号、埼玉県さきたま資料館

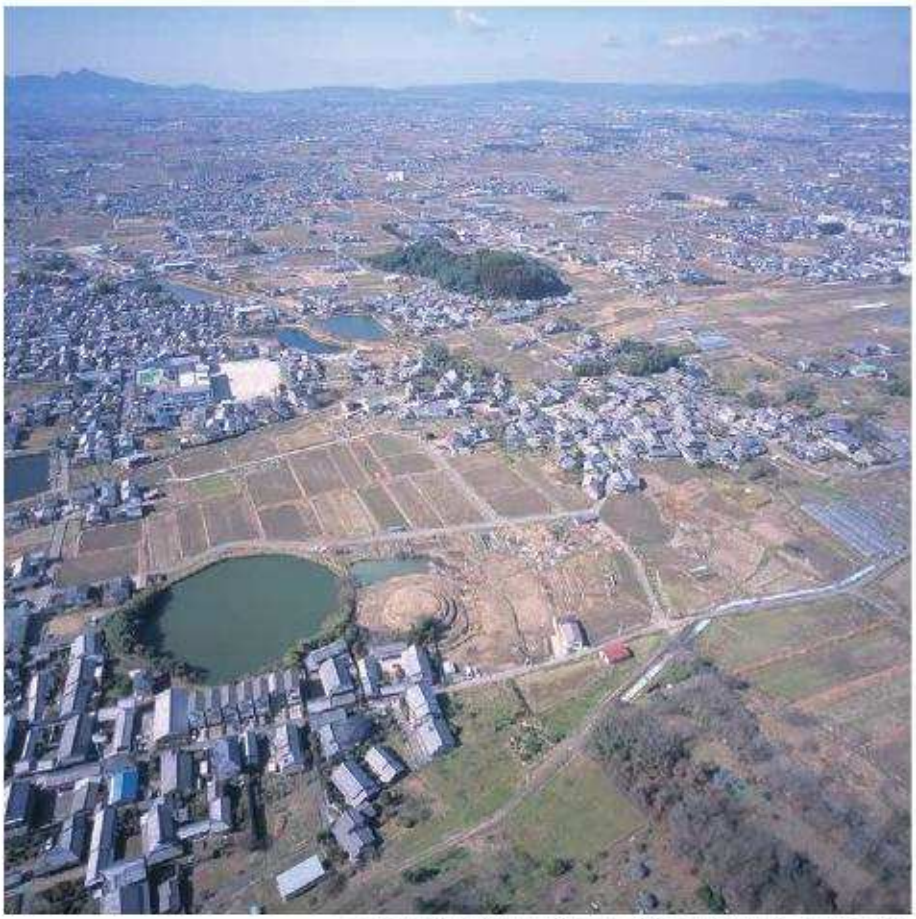
【図出典】

図116：1．藤井寺市教育委員会2011　2．前橋市教育委員会1995　3．群馬町教育委員会2000

写　真　図　版

図版１　茅原大墓古墳遠景

茅原大墓古墳と三輪山（第６次調査時、西より）



茅原大墓古墳と箸墓古墳（第５次調査時、南東より）

図版２　茅原大墓古墳の現況

茅原大墓古墳の現況①（第５次調査後、西より）

茅原大墓古墳の現況②（第５次調査後、北東より）

図版３　茅原大墓古墳全景（１）

茅原大墓古墳全景①（第１次調査後、左下が北）

茅原大墓古墳全景②（第２次調査時、下が北）

図版 4　茅原大墓古墳全景（2）

茅原大墓古墳全景③（第 3 次調査時、下が北）

茅原大墓古墳全景④（第 4 次調査時、下が北）

茅原大墓古墳全景⑤（第５次調査時、下が北）

茅原大墓古墳全景⑥（第６次調査時、下が北）

図版6　3－2トレンチ（1）

後円部のトレンチ①（第3次調査、下が北）

後円部のトレンチ②（第3次調査、西より）

図版7　3－2トレンチ（2）

トレンチ全景①（西より）

トレンチ全景②（東より）

図版８　３－２トレンチ（３）

後円部頂西側の埴輪列①（上面検出状況、北より）

後円部頂西側の埴輪列②（北西より）

円筒埴輪（1）出土状況（西より）

円筒埴輪（3）・（4）出土状況（西より）

円筒埴輪（2）出土状況（西より）

後円部頂西側埴輪列 断ち割り断面（北西より）

図版10　3－2トレンチ（5）

トレンチ南壁の土層（北西より）

トレンチ中央付近の埴輪片集積状況（北西より）

後円部頂付近の墳丘盛土断面（北西より）

3－3トレンチ設置状況（北より）

トレンチ全景①（左が北）

図版12　3－3トレンチ（2）

トレンチ全景②（南より）

トレンチ全景③（北より）

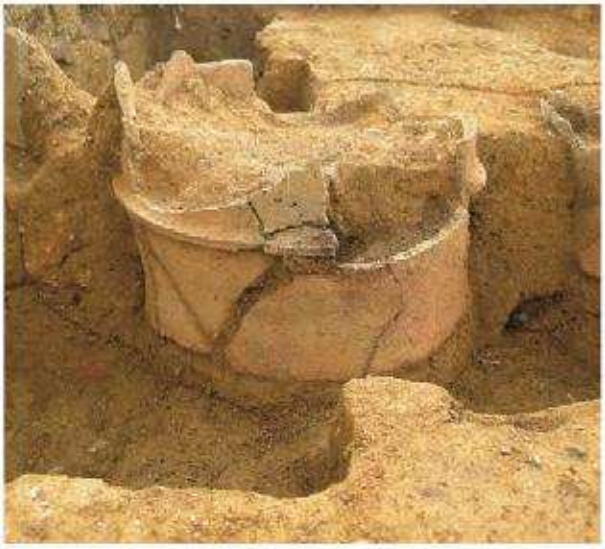
後円部頂北側の埴輪列①（上面検出状況、西より）

後円部頂北側の埴輪列②（北東より）

図版14　3－3トレンチ（4）

後円部頂北側埴輪列の掘方断面（西より）

円筒埴輪（6）出土状況（北より）



円筒埴輪（8）出土状況（北より）

円筒埴輪（9）出土状況（北より）

円筒埴輪（10）出土状況（北より）

円筒埴輪（7）出土状況（北より）

後円部頂北側埴輪列の土層断面（北東より）

円筒埴輪（8）内埋土の断面（北より）

円筒埴輪（9）内埋土の断面（北より）

円筒埴輪（10）内埋土の断面（北より）

掘方完掘状況（北東より）

図版16　3－3トレンチ（6）

後円部２段目北側の埴輪列①（上面検出時、西より）

後円部２段目北側の埴輪列②（北東より）

後円部2段目北側の埴輪列③（北西より）

円筒埴輪（14）出土状況（北より）

円筒埴輪（14）内埋土の断面（北より）

円筒埴輪（15）内埋土の断面（北より）

円筒埴輪（16）・（17）内埋土の断面（北より）

図版18　3－3トレンチ（8）

後円部２段目北側の埴輪列④
（埴輪内埋土完掘後、北より）

後円部２段目北側の埴輪列⑤
（埴輪内埋土完掘後、西より）

後円部２段目平坦面と埴輪列
（北西より）

掘方完掘状況（北東より）

後円部２段目北側 転落石検出状況
（北西より）

後円部２段目北側の葺石①
（北西より）

後円部２段目北側の葺石②
（北より）

図版20　3－3トレンチ（10）

後円部２段目北側の葺石③
（西より）

木棺墓 埋土断面（西より）

木棺墓 鉄釘出土状況（南より）

後円部北側斜面（北西より）

後円部頂北側の墳丘盛土断面
（南西より）

後円部北側斜面の墳丘盛土断面
（北西より）

図版22　3－3トレンチ（12）

前方部上面の土層①（北西より）

葺石裏側の墳丘盛土断面
（北西より）

前方部上面の近世溝（西より）

前方部上面の土層②（南西より）

トレンチ北端付近の墳丘盛土断面
（南西より）

トレンチ埋め戻し後の状況
（北より）

図版24　3－4トレンチ（1）

トレンチ全景①（南より）

トレンチ全景②（北より）

後円部2段目南側の埴輪列①（上面検出時、南より）

後円部2段目南側の埴輪列②（上面検出時、西より）

図版26　３－４トレンチ（３）

後円部２段目南側の埴輪列③（西より）

後円部２段目南側の埴輪列④（南より）

円筒埴輪（12）出土状況
（南西より）

円筒埴輪（11）出土状況
（北西より）

埴輪列断ち割り断面（南より）

図版28　３－４トレンチ（５）

後円部頂南側の墳丘盛土断面
（南西より）

後円部南側斜面の墳丘盛土断面①
（南西より）

後円部南側斜面の墳丘盛土断面②
（南西より）

図版29　4－5トレンチ（1）

トレンチ全景（下が北）

トレンチ西側 埴輪・転落石出土状況①（北東より）

図版30　４－５トレンチ（２）

トレンチ西側 埴輪転落石出土状況②（北より）

壺形埴輪（185）出土状況（北より）

図版31　4－5トレンチ（3）

後円部北側２段目の葺石①（北東より）

後円部北側２段目の葺石②（北より）

図版32　４－５トレンチ（４）

埴輪棺１　墓壙上面検出状況①
（北西より）

埴輪棺１　墓壙上面検出状況②
（南西より）

埴輪棺１　墓壙上面検出状況③
（南東より）

埴輪棺1　墓壙埋土断面①
（南西より）

埴輪棺1　墓壙埋土断面②
（北西より）

埴輪棺1　墓壙埋土断面③
（北西より）

図版34　４－５トレンチ（６）

埴輪棺１　棺上面検出状況①（北西より）

埴輪棺１　棺上面検出状況②（南東より）

埴輪棺1　棺上面検出状況③（南西より）

埴輪棺1　棺上面検出状況④（北東より）

図版36　4－5トレンチ（8）

鉄製品（284～286）出土状況
（北東より）

鉄製品（287）出土状況①
（北西より）

鉄製品（287）出土状況②
（北西より）

埴輪棺1　棺内検出状況①（北西より）

埴輪棺1　棺内検出状況②（南東より）

図版38　4－5トレンチ（10）

埴輪棺１　棺内検出状況③（南西より）

埴輪棺１　棺内検出状況④（北東より）

埴輪棺1　棺側・棺下の埴輪片①
（南東より）

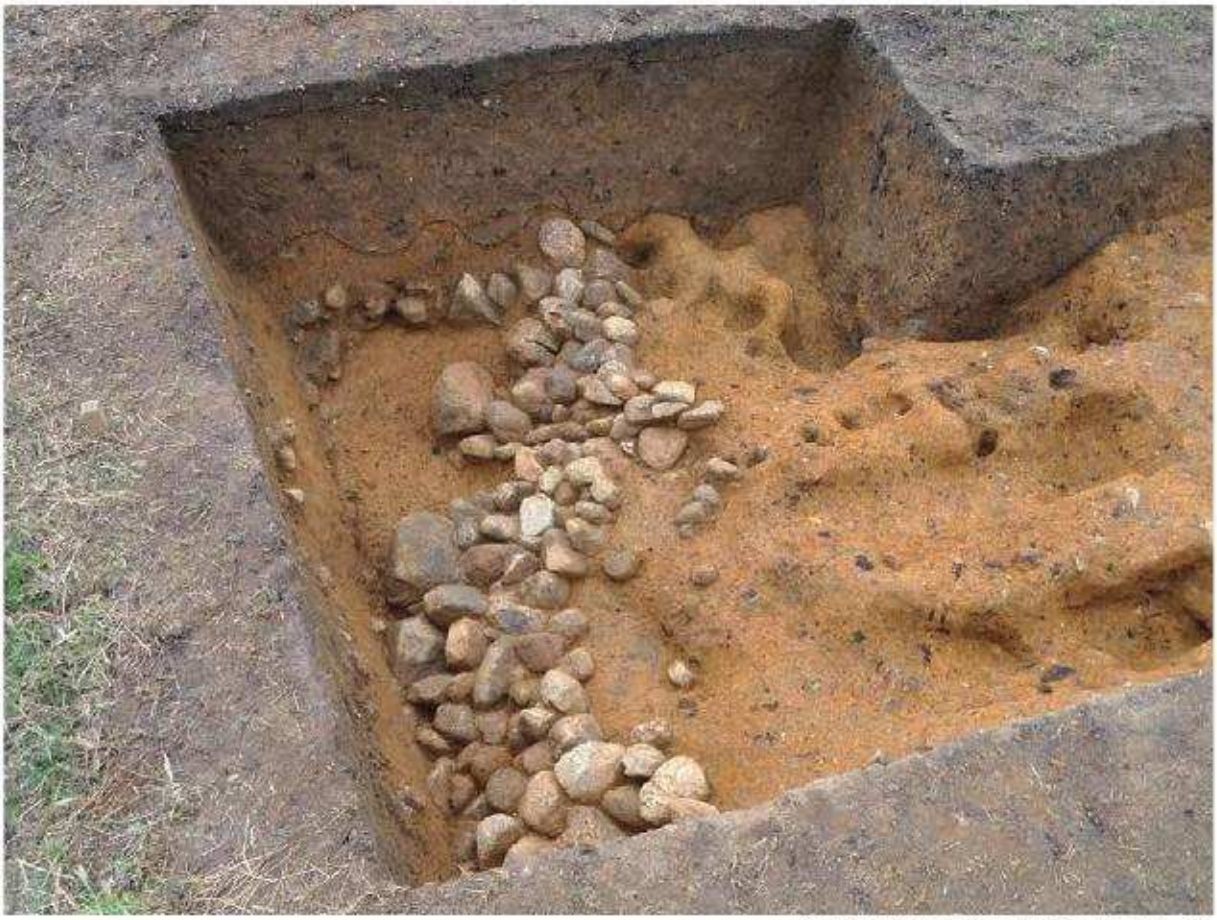
埴輪棺1　棺側・棺下の埴輪片②
（西より）

埴輪棺1　墓壙完掘状況（西より）

図版40　4－5トレンチ（12）

前方部2段目東側 転落石検出状況①（北東より）

前方部2段目東側 転落石検出状況②（南東より）

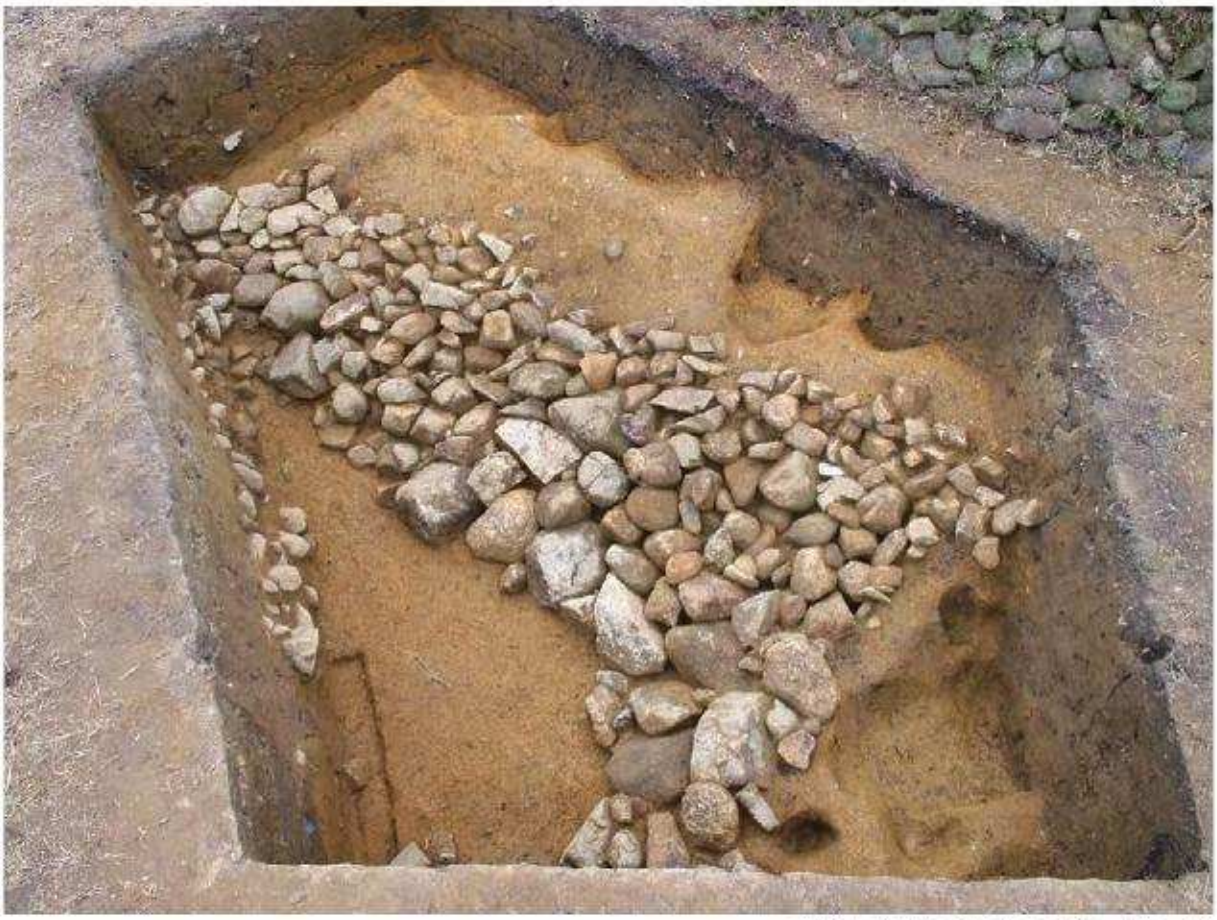


前方部２段目東側の葺石①（北東より）

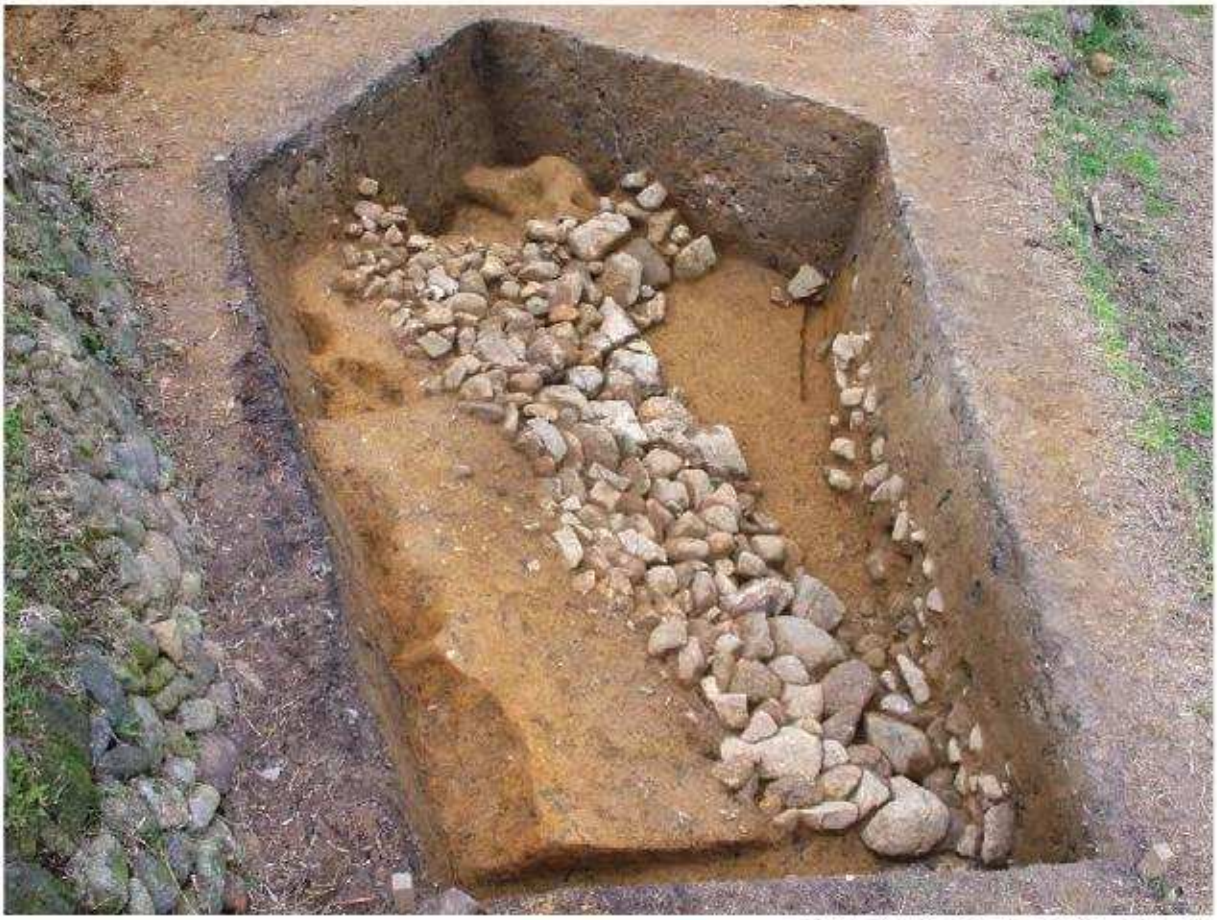
前方部２段目東側の葺石②（南東より）

図版42　5－1トレンチ（1）

東側くびれ部2段目 転落石検出状況（北より）



東側くびれ部2段目の葺石①（北より）



東側くびれ部2段目の葺石②（南より）

東側くびれ部2段目の葺石③（南西より）

図版44　５－２トレンチ（１）

トレンチ全景①（下が北）

トレンチ全景②（北側拡張前、東より）

西側くびれ部2段目 転落石検出状況（北西より）

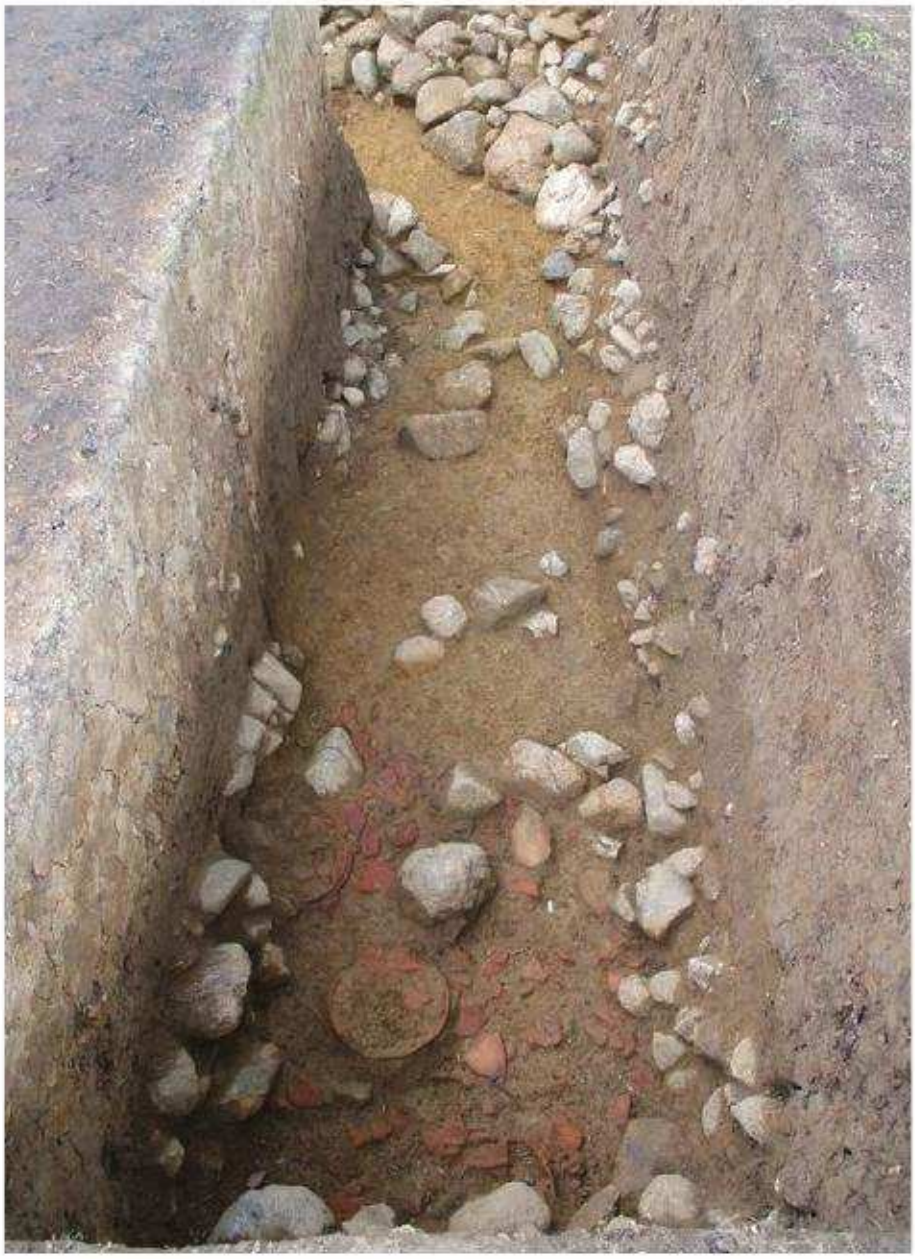
西側くびれ部2段目の葺石①（北西より）

図版46　５－２トレンチ（３）

西側くびれ部２段目の葺石②（南より）

西側くびれ部２段目の葺石③（西より）

トレンチ北壁の土層
（拡張前、南西より）



後円部1段目埴輪列付近の
遺物出土状況（西より）

図版48　5－2トレンチ（5）

後円部1段目の埴輪列①（上面検出状況、南東より）

後円部1段目の埴輪列②（東より）

円筒埴輪（18～20）内埋土の断面（南東より）

掘方完掘状況（南東より）

後円部２段目基底と埴輪列（西より）

図版50　５－２トレンチ（７）

埴輪棺２　検出状況
（北側拡張前、南より）

埴輪棺２　墓壙上面検出状況
（西より）

埴輪棺２　墓壙上層埋土断面
（西より）

墳丘2段目斜面の葺石と埴輪棺2（北西より）

埴輪棺2 棺上面検出状況①（西より）

図版52　５－２トレンチ（９）

埴輪棺２　棺上面検出状況②
（南より）

埴輪棺２　上面埴輪除去後
（左が北）

埴輪棺２　墓壙完掘状況（西より）

埴輪棺３　墓壙上面検出状況
（左下が北）

埴輪棺３　内側の状況（東より）

埴輪棺３　南西小口部分
（北東より）

図版54　３－５トレンチ

トレンチ全景①（南より）

トレンチ全景②（北より）

トレンチ東壁の土層断面
（南西より）

図版55　１－１トレンチ、１－２トレンチ

１－１トレンチ（西より）

後円部南西側の転落石
（西より、１－１トレンチ）

１－２トレンチ（東より）

図版56　４－１トレンチ（１）

周濠埋土上面検出状況①
（東より）

周濠埋土上面検出状況②
（西より）

周濠中層埋土検出状況①
（北東より）

周濠中層埋土検出状況②（東より）

周濠中層埋土検出状況③（西より）

転落石・腐植層検出状況①
（北東より）

図版58　４－１トレンチ（３）

転落石・腐植層検出状況②
（東より）

転落石・腐植層検出状況③
（西より）

転落石検出状況（北東より）

図版59　4－1トレンチ（4）

周濠埋土完掘状況①（東より）

周濠埋土完掘状況②（西より）

図版60　4－1トレンチ（5）

後円部1段目東側の葺石①（北東より）

後円部1段目東側の葺石②（東より）

周濠内埋土断面（北西より）

茅原大墓古墳後円部と４－１トレンチ（東より）

図版62　４－１トレンチ（７）

後円部東端付近の周濠内埋土（北より）

墳丘残存部の上面（北東より）

墳丘盛土の断面（北より）

第4次調査時のトレンチ（下が北）

4－2トレンチ全景（下が北）

図版64　４－２トレンチ（２）

周濠埋土上面検出状況①
（東より）

周濠埋土上面検出状況②
（南東より）

周濠埋土上面検出状況③
（北より）

周濠内の遺物・転落石検出状況①（東より）

周濠内の遺物・転落石検出状況②（北より）

図版66　４－２トレンチ（４）

周濠内の遺物・転落石検出状況③
（北西より）

円筒埴輪（92・93）出土状況
（東より）

盾持人埴輪（268）顔面部破片の出
土状況（東より）

図版67　4－2トレンチ（5）

周濠内埋土完掘状況①（東より）

周濠内埋土完掘状況②（北より）

図版68　４－２トレンチ（６）

周濠内埋土完掘状況③（南東より）

東側くびれ部１段目の葺石（東より）

盾持人埴輪基部とくびれ部基底
（北東より）

盾持人埴輪盾面部の破片出土状況
（東より）

盾持人埴輪基部内上層遺物出土状況
（北より）

図版70　４－２トレンチ（８）

盾持人埴輪基部内下層遺物出土状況
（北より）

盾持人埴輪基部内遺物取り上げ後
（北より）

盾持人埴輪基部 掘方内埋土断面
（東より）

図版71　2トレンチ（1）

周濠埋土上面検出状況（南側拡張前、南東より）

トレンチ全景（南東より）

図版72　２トレンチ（２）

転落石検出状況（東より）

前方部１段目東側面の葺石①（東より）

前方部1段目東側面の葺石②（南東より）

周濠埋土断面（北東より）

図版74　２トレンチ（４）

前方部基底付近の盛土断面
（北より）

葺石裏側の盛土断面（北より）

トレンチ東端の周濠埋土断面
（北より）

図版75　４－３・４トレンチ（１）

４－４トレンチ周濠上面検出状況
（トレンチ結合前、南西より）

４－４トレンチ転落石検出状況
（トレンチ結合前、南西より）

４－３トレンチ周濠上面検出状況
（トレンチ結合前、北より）

図版76　4－3・4トレンチ（2）

周濠中層埋土検出状況①（北東より）

周濠中層埋土検出状況②（南西より）

図版77　４－３・４トレンチ（３）

トレンチ北側 転落石検出状況（北より）

トレンチ北側 周溝埋土完掘状況（北より）

図版78　４－３・４トレンチ（４）

トレンチ南壁の土層断面
（東より）

渡土堤及び周濠底面の盛土断面（東より）

トレンチ全景（北東より）

図版79　５－３トレンチ（１）

トレンチ全景（下が北）

茅原大墓古墳墳丘と５－３トレンチ（北東より）

図版80　5－3トレンチ（2）

周濠埋土上面検出状況①
（北東より）

周濠埋土上面検出状況②
（南西より）

周濠埋土上面検出状況③
（南東より）

図版81　5－3トレンチ（3）

渡土堤周辺 転落石検出状況①（南西より）

渡土堤周辺 転落石検出状況②（北東より）

図版82　５－３トレンチ（４）

渡土堤東側の転落石検出状況（東より）

渡土堤西側の転落石検出状況（北より）

図版83　5－3トレンチ（5）

渡土堤検出状況①（南西より）

渡土堤検出状況②（北東より）

図版84　５－３トレンチ（６）

渡土堤検出状況③（南東より）

渡土堤検出状況④（北西より）

前方部北東隅と渡土堤東側の葺石①（東より）

前方部北東隅と渡土堤東側の葺石②（南より）

図版86　5－3トレンチ（8）

前方部前面と渡土堤西側の葺石①（北より）

前方部前面と渡土堤西側の葺石②（西より）

前方部東側の周濠埋土断面
（北より）

前方部前面の周濠埋土断面
（北東より）

渡土堤西側の周濠埋土断面
（南西より）

図版88　5－3トレンチ（10）

渡土堤断ち割り断面①
（南東より）

渡土堤断ち割り断面②
（南西より）

渡土堤断ち割り断面③
（南より）

図版89　4－6トレンチ（1）

周溝埋土上面検出状況（北より）

転落石検出状況（北より）

図版90　4－6トレンチ（2）

前方部前面の転落石（北西より）

前方部前面1段目の葺石①（北西より）

図版91　４－６トレンチ（３）

前方部前面１段目の葺石②（北より）

茅原大墓古墳墳丘と４－６トレンチ（北より）

図版92　4－6トレンチ（4）

トレンチ全景①（北より）

トレンチ全景②（南より）

図版93　4－6トレンチ（5）

トレンチ南端付近の土層（北西より）

周溝外側の立ち上がり（西より）

周溝埋土断面（南西より）

図版94　6－1トレンチ、6－2トレンチ（1）

茅原大墓古墳墳丘と第6次調査地（北西より）

第6次調査地全景（下が北）

図版95　６－１トレンチ、６－２トレンチ（２）

６－１トレンチ周濠埋土上面検出状況（拡張前、西より）

６－１トレンチ周濠埋土完掘状況（西より）

図版96　６－１トレンチ、６－２トレンチ（３）

６－２トレンチ周濠埋土
上面検出状況（北より）

６－２トレンチ転落石・
埴輪検出状況（北より）

６－２トレンチ周濠埋土
完掘状況（北より）

図版97　６－１トレンチ、６－２トレンチ（４）

東側周濠埋土検出状況（６－１トレンチ、南東より）

転落石検出状況（６－１トレンチ東側、南東より）

東側周濠埋土完掘状況（６－１トレンチ、南東より）

図版98　6－1トレンチ、6－2トレンチ（5）

6－1トレンチ北壁 周溝埋土断面
（南西より）

6－1トレンチ南壁 周溝埋土断面
（北西より）

渡土堤状遺構（南西より）

図版99　３－１トレンチ（１）

遺構上面検出状況（西より）

落ち込み１（北西より）

落ち込み２（南西より）

図版100　３－１トレンチ（２）

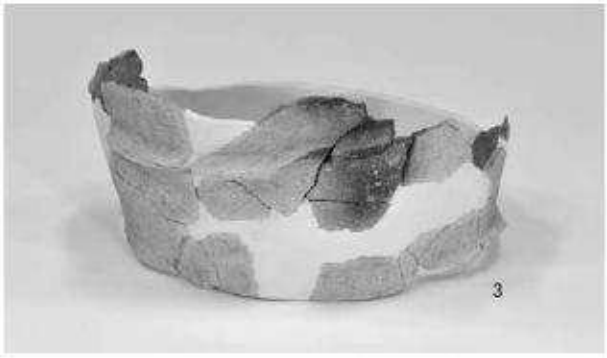
土坑１埋土断面（南より）

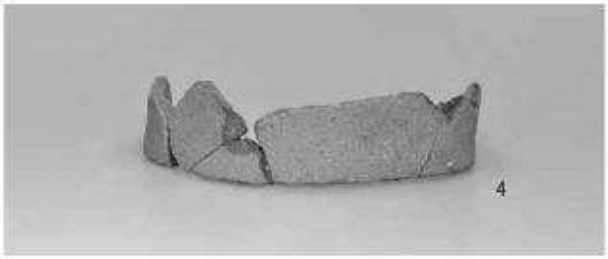
土坑１完掘状況（南より）

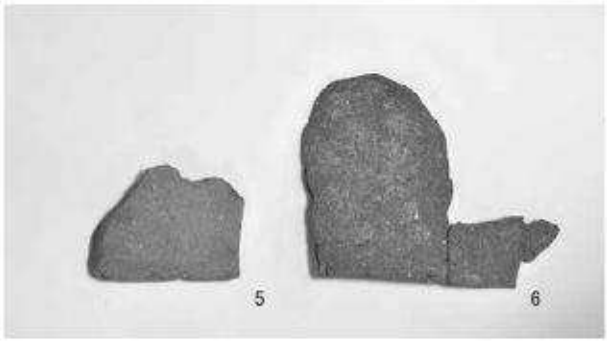
トレンチ全景（西より）

1

2


3


4

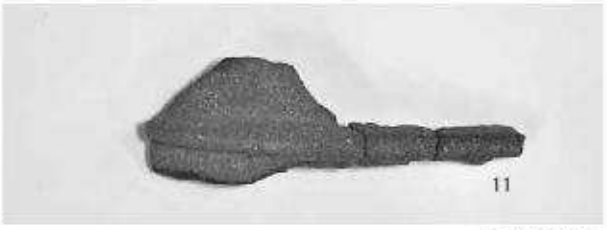

5 6

7

8

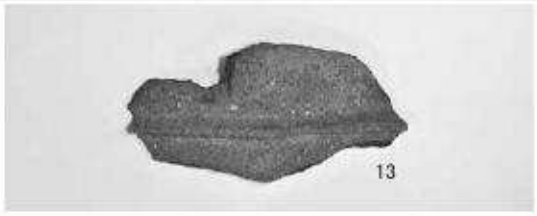
9

10


11

図版102　出土遺物（２）

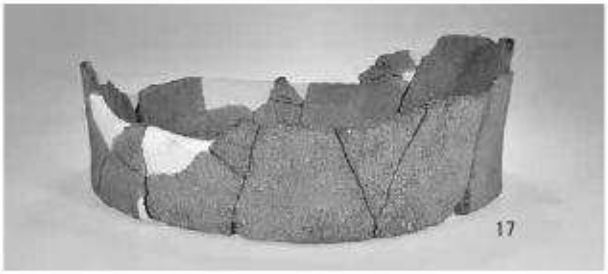
12


13

14

15

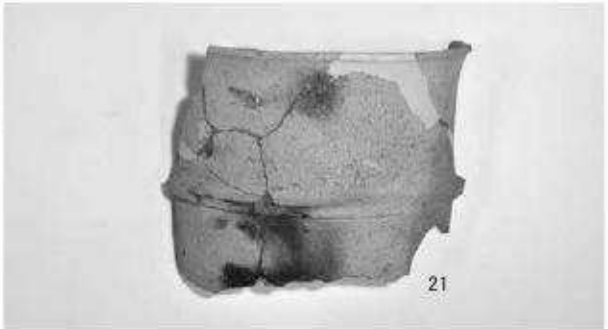
16


17

18

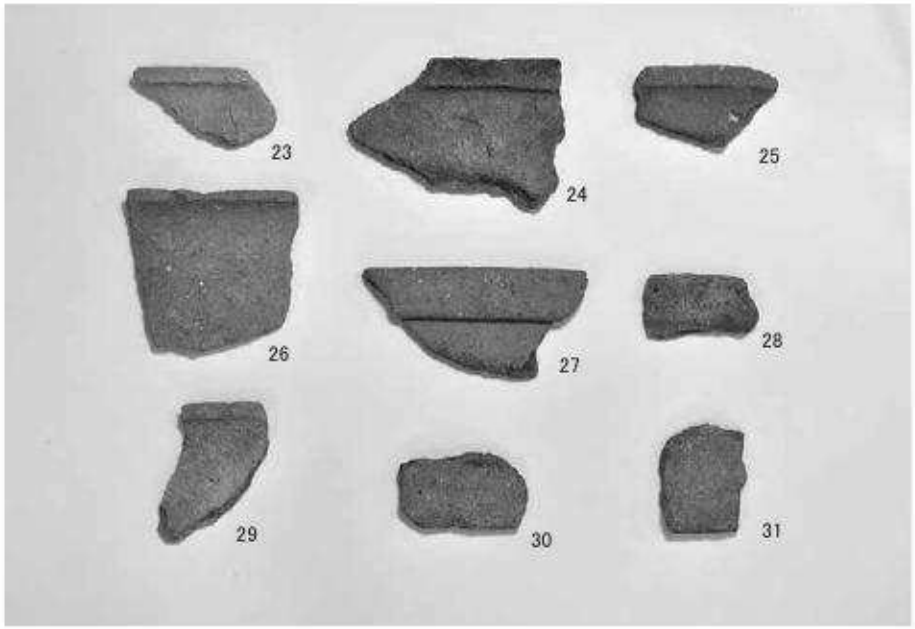
19

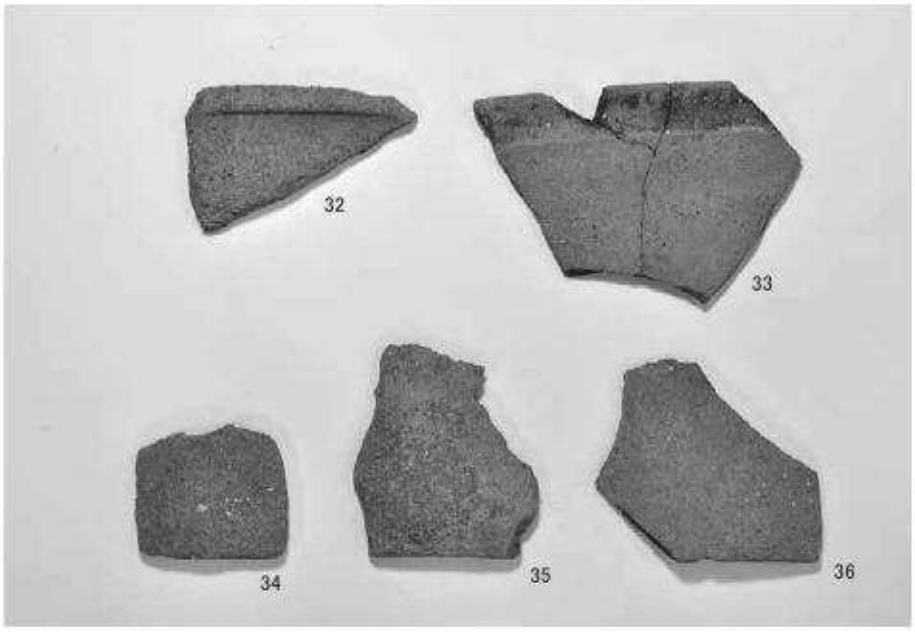
20

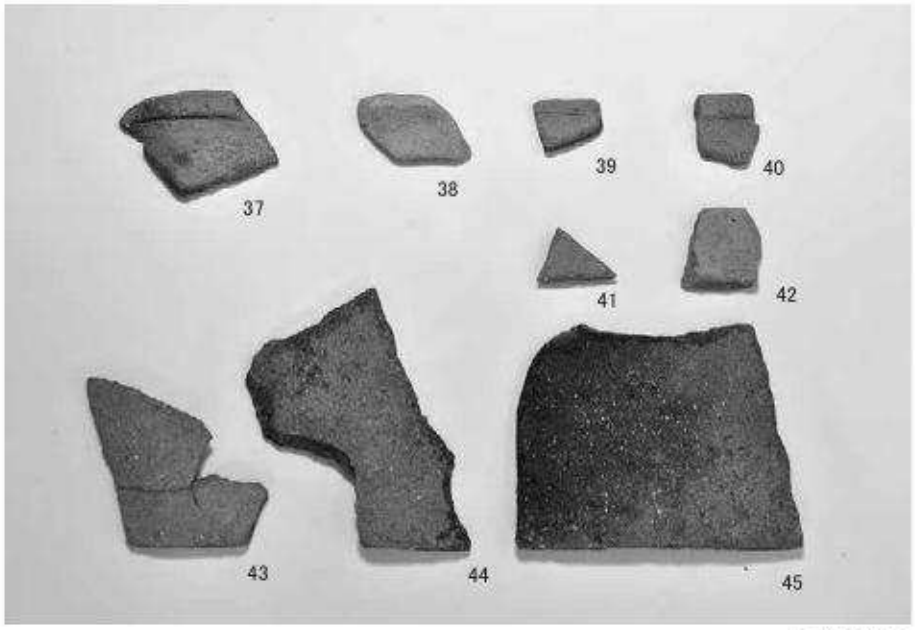

21

22

円筒埴輪②

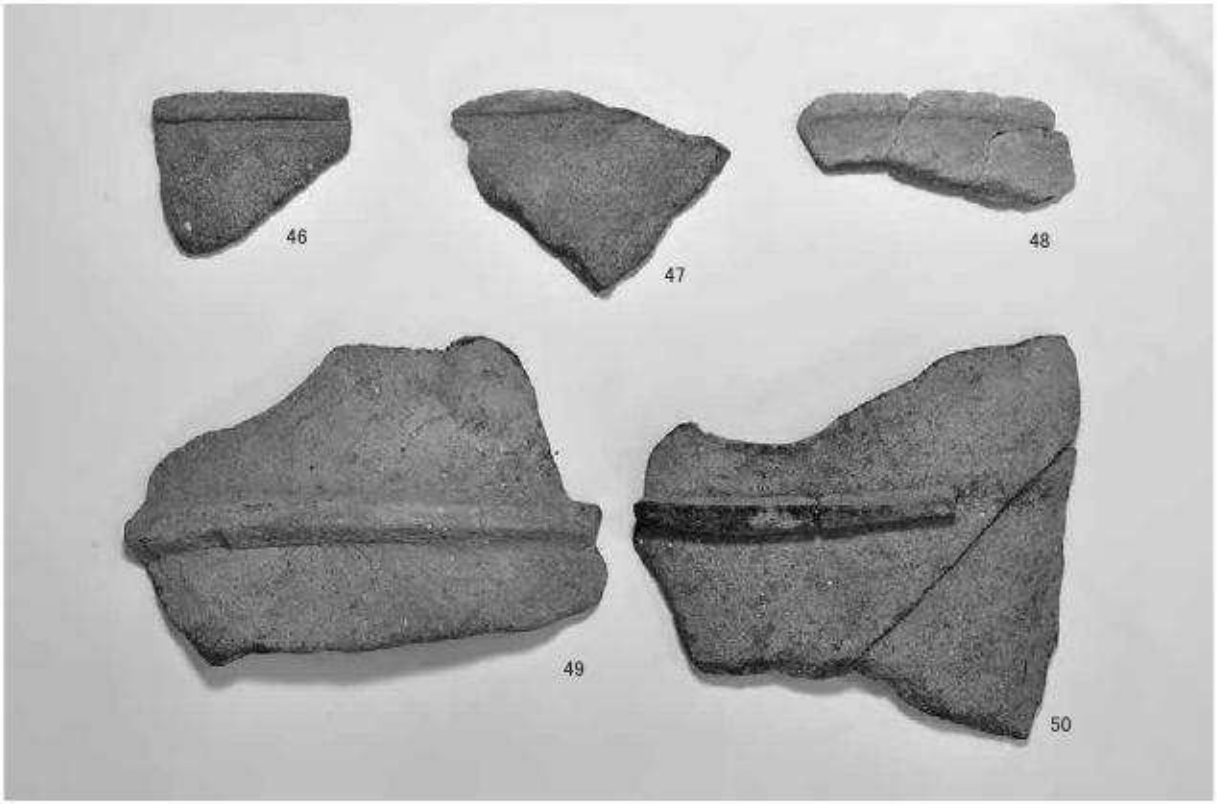


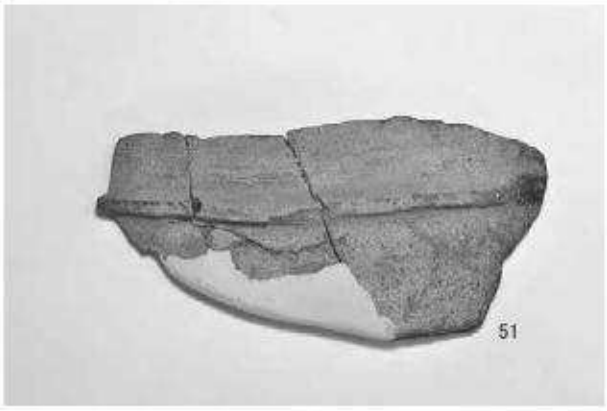


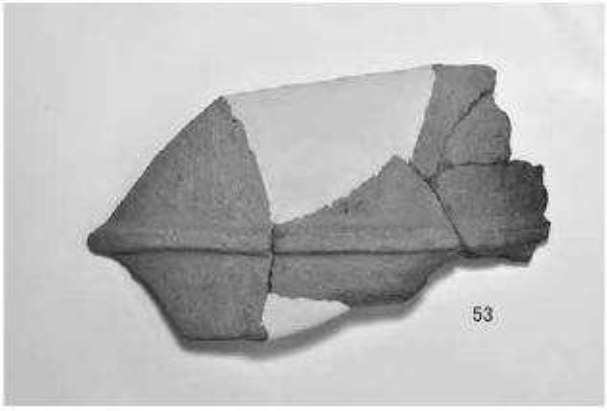


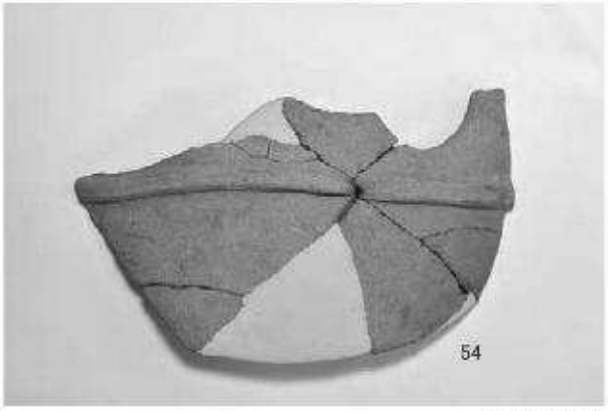
円筒埴輪③

図版104　出土遺物（4）

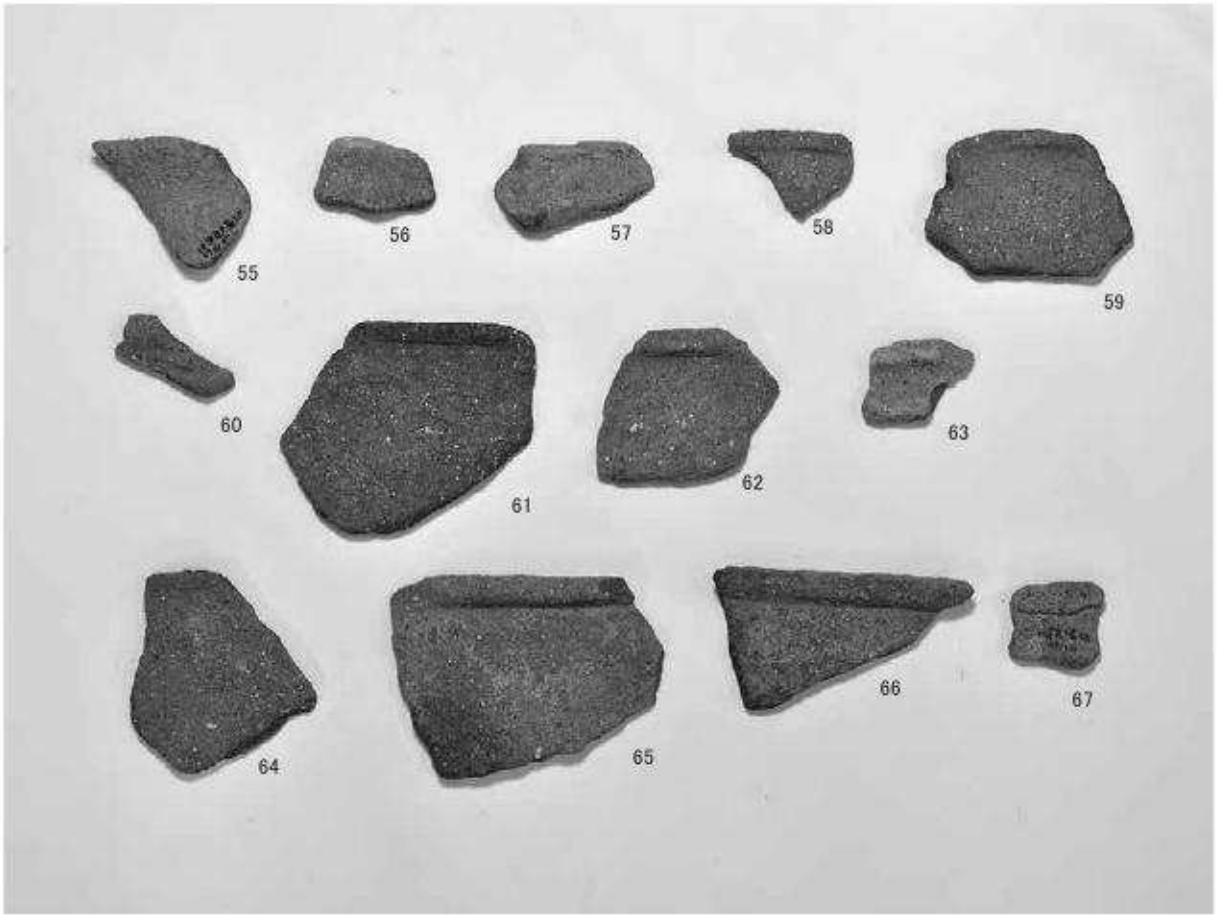


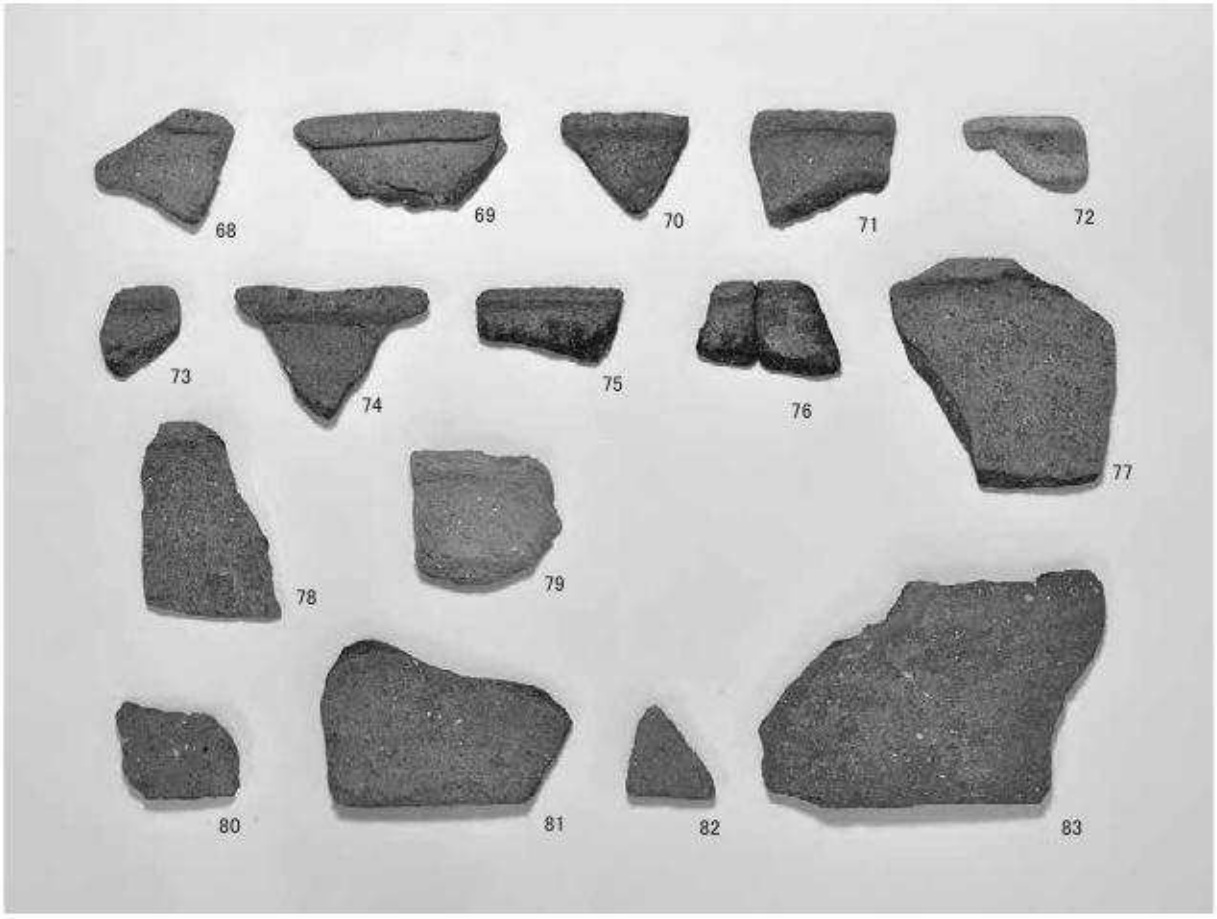




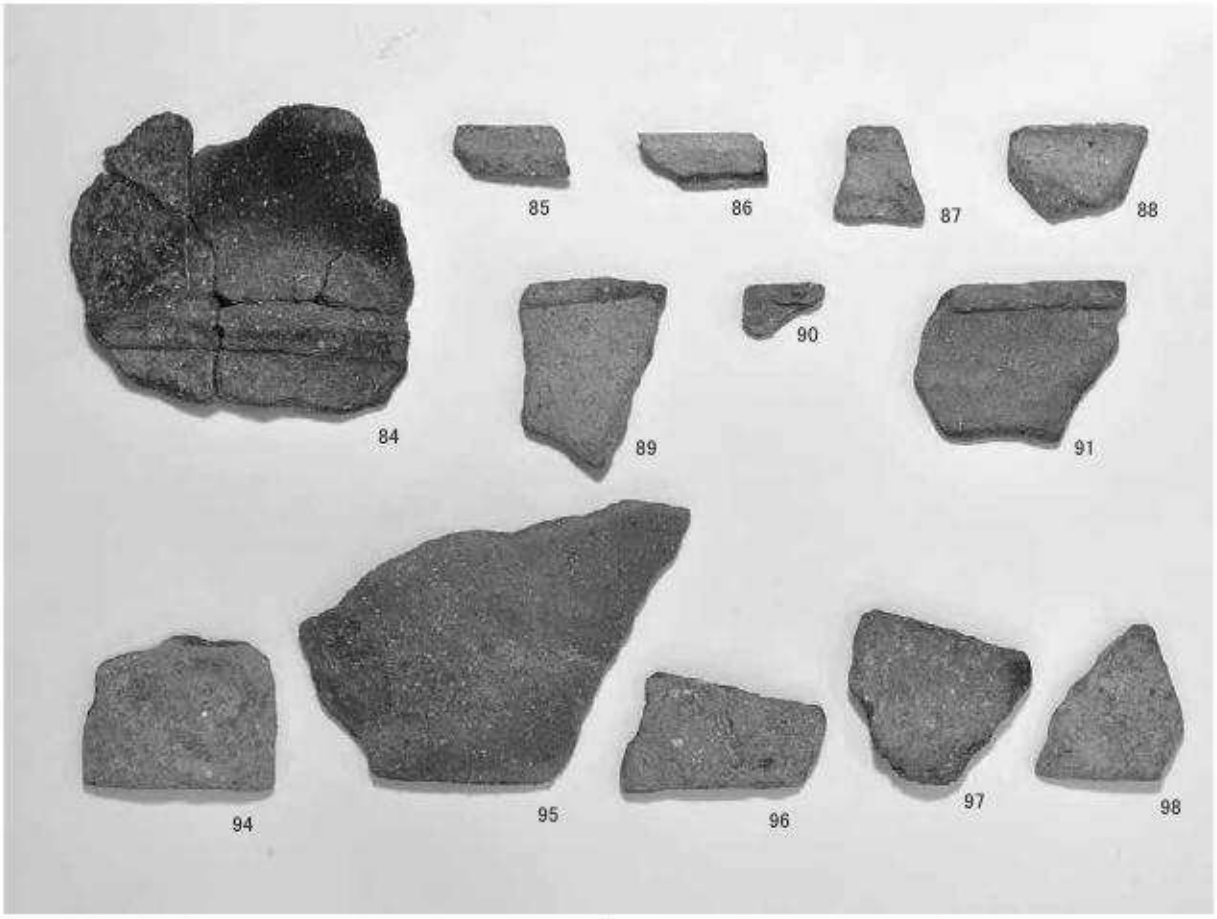


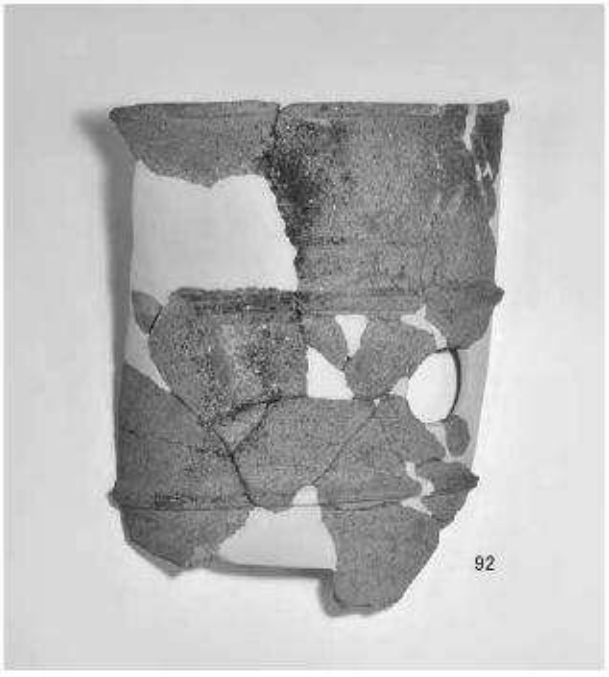
円筒埴輪④


55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67

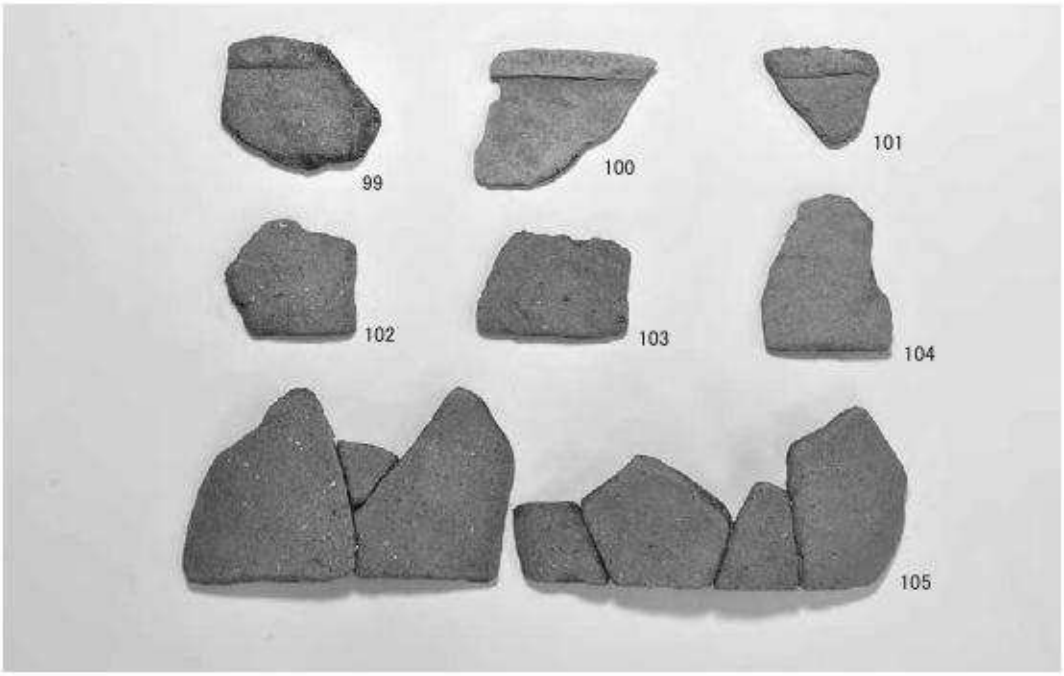

68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83

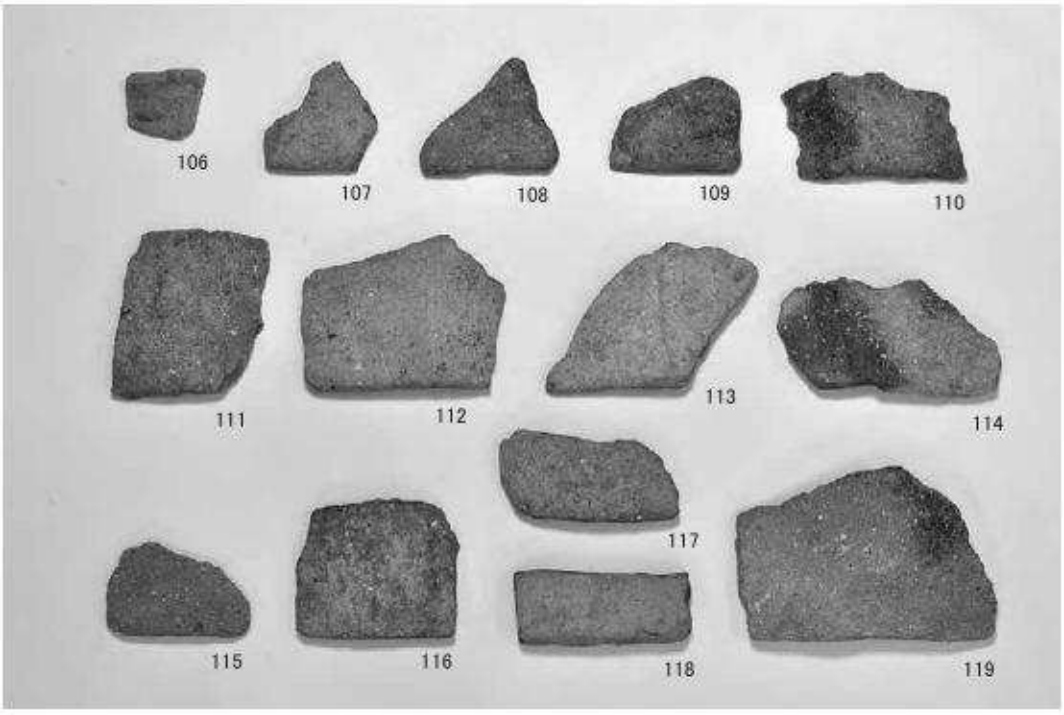
図版106　出土遺物（6）

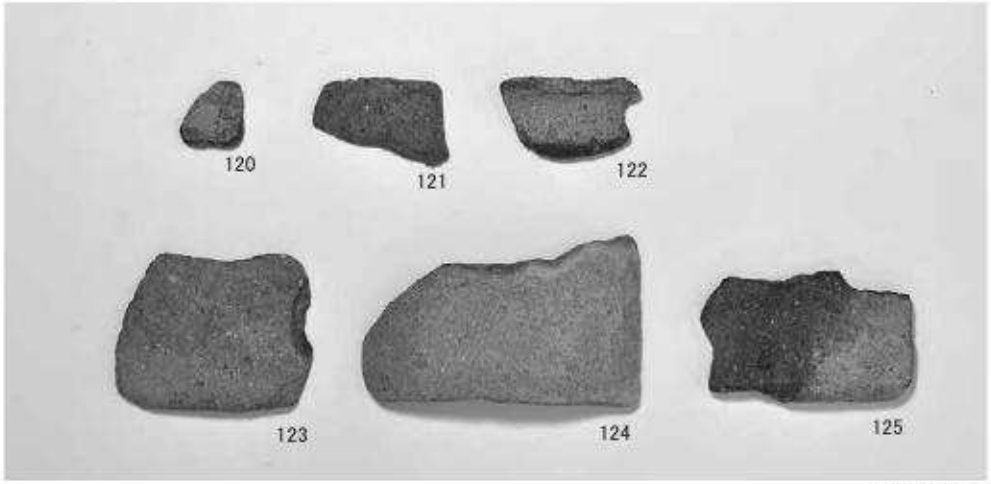




円筒埴輪⑥

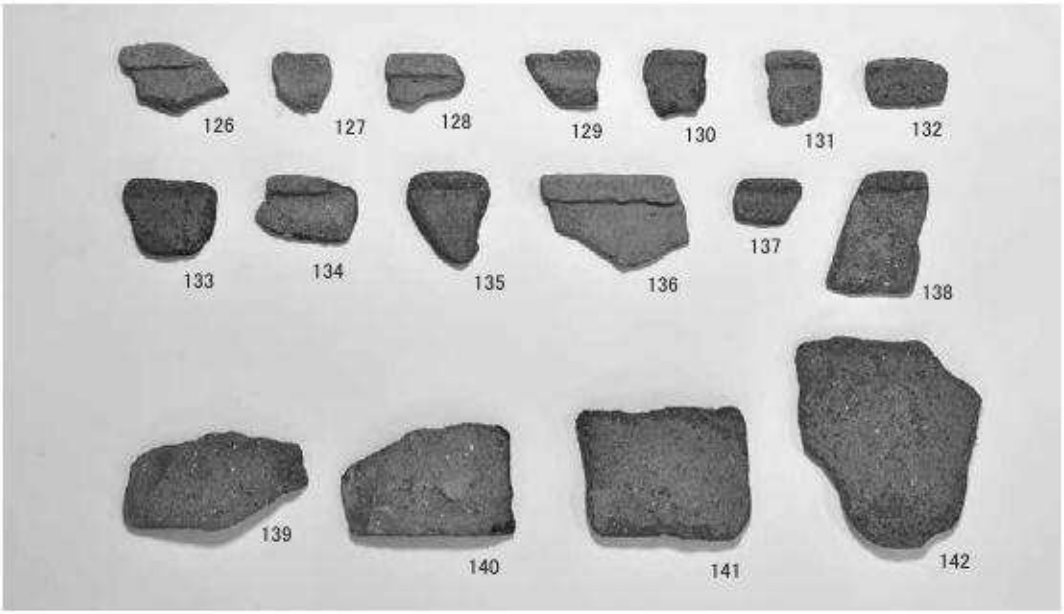

99
100
101
102
103
104
105

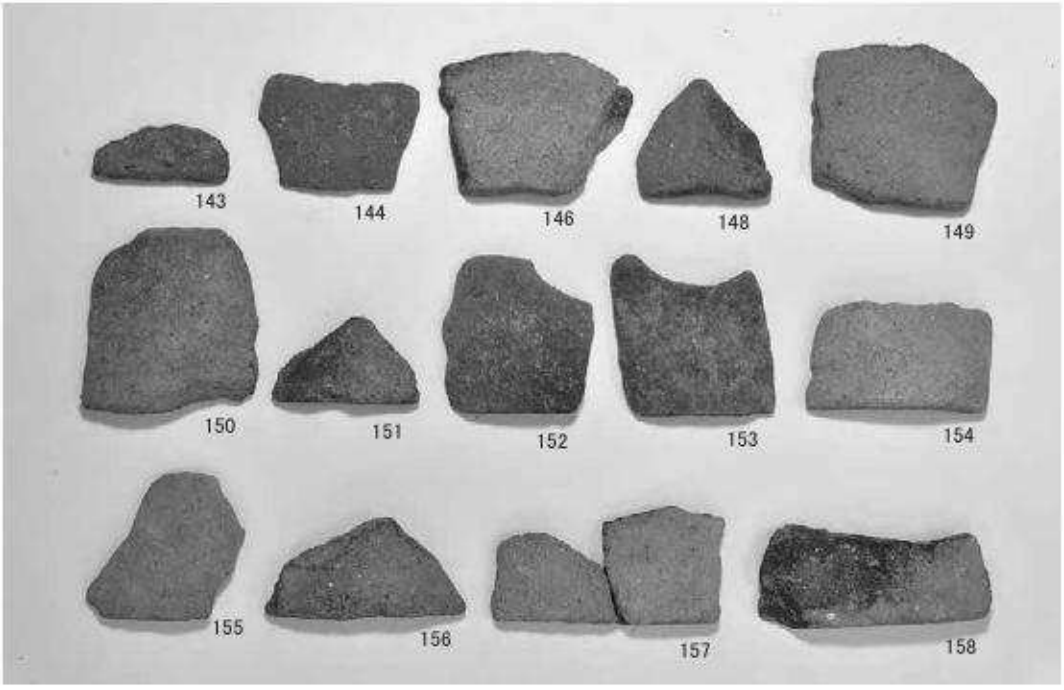

106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119

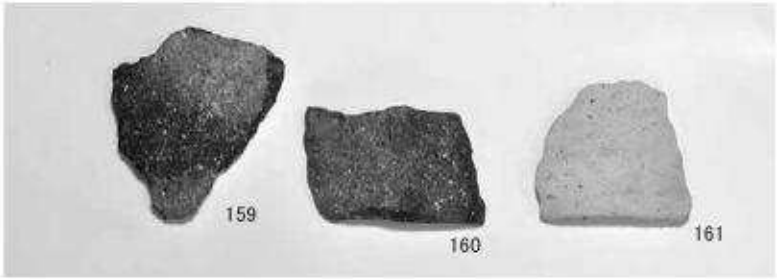

120
121
122
123
124
125

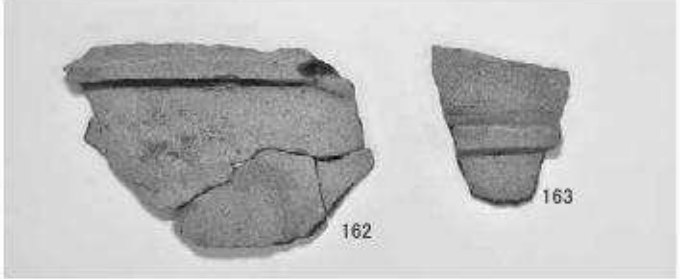
円筒埴輪⑦

図版108　出土遺物（8）

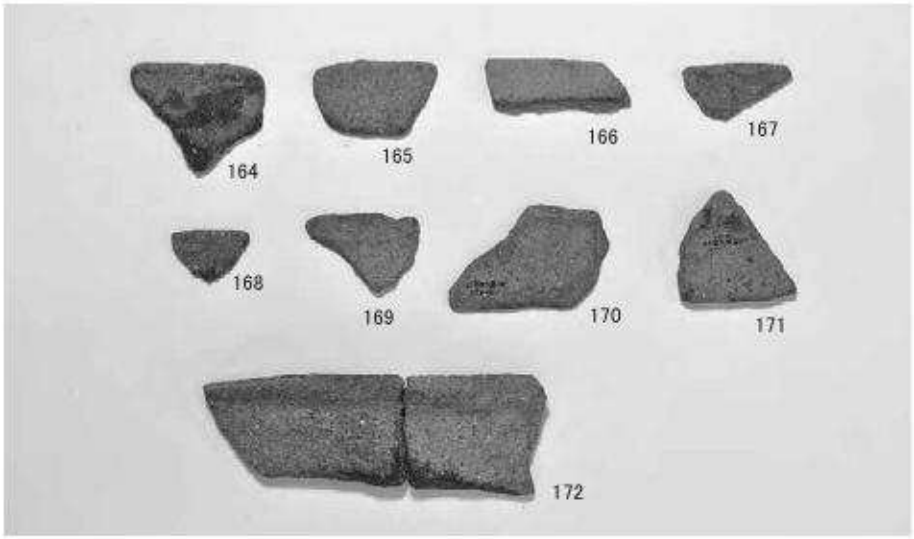


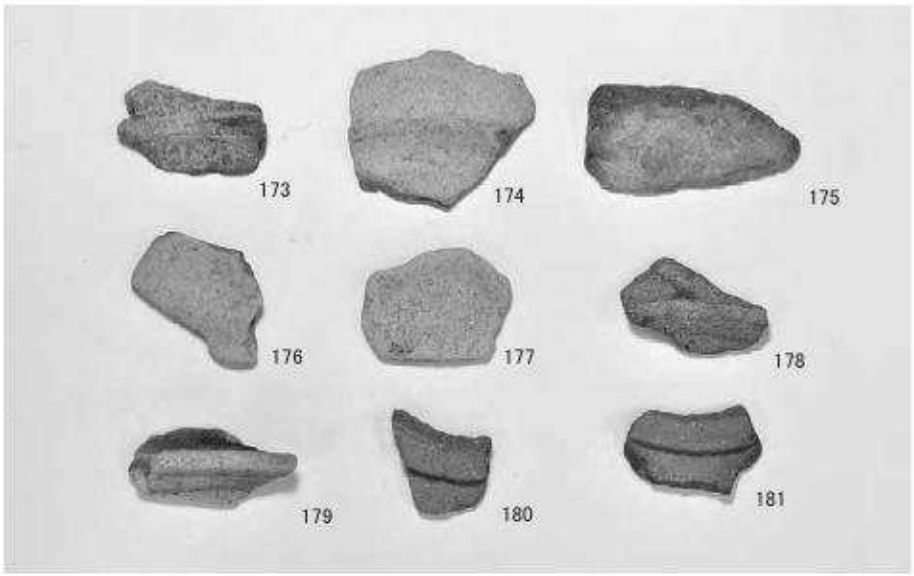


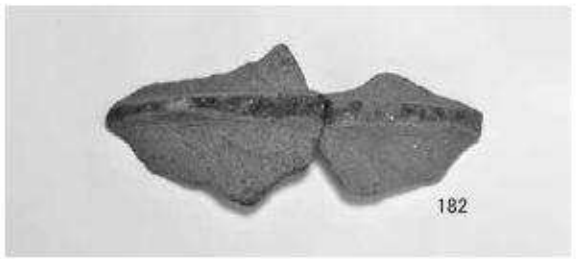




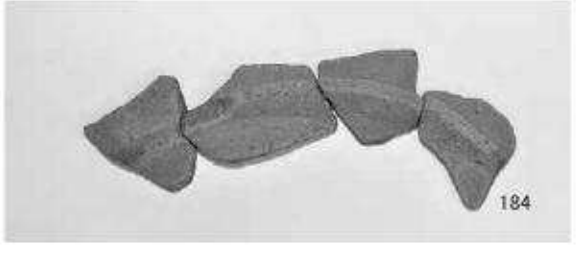
円筒埴輪⑧


164
165
166
167
168
169
170
171
172


173
174
175
176
177
178
179
180
181


182

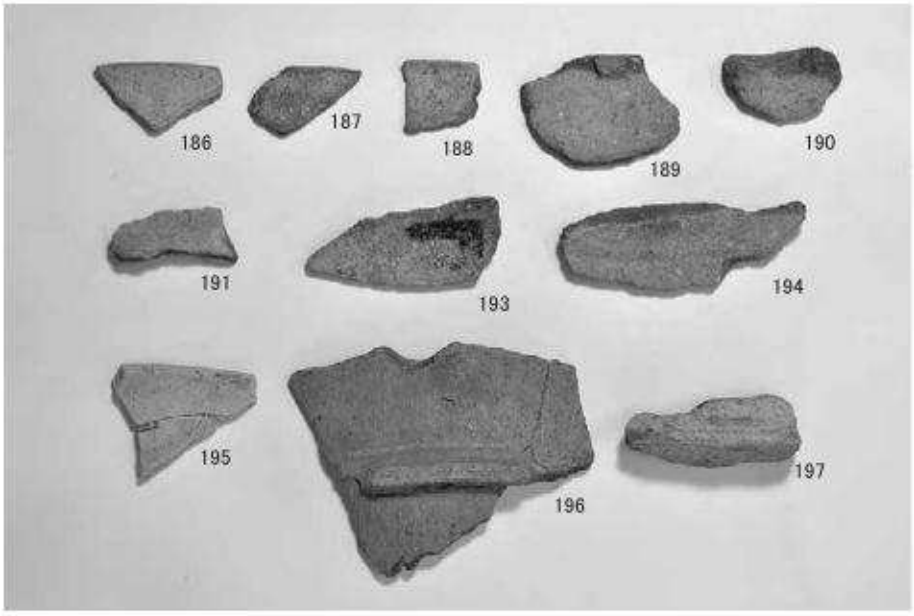
183

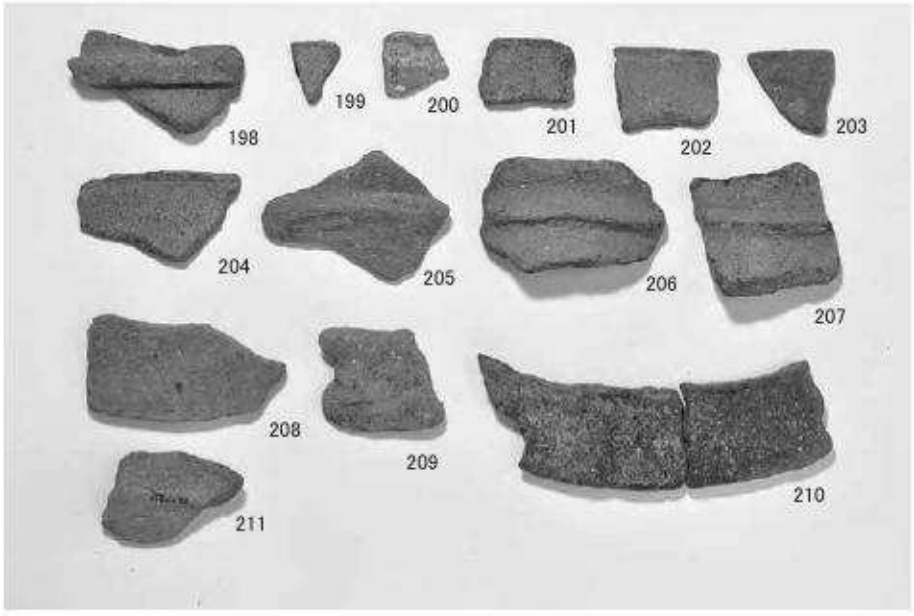

184

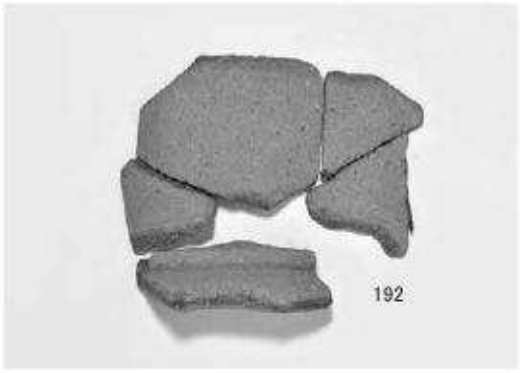
185

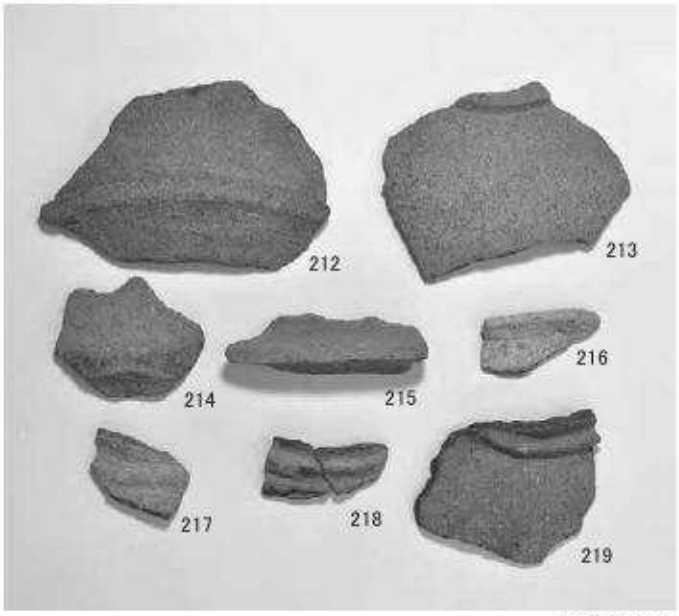
壺形埴輪①

図版110　出土遺物（10）

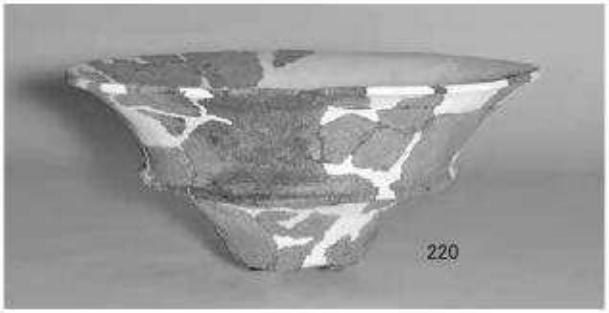


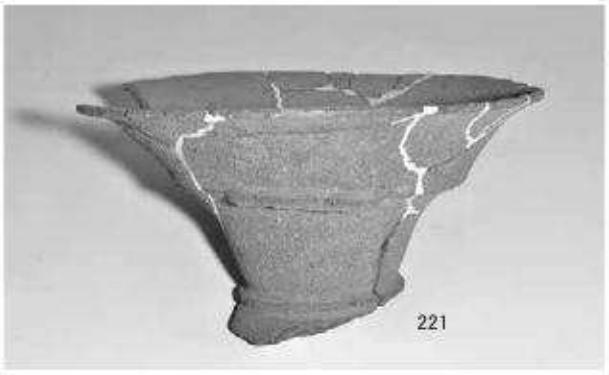


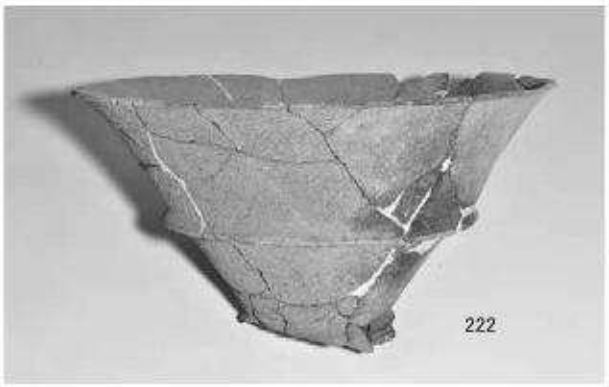




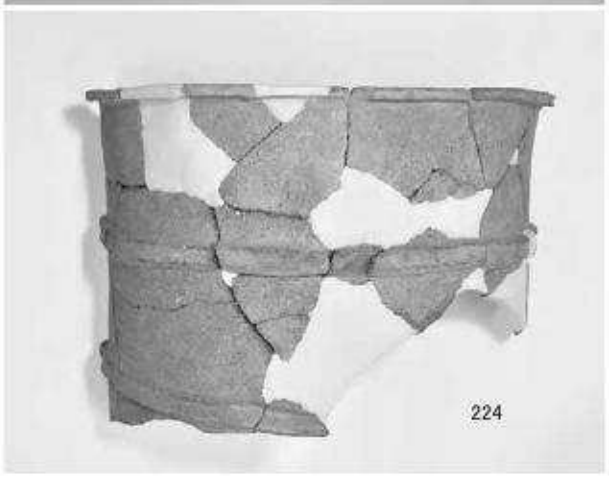
壺形埴輪②

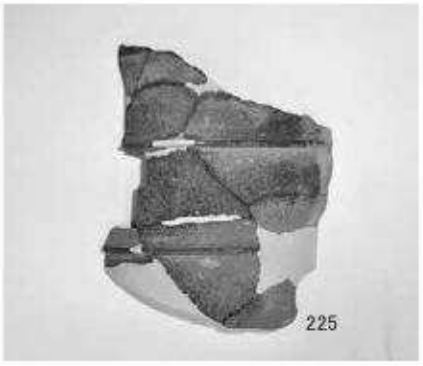

220


221


222

223


224


225

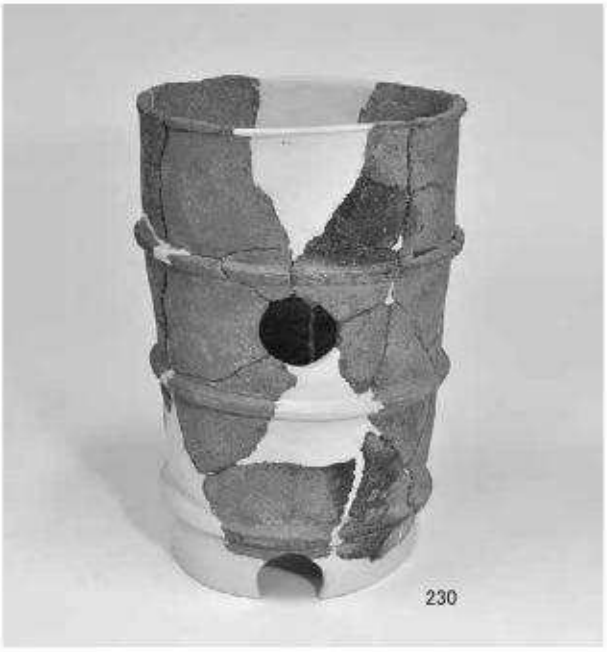
226

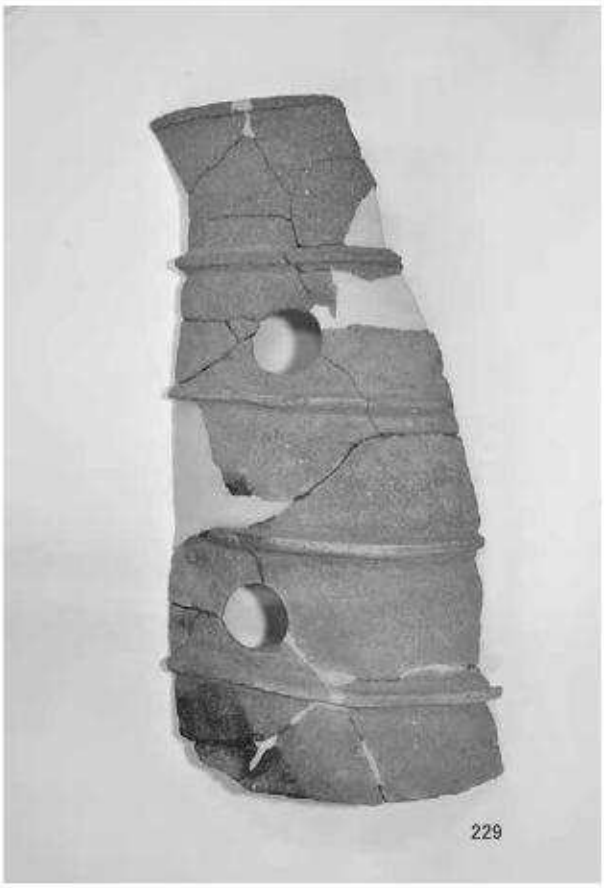
228

埴輪棺に使用された埴輪①

図版112　出土遺物（12）

227


230


229

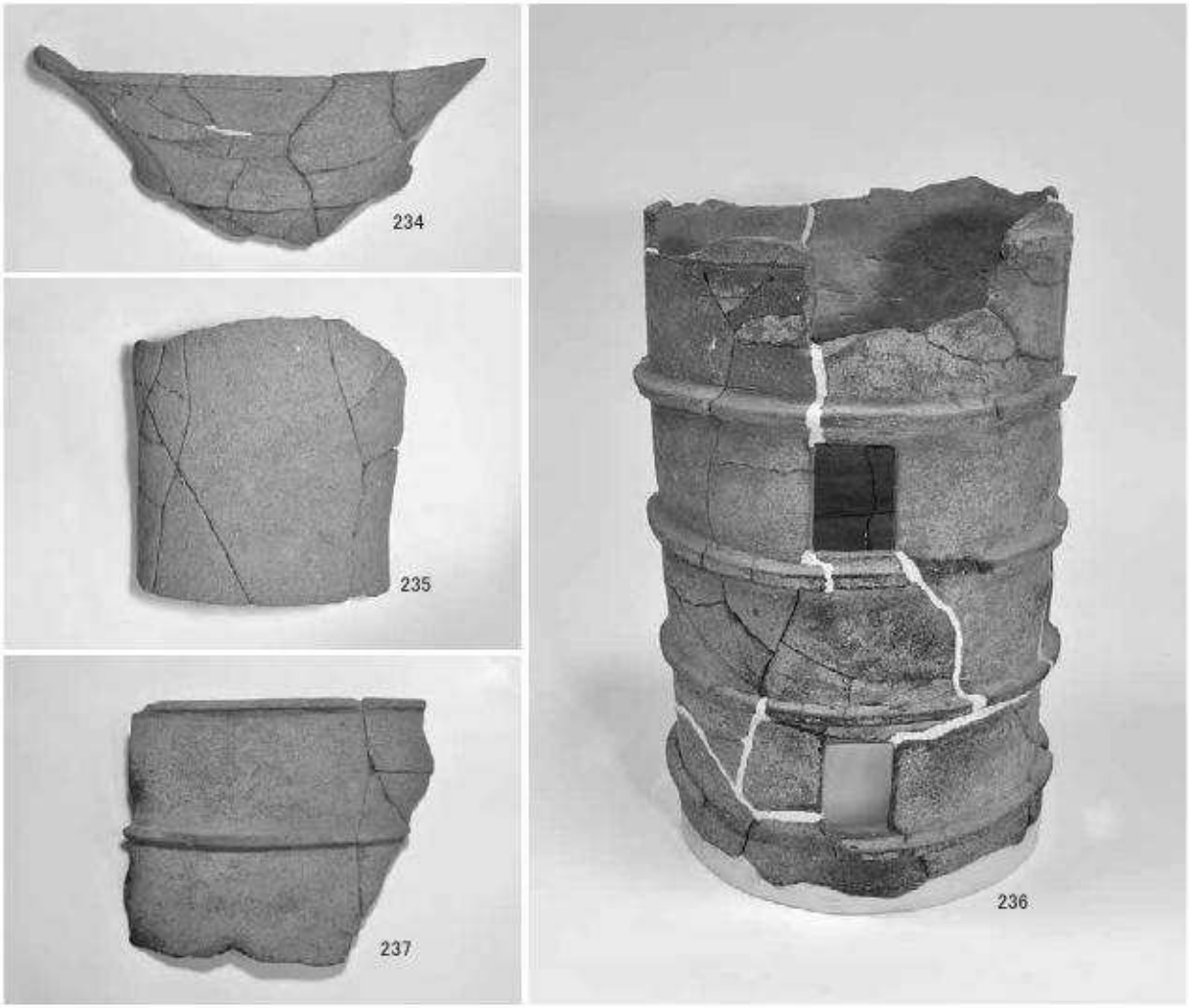
231

232

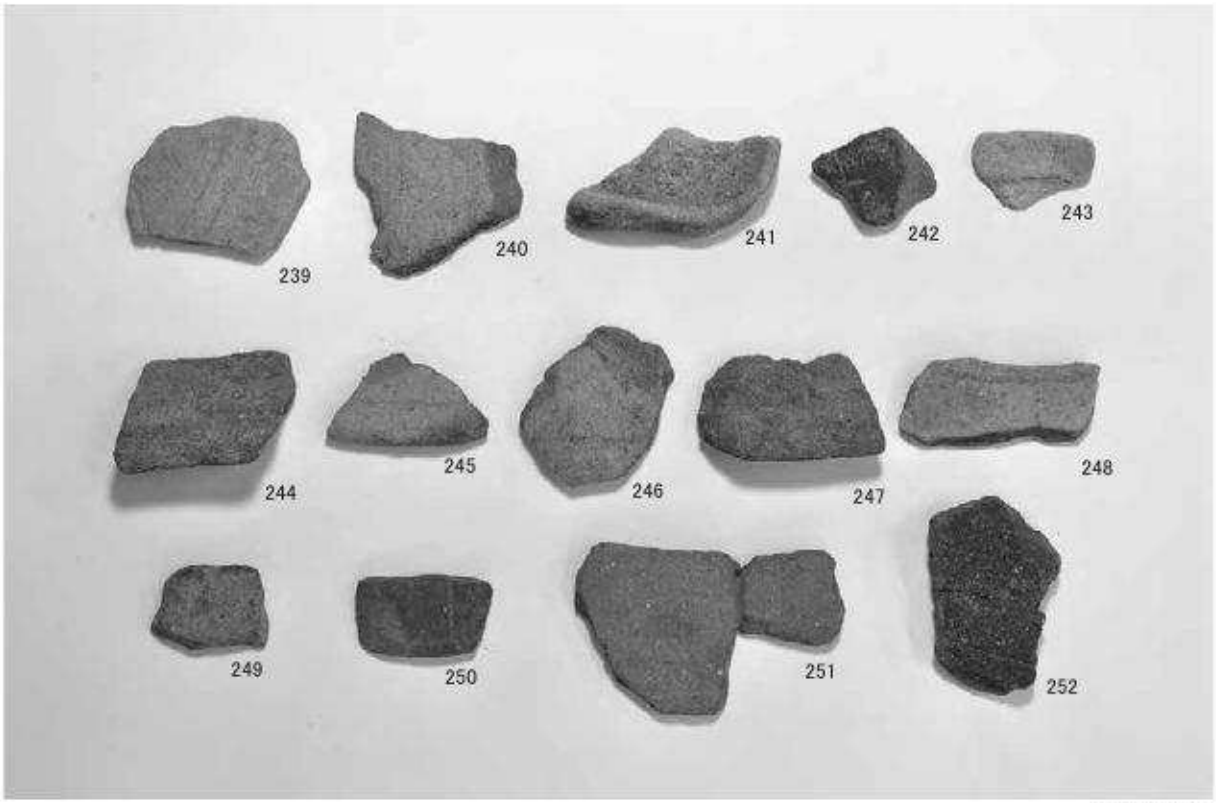
埴輪棺に使用された埴輪②

埴輪棺に使用された埴輪③

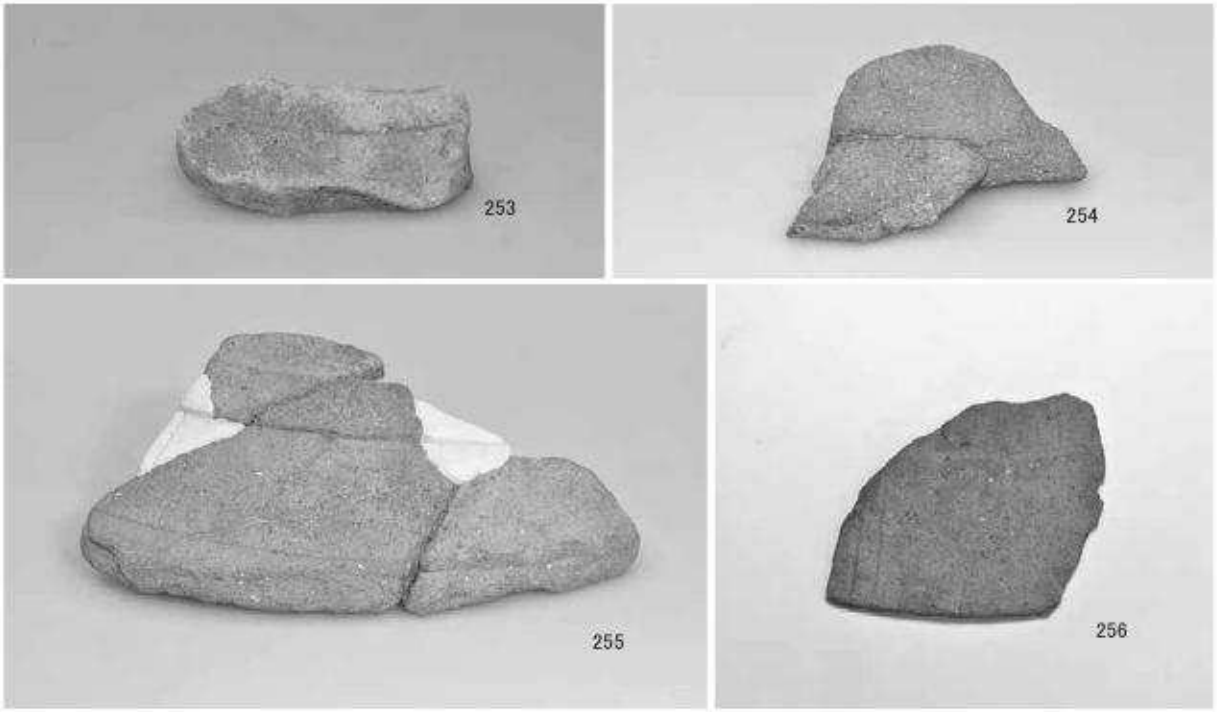
図版114　出土遺物（14）



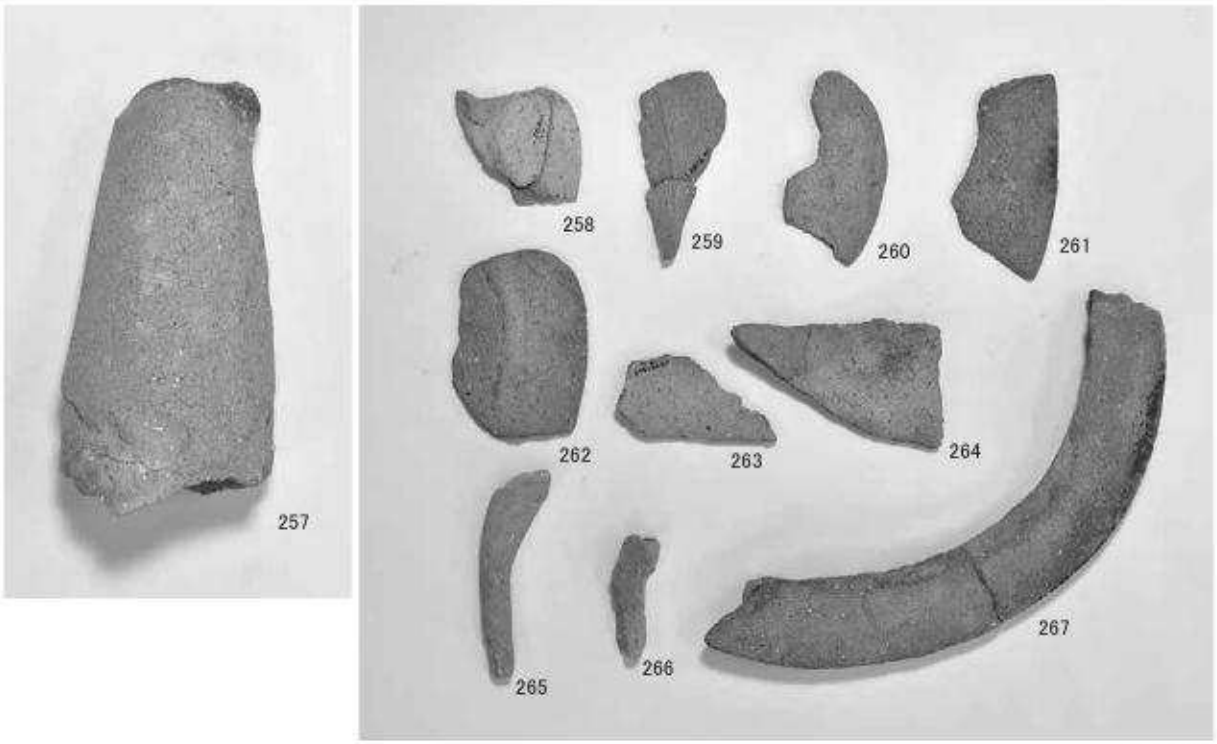
埴輪棺に使用された埴輪④



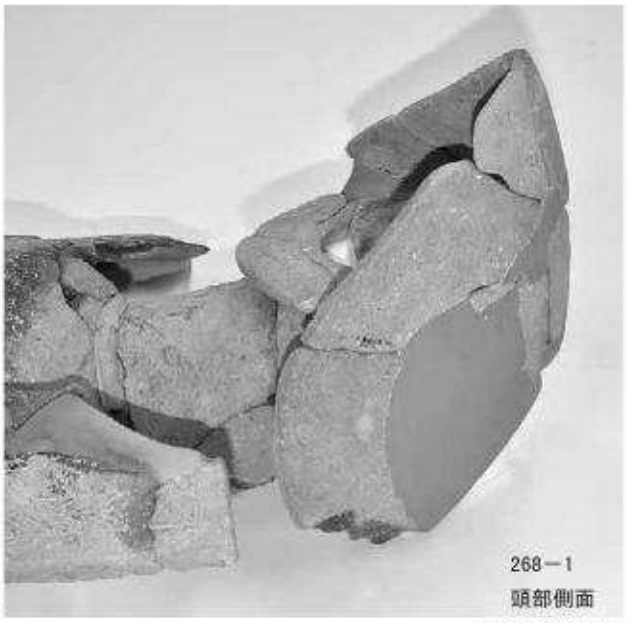
蓋形埴輪①



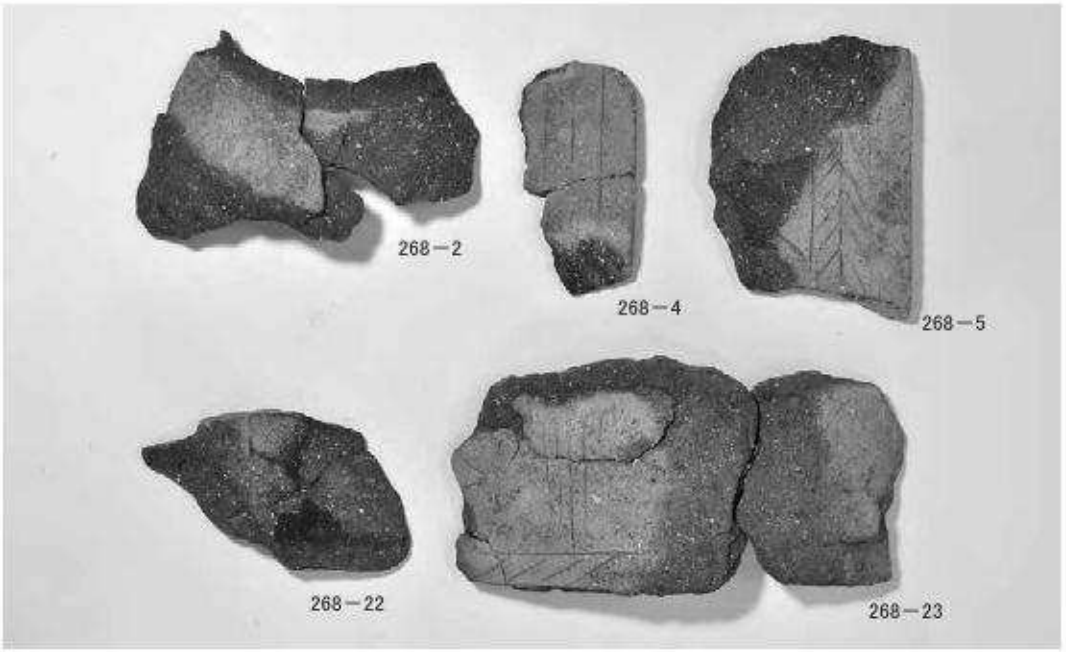
蓋形埴輪②

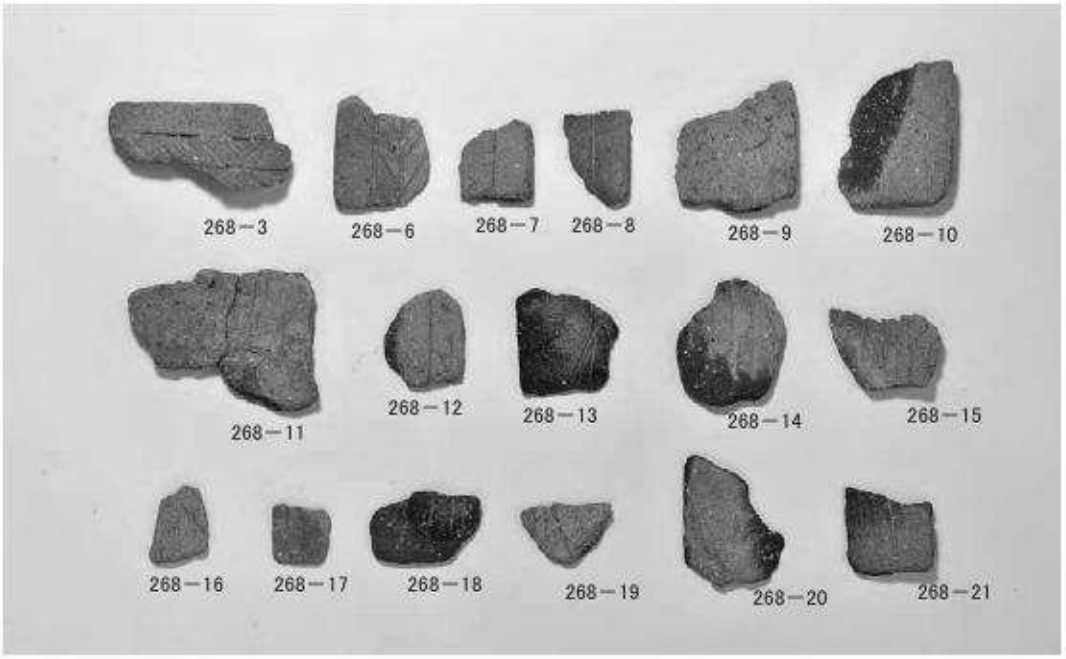


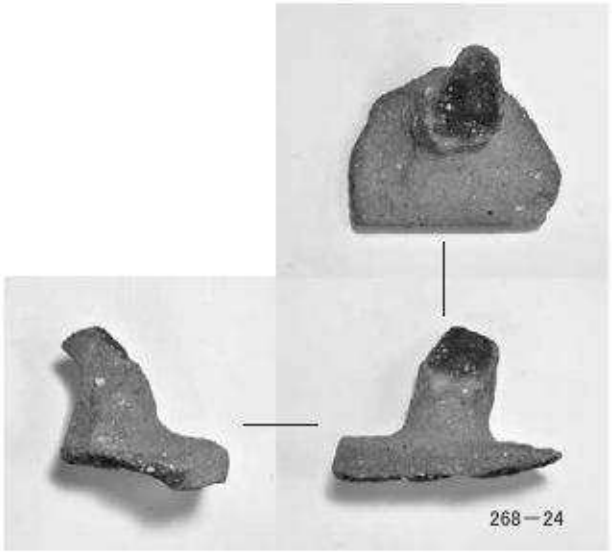
鳥形埴輪

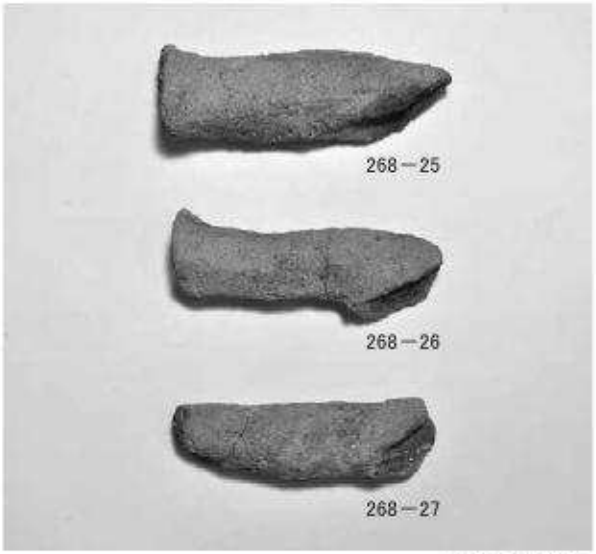


盾持人埴輪①


268－2
268－4
268－5
268－22
268－23

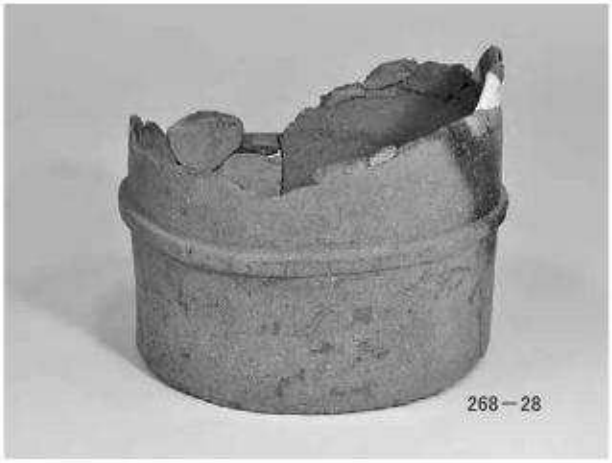

268－3
268－6
268－7
268－8
268－9
268－10
268－11
268－12
268－13
268－14
268－15
268－16
268－17
268－18
268－19
268－20
268－21


268－24

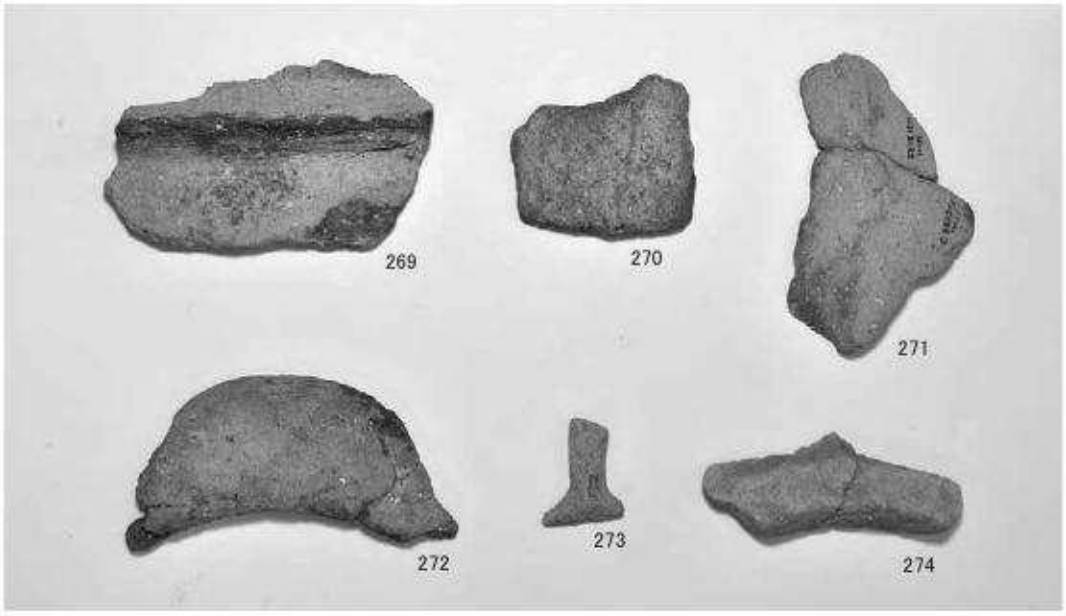

268－25
268－26
268－27

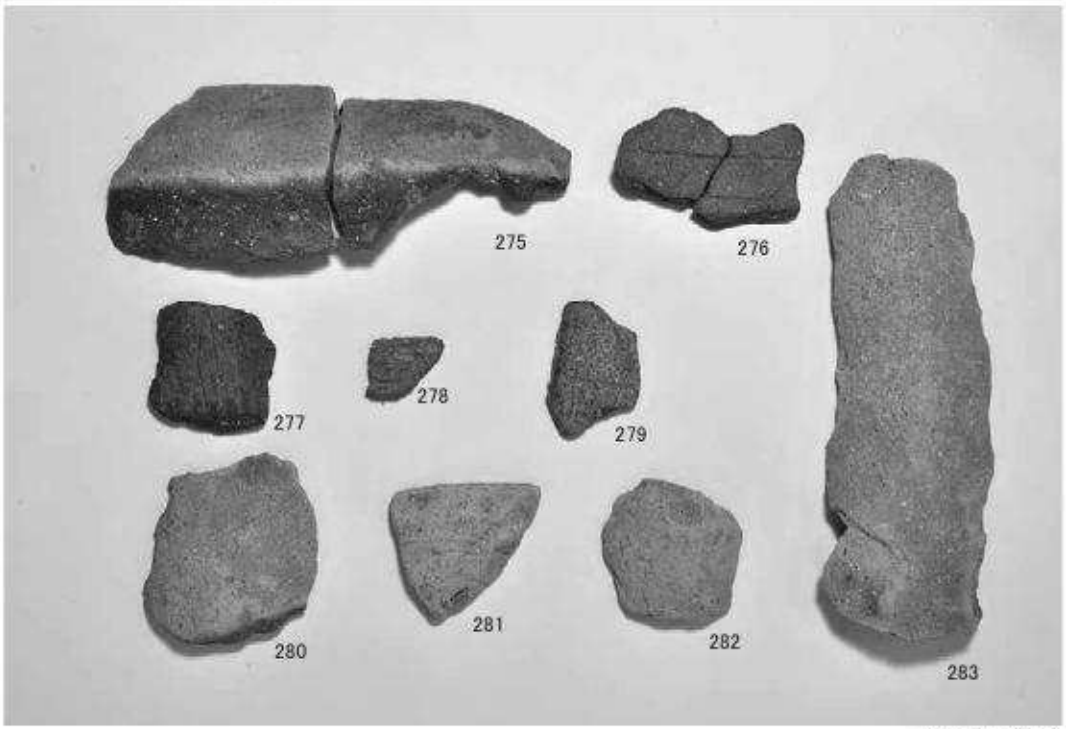
盾持人埴輪②

図版118　出土遺物（18）

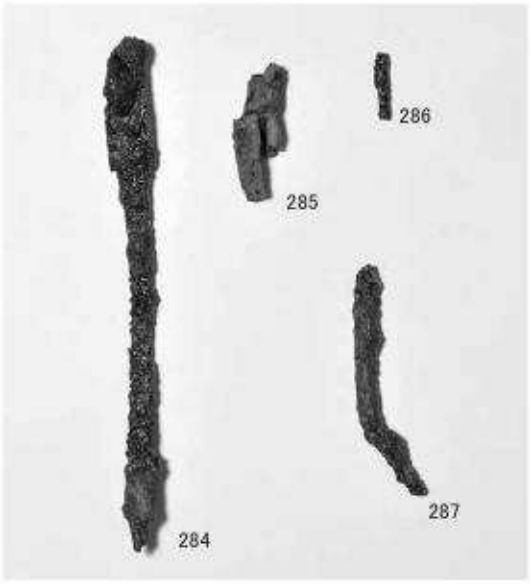


盾持人埴輪③

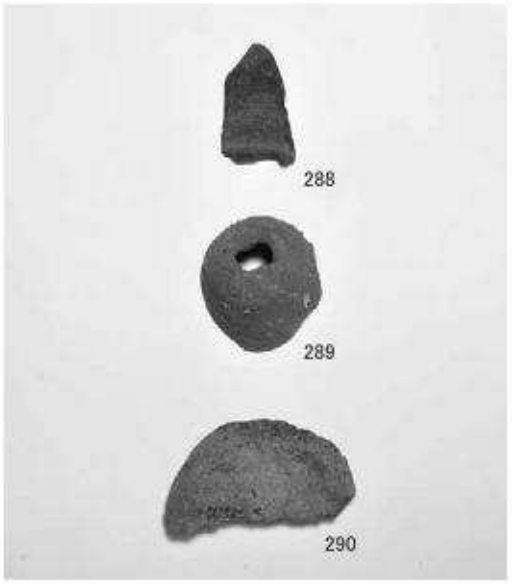




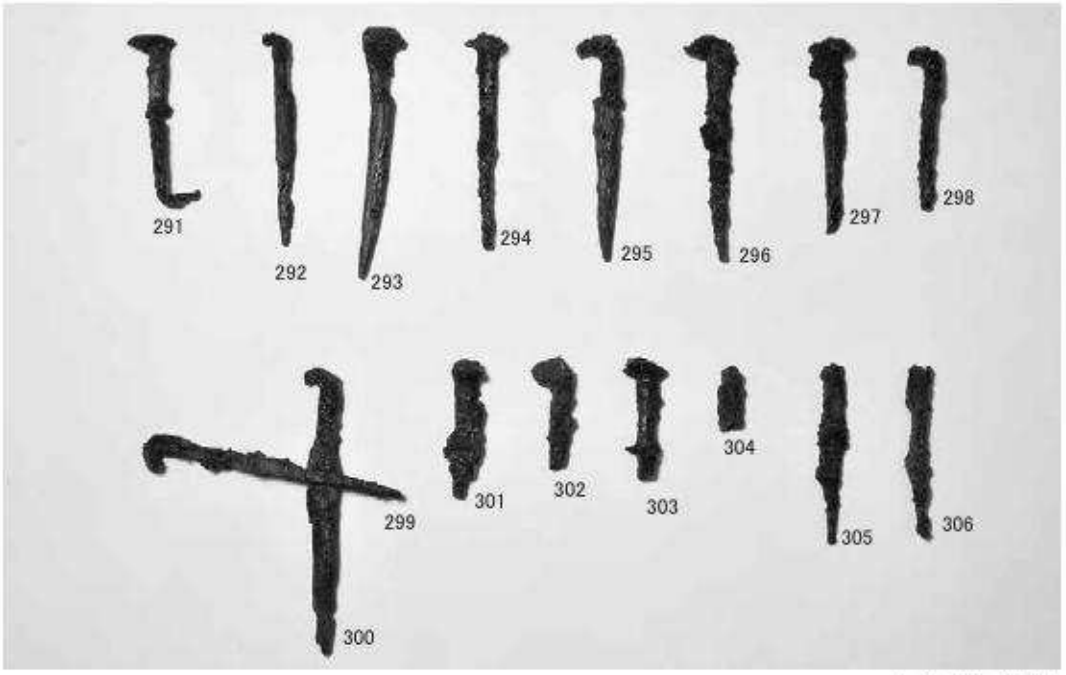
不明形象埴輪



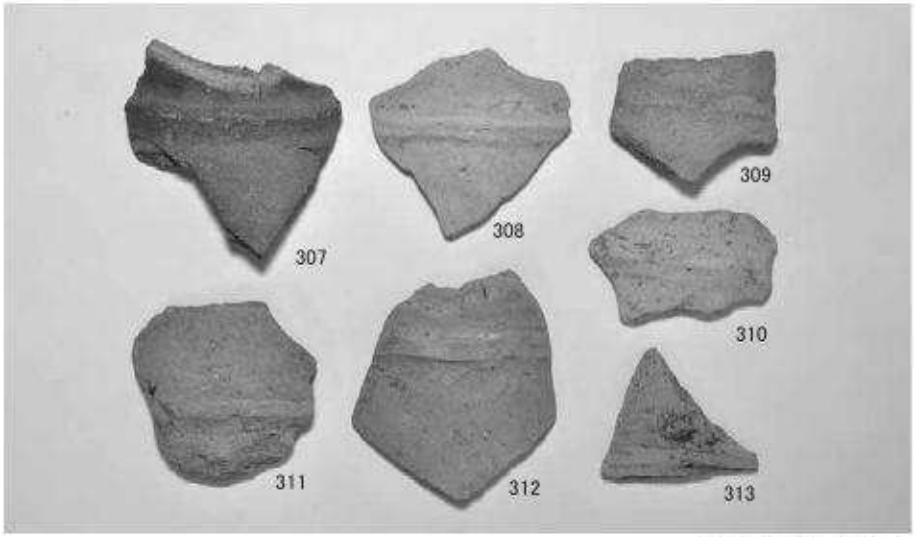
埴輪棺１出土遺物



墳丘盛土出土遺物



木棺墓出土遺物



古墳築造後の遺物①

図版120　出土遺物（20）

314

315

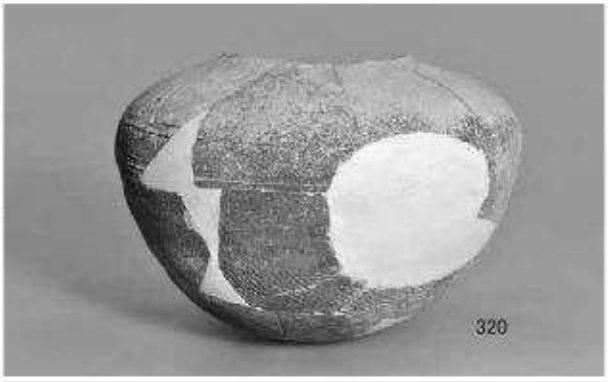
316

317

318

319

322


320

321

323

324

報告書抄録

書名	ちはらおおはかこふん 茅原大墓古墳
副書名	第１次～第６次発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第43集
編著者名	福辻淳（編集） 奥田尚 西口和彦 橋泉
編集機関	桜井市教育委員会
所在地	〒633－0074 奈良県桜井市芝58－２ TEL0744－42－6005 FAX0744－42－1366
発行年月日	2015年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
茅原大墓古墳 第１次	桜井市 茅原706	292061	11－D－519	34° 32′ 12″	135° 50′ 50″	1996.2.19～ 1996.3.6	23㎡	池改修に先立つ調査
茅原大墓古墳 第２次	桜井市 茅原723－1					2008.9.5～ 2008.10.22	44㎡	史跡整備に先立つ確認調査
茅原大墓古墳 第３次	桜井市 茅原722－1ほか					2009.10.23～ 2010.2.5	203㎡	史跡整備に先立つ確認調査
茅原大墓古墳 第４次	桜井市 茅原723－1ほか					2010.11.16～ 2011.3.24	238㎡	史跡整備に先立つ確認調査
茅原大墓古墳 第５次	桜井市 茅原723－2ほか					2011.11.9～ 2012.3.27	102.5㎡	史跡整備に先立つ確認調査
茅原大墓古墳 第６次	桜井市 茅原719					2012.12.7～ 2013.2.23	98.5㎡	史跡整備に先立つ確認調査
茅原大墓古墳 物理探査	桜井市 茅原722－1					2013.12.13～ 2013.12.19		

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
茅原大墓古墳 第１次～第６次	古墳	墳丘、周濠、渡土堤、葺石、埴輪列	円筒埴輪、壺形埴輪、盾持人埴輪、蓋形埴輪、鳥形埴輪、鉄製品、須恵器など	帆立貝形の前方後円墳

桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書　第43集

茅原大墓古墳

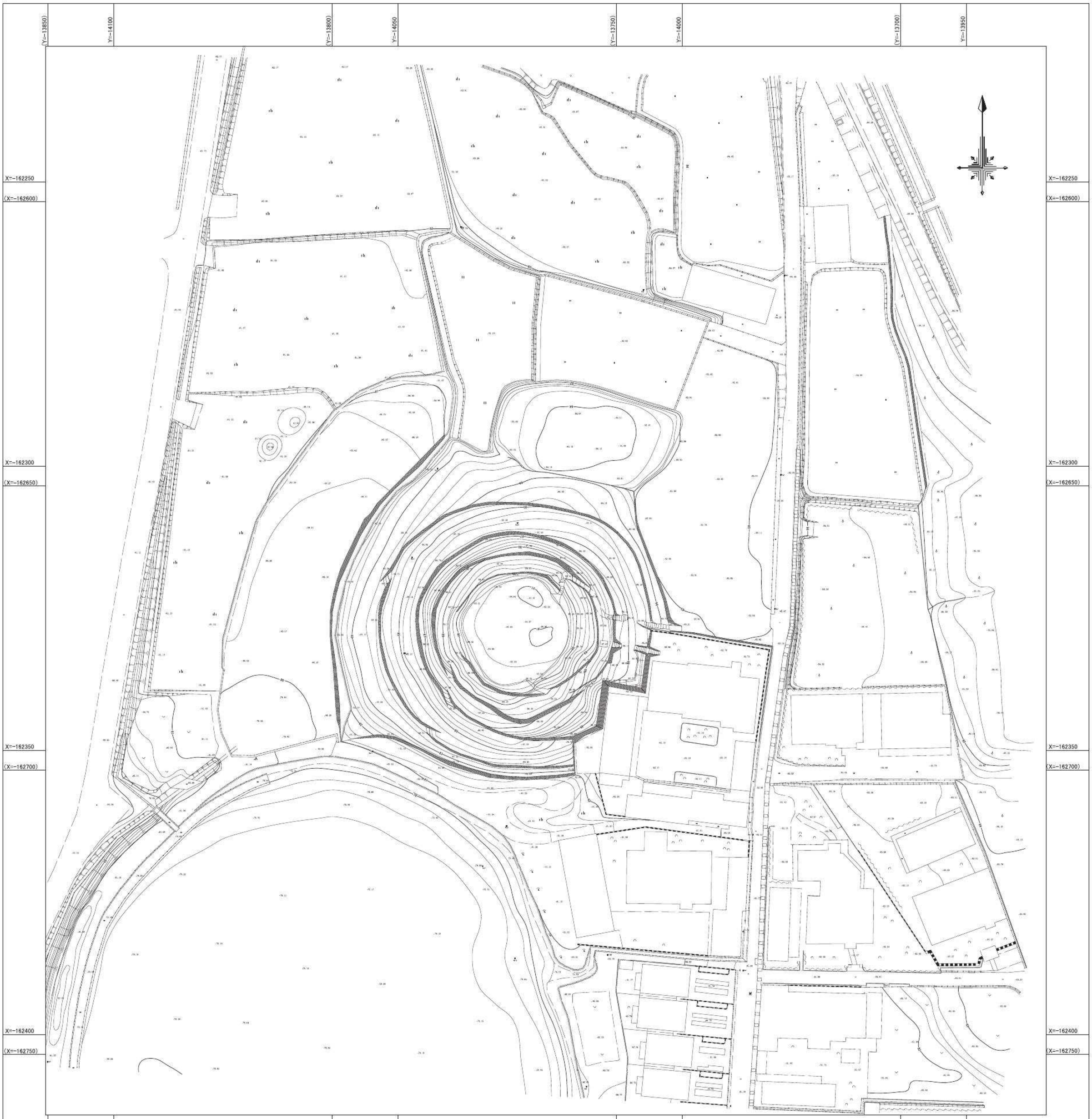
第１次～第６次発掘調査報告

発　行　桜井市教育委員会
〒633-0074　奈良県桜井市芝58－２番地
FAX　0744－42－6005
TEL　0744－42－1366

年月日　平成27年３月31日

印　刷　株式会社明新社
〒630-8141　奈良市南京終町３－464

付図1　茅原大墓古墳　測量図(S=1/400)



撮 影　平成21年　2月
測 図　平成21年　3月
座標系　第Ⅵ系(旧日本測地系)　等高線間隔　25cm

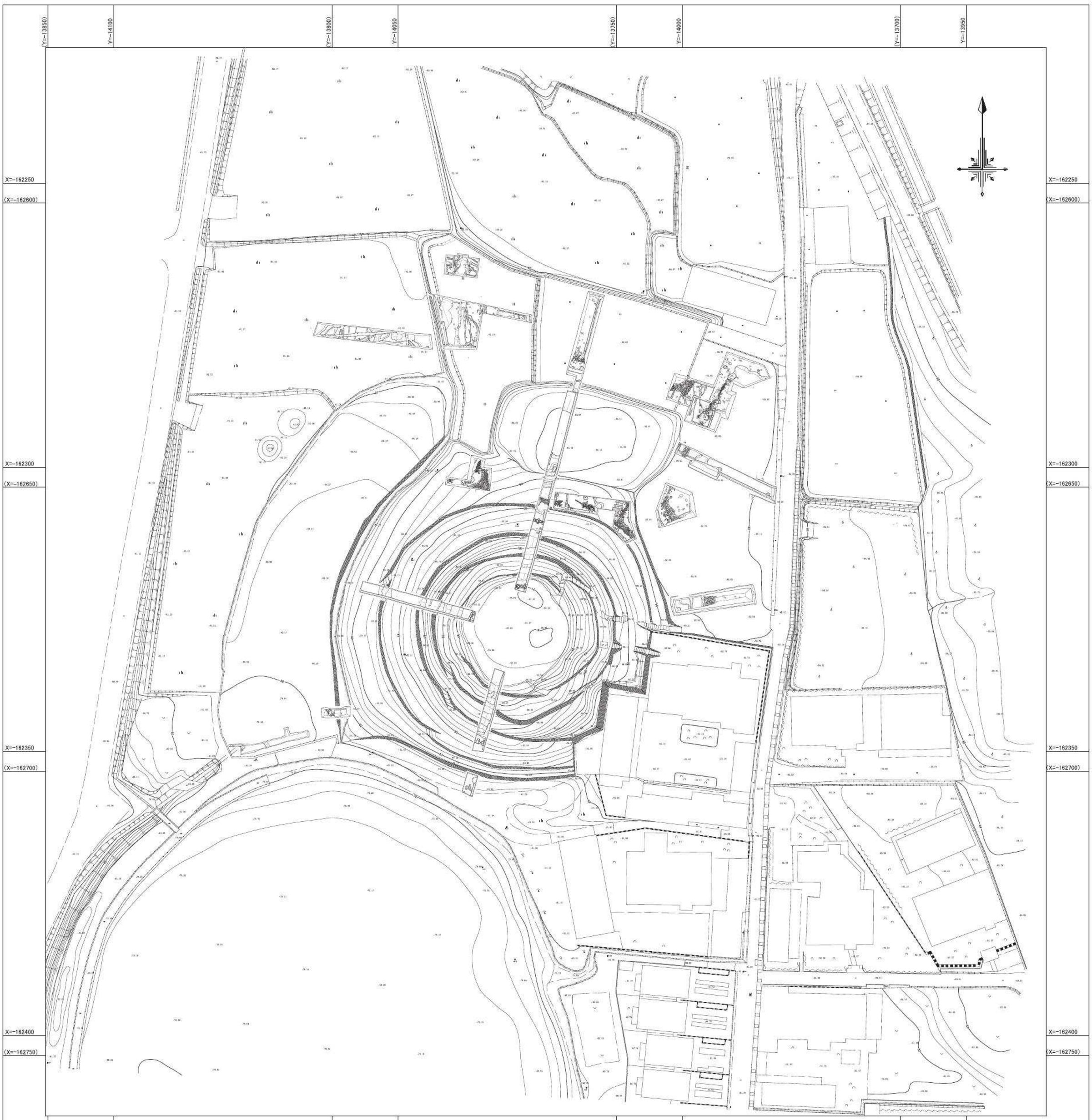
1:400

0　10　20　30　40　50　60　70　m

茅原大墓古墳
第1次～第6次発掘調査報告

2015. 3. 31
桜井市教育委員会

付図2　茅原大墓古墳　平面図(S=1/400)



撮 影　平成21年　2月
測 図　平成21年　3月
座標系　第Ⅵ系(旧日本測地系)　等高線間隔　25cm

1:400

0　10　20　30　40　50　60　70　m

茅原大墓古墳
第1次～第6次発掘調査報告

2015. 3. 31
桜井市教育委員会